山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第35集

国指定史跡
銚子塚古墳附丸山塚古墳
――保存整備事業報告書――

1988.3

山梨県教育委員会

序

山梨県東八代郡中道町に所在する本県の前期古墳を代表する銚子塚古墳、丸山塚古墳は国の史跡に指定されておりますが、先年この両古墳を含む曾根丘陵の地約40haが風土記の丘建設地に選定され、その建設・整備の基本計画が審議されて参っております。

その結果、まず上記両古墳の国庫補助による保存整備事業が、1983年度から5か年計画で実施されることになりました。この事業は古墳の保存を目的とするものですが、あわせて学術・文化・教育の場として活用を図るためのものであり、具体的資料を基に整備を実施していくこととなりました。本報告書はその具体的資料を得るため当センターが実施した3次にわたる発掘調査と、それを基に行った整備工事との結果をまとめたものであります。

この一連の発掘調査において両古墳とも墳丘の規模の復元が試みられるまでになり、また銚子塚古墳では前方部正面および周溝の形態の把握、段築、葺石、埴輪、木製品などの状況が、また丸山塚古墳では石室および周溝の形態の把握、段築、埴輪などの状況が合わせて明らかとなりました。このうち特に銚子塚古墳出土の壺形埴輪は口縁部に三巴と考えられる透かし孔をもつ類例のない形態であることが、また丸山塚古墳の石室の壁からは該時期のものとすればわが国最古と考えられる珠文が確認されるなど、新たに見るべき成果を上げることができました。

古墳は整形・芝貼りされ、また親しみやすく、かつ散策・休養などができるように極めて快適な環境に整備されましたので、今後多くの方々に活用していただけるものと信じております。それと共に史跡保護のために一日も早く万全の管理体制が樹立されますよう願っております。

本事業を遂行するに当たりましては、文化庁、調査指導委員、風土記の丘整備委員会の先生方にご指導を受け、また現地などで多くの先生方から直接、間接に指導・助言をいただきました。整備事業は監理を県土木部に依頼し、石和土木事務所に実施していただきました。ここにご指導を賜った諸先生、お世話になった関係機関各位、直接調査に当たられた皆様方に厚くお礼申し上げます。

ただ残念なことは、1976年以降風土記の丘建設委員会委員として、また1982年以降は同整備委員会委員長として、先頭に立って本事業の推進に献身してこられました井出佐重先生が、昨年9月17日溘焉として逝去されたことであります。末筆ながら、先生から賜った数々のご指導に改めて深謝し、謹んでご冥福をお祈りする次第であります。

1988年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長　磯貝正義

例　　言

1．本書は山梨県東八代郡中道町に所在する史跡銚子塚古墳附丸山塚古墳の国庫補助を受けた保存整備事業（昭和58〜62年度）の報告書である。

2．保存整備事業に伴う発掘調査は次のように実施した。

第１次調査　昭和58年12月16日〜昭和59年２月21日　銚子塚古墳および丸山塚古墳の墳丘遺存状況、範囲確認の予備調査

第２次調査　昭和59年６月11日〜12月22日　丸山塚古墳発掘調査

第３次調査　昭和60年７月26日〜12月12日　中間地帯および銚子塚古墳発掘調査

3．本書の執筆は坂本美夫が担当した。

4．実測図、出土遺物の整理は坂本を中心に実施した。

5．壺形埴輪の写真撮影は塚原明生（日本写真家協会々員）が行った。

6．実測、写真、出土遺物は山梨県埋蔵文化財センターに保管されている。

7．本報告書の作成にあたっては文化庁・調査委員・整備委員会の先生方、それに次の方々から御教示、御援助を得た。記して謝意を表する次第である。

石野博信、泉森　皎、千賀　久、茂木雅博、三木　弘

8．出土品整理参加者

後藤良美、若尾澄子、和田宏美、高野俊彦、宮沢公雄

凡　　例

1．トレンチ等のポイントはＡが墳丘側（内側）、Ｂが周溝側（外側）とする。なお脇の数字は標高を表わす。また、▲、△は変換点で、その上下の数字が標高を表わす。

2．遺物番号のカッコ内は出土トレンチ番号である。

3．銚子塚古墳のトレンチ番号を次のように変更した。

旧		新	旧		新	旧	新
1	→	1	10	→	10	18、くびれ	→ 13
2	→	2	11	→	11		
3	→	3	12	→	12		
4	→	4	13	→	5		
5．6は欠番			14	→	6		
7	→	16	15	→	7		
8	→	8	16	→	15		
9	→	9	17	→	14		

目　次

第１章　位置と環境 …… 1
　第１節　位置と地理的環境 …… 1
　　１．位置 …… 1
　　２．地理的環境 …… 1
　第２節　歴史的環境 …… 1
　第３節　銚子塚古墳および丸山塚古墳の概要 …… 2
第２章　保存整備事業の全体計画 …… 3
　第１節　経過 …… 3
　第２節　目的と方針 …… 3
　第３節　全体計画 …… 3
　第４節　整備および調査組織 …… 4
第３章　発掘調査 …… 6
　第１節　銚子塚古墳 …… 6
　　１．石室 …… 6
　　２．墳丘および周溝 …… 6
　　３．出土遺物 …… 18
　　４．小結 …… 20
　第２節　丸山塚古墳 …… 28
　　１．石室 …… 28
　　２．墳丘および周溝 …… 32
　　３．出土遺物 …… 34
　　４．石室の珠文について …… 39
　　５．石室の珠文処理経過 …… 41
　　６．小結 …… 41
第４章　保存整備工事 …… 43
　第１節　墳丘および周溝の復元 …… 43
　第２節　墳丘および周溝の保存整備工事 …… 44
　　１．整備方針 …… 44
　　２．整備計画および工事仕様 …… 44
　第３節　航空測量・史跡境界杭設置工事 …… 47
おわりに …… 53

挿　図　目　次

第１図　周辺地域の遺跡分布状況
第２図　銚子塚古墳・丸山塚古墳測量図
第３図　銚子塚古墳平面図
第４図　主体部平面図
第５図　石室展開図
第６図　トレンチセクション図　(1)
第７図　〃　(2)
第８図　〃　(3)
第９図　〃　(4)
第10図　葺石実測図(1)
第11図　〃　(2)
第12図　埴輪出土状況図
第13図　木製品出土状況図
第14図　埴輪タガ形態
第15図　土器
第16図　埴輪　(1)
第17図　〃　(2)
第18図　〃　(3)
第19図　〃　(4)
第20図　〃　(5)
第21図　木製品
第22図　丸山塚古墳平面図
第23図　主体部平面図
第24図　石室展開図
第25図　鉄製品
第26図　トレンチセクション図　(1)
第27図　〃　(2)
第28図　埴輪　(1)
第29図　〃　(2)
第30図　〃　(3)
第31図　石室珠文関係図
第32図　土工関係詳細図　(1)
第33図　〃　(2)
第34図　〃　(3)
第35図　土工関係詳細図　(4)
第36図　〃　(5)
第37図　中間地帯整備平面図
第38図　銚子塚古墳整備平面図
第39図　〃　土工平面図
第40図　〃　土工断面図
第41図　丸山塚古墳整備平面図
第42図　〃　土工平面図
第43図　〃　土工断面図
第44図　〃　排水工図

第１章　　位置と環境

第１節　　位置と地理的環境

１．位置

史跡銚子塚古墳附丸山塚古墳の所在する東八代郡中道町は、甲府盆地の南東縁に位置する。東を境川村、南を上九一色村、西を豊富村、北を笛吹川を挟んで甲府市と接し、東を境川、西を七覚川、北を笛吹川に画され、南を御坂山塊に遮られた南北に細長い町域を見せる。両古墳は、この町域の北西付近、下曾根地区に位置する。中央本線石和駅より南東方向約8.5㎞の距離にある。

２．地理的環境

甲府盆地南東縁を、北東から南西に向かって流れる笛吹川の左岸には、沖積地を挟んで東西約12.5㎞にわたり、標高270～400ｍの高さの曾根丘陵が続く。この丘陵の前縁は急傾斜で平地の沖積地へと落ち込む。さらに御坂山塊に源を発する中小河川によって浸食され、幾つかの舌状台地を形成する。その一つに滝戸川と間門川とによって形成された台地がある。この先端に標高340.2ｍの東山があり、その山麓を中心に分布している古墳群を東山古墳群と呼称している。銚子塚古墳と丸山塚古墳はその中核を占める一つであり、丘陵と平地とが接する傾斜変換線上の標高255ｍ付近に位置している。

第２節　　歴史的環境

本墳の所在する曾根丘陵は、先土器時代以来の遺跡が濃密に分布することで知られている。中道町地域を見ても先土器時代の立石遺跡・米倉山遺跡、縄文時代の上の原遺跡・城の越遺跡・弥生時代の米倉山遺跡・女沢遺跡など多くの遺跡が所在する。古墳時代になると曾根丘陵上には前期古墳を中心として多くの古墳が造られるよう

第１図　周辺地域の古墳分布状況

になる。特に中道町地域には東山古墳群・金沢古墳群・米倉山古墳群といった本県を代表する古墳群が造られる。

東山古墳群には銚子塚古墳（前方後円墳、全長169ｍ）、丸山塚古墳（円墳、直径72ｍ）、大丸山古墳（前方後円墳、全長100ｍ）、金沢古墳群には天神山古墳（前方後円墳、全長130ｍ）、米倉山古墳群には本県最古の、しかも唯一の前方後方墳と考えられる小平沢古墳といった、本県における最古で最大級に属する古墳が集中する地域であり、この地が古墳時代の前半代に本県の中枢地域を形成していた事を物語っている。

だが中道町地域も、５世紀中頃の築造と考えられる天神山古墳を最後に大型古墳は見られなくなり、逆に中道町以外の曾根丘陵上の周辺地域に比較的規模の大きな古墳が築造されるようになり、その勢力の衰退が窺がえ、さらに６世紀頃になると曾根丘陵地域全体が衰退をみせ、中心が盆地北縁地域に移って行く。しかし、最近調査された中道町地域の幾つかの後期古墳から、銅鋺、銀象嵌円頭太刀、金銅製馬具、挂甲小札などの出土が確認され、中道町地域に銚子塚古墳などを築いた伝統的勢力はやや勢力的に弱体化したものの、依然としてその勢力を温存していたことが捉えられるところとなった。

さらに東山古墳群の後背地には、弥生時代から古墳時代にかかると考えられる多数の方形周溝墓を検出した上の平遺跡や、その集落址の一部ではないかと考えられる立石・宮の上遺跡などが見られ、本県の古墳出現期の過程を考えるうえで欠くことのできない存在となっている。

第３節　　銚子塚古墳および丸山塚古墳の概要

銚子塚古墳

主軸を東西におき前方部を東に向ける前方後円墳で、傾斜変換線上に立地している。昭和３年に偶然の機会から後円部の竪穴石室が発見され、多数の副葬品が出土した。石室は割石小口積みで後円部のほぼ中央に位置し、墳丘主軸とほぼ直交する。遺物には内行花文鏡、三角縁神人車馬鏡、仿製三角縁神獣鏡、だ龍鏡、仿製画文帯神獣鏡、水晶製勾玉、硬玉製勾玉、碧玉製勾玉、碧玉製管玉、車輪石、石釧、杵形石製品、直刀、剣、鉄斧、鉄鏃などが見られ、東日本の古式古墳としては畿内的色彩の濃い古墳として注目される。三角縁神人車馬鏡は岡山県車塚古墳、群馬県三本木古墳出土鏡と同笵関係にある。

丸山塚古墳

銚子塚古墳の東側の傾斜変換線上に立地している円墳である。明治40年に偶然の機会に竪穴石室が発見され、石室内より多数の副葬品が出土した。画文帯神獣鏡、直刀、鉄斧、鉄鏃、鎌、石釧などが見られる。

第２図　銚子塚古墳・丸山塚古墳測量図（太線指定範囲）

第２章　　保存整備事業の全体計画

第１節　　経過

山梨県東八代郡中道町下曾根に所在する銚子塚古墳は昭和３年、丸山塚古墳はさらに遡る明治40年にそれぞれ石室が発見され、県内はもとより東日本最大規模の前方後円墳および円墳として、豊富な副葬品などは古代史解明のうえに欠くことのできない重要な存在として位置ずけられ、昭和５年２月28日に国指定の史跡となった。

その後、昭和49年にこの地に史跡を中心とした「風土記の丘」、また昭和50年に史跡周辺地域に建設省の都市公園「曾根丘陵公園」の建設が決定され、あわせて「風土記の丘・曾根丘陵公園」として用地40.4haの買収が計画的に進められることになった。

県教育委員会は、このうちの史跡部分の買収と整備および区域内の遺跡の調査を実施することになり、昭和51年に風土記の丘建設委員会を設置、昭和57年度以降は風土記の丘整備委員会を設置して、史跡および区域内の遺跡の保存・整備などの基本計画を策定してきた。

その結果、史跡地域に関しては昭和52・53年度の２箇年で、銚子塚古墳の北西の周溝の一部を除き買収、公有地化された。これに伴い昭和58年度から昭和61年度にかけて保存整備事業が実施されることになった。なお昭和61年度に保存整備事業の最終年度が、昭和62年度まで繰り延べされることとなった。

第２節　　目的と方針

本事業は、史跡の公有地化後の古墳の保存を目的として整備を行い、もって学術、文化、教育の場として活用を図るものである。

古墳の保存整備は、まず古墳の遺存状況を把握するための発掘調査を実施し、その結果を検討のうえ規模、形態の復元をおこない整備実施設計書を作成、かつ整備に当たっては墳丘斜面などの掘削は極力控え、必要に応じて土を補充して整形、芝貼りするのを基本とした。また墳頂のクヌギや松などの樹木も歴史的自然空間として、芝の育成に支障にならない程度の間伐とした。さらに墳丘上の四阿および石碑、祠などは景観上墳丘の下に移設することとした。

史跡の活用としては、親しみやすく、かつ散策・休養できる場所としての修景をも加味した。具体的には外形の盛土整形、周溝の砂利敷き、石室の位置の表示とその解説板の設置、さらに中間地帯は休養場所的性格を持たせ芝貼り、植栽を行い、あわせて四阿、ベンチ、照明施設、説明板の設置を行う。さらに丸山塚古墳、銚子塚古墳、中間地帯を相互に結ぶための園路を設けることなどである。

第３節　全体計画（年度計画）

昭和58年度

銚子塚古墳、丸山塚古墳の墳丘および周溝の遺存状況確認のための考古学調査（第１次）、史跡境界杭と説明板の設置、航空測量による200分の1の実測図作成。

昭和59年度

丸山塚古墳の石室位置および形状、墳丘の段築、周溝の考古学調査（第２次）。丸山塚古墳整備実施設計の委託、墳丘整形、芝貼り、園路整備、石室位置表示、墳丘上排水工事。保存整備事業第１・２年次概報刊行。

昭和60年度

銚子塚古墳、丸山塚古墳の中間地帯、銚子塚古墳の石室の位置、形状、墳丘の段築、葺石、埴輪、周堤などの考古学調査（第３次）。中間地帯および銚子塚古墳の整備実施設計の委託。丸山塚古墳の周溝の砂利敷き、排水工事、石室の説明板設置、中間地帯の芝貼り、植栽、園路整備と休憩・照明施設、説明板の設置。保存整備事業第３年次概報刊行。

昭和61年度

銚子塚古墳の墳丘整形、園路、石室表示、周溝部排水工事、砂利敷き。

昭和62年度

銚子塚古墳の芝貼り、周溝部および周辺部の植栽。保存整備事業報告書の刊行。

なお、この整備事業の監理は県土木部に依頼し、石和土木事務所において実施した。

施工業者

丸山塚古墳　　墳丘土工、芝貼り、植栽 ― (株)富士緑化、　周溝土工 ― (株)中道興業
　　説明板 ― 大面建設(株)

銚子塚古墳　　墳丘・周溝土工 ― (株)中道興業・荻野工務所、
　　墳丘芝貼り、植栽 ― (株)山梨化工産業、　説明板 ― 大面建設(株)

中 間 地 帯　　土工 ― (株)中道興業、　植栽 ― (株)富士緑化、　説明板、照明、ベンチ、
　　卓 ― 大面建設(株)、　四阿 ― 石田工業(株)

第４節　整備および調査組織

１．整備委員会組織

会長　（故）井出佐重（昭和57～62年９月）（文化懇話会々長、県立考古博物館協議会々長）
　　植松又次（昭和62年10月～）（県文化財保護審議会委員）

委員　植松又次（昭和57～62年10月）、斎藤忠（大正大学名誉教授、文化庁文化財保護審議会専門委員）、佐藤八郎（県文化財保護審議会委員）、谷口一夫（財)山梨文化財研究所々長）、山本寿々雄（日本考古学協会員）、羽中田壮雄（県文化財保護審議会委員、昭和63年２月～）、花岡利幸（山梨大学工学部教授）、田畑貞寿（千葉大学園芸学部教授）、植松春雄（山梨学院短期大学教授、県文化財保護審議会委員）、櫻井健一（中道町

長)、土屋清夫（中道町議会議長、昭和58年度)、平川義照（同、昭和59・60年度)、渡辺五六（同、昭和61・62年度)、長田章（中道町教育長、昭和58～61年度)、小沢義正（同、昭和62年度)、清水治雄（中道町文化財審議会長、昭和58・59年度)、長田新治郎（同、昭和60～62年度)、清水泰夫（県土木部技監、昭和58年度)、小倉健（同、昭和59・60年度)、原一（同、昭和61年度)、長田忠男（同、昭和62年度)、河澄力（県教育次長、昭和58年度)、桜井茂（同、昭和59・60年度)、里吉二郎（同、昭和61年度)、新堀弘雄（同、昭和62年度)

文化庁　記念物課調査官　加藤允彦

設計　㈱丹青社

監理　山梨県土木部石和土木事務所

事務局　県教育庁文化課、県土木部都市計画課

2．調査組織

調査主体　山梨県教育委員会

調査機関　山梨県埋蔵文化財センター

調査指導　斎藤　忠　大正大学名誉教授、文化庁文化財保護審議会専門委員、山梨県風土記の丘整備委員

大塚初重　明治大学教授

本村豪章　東京国立博物館原史室長（昭和58年度)

岩崎卓也　筑波大学教授

調査担当者　山梨県埋蔵文化財センター文化財主事

田代　孝（昭和58年度)

小林広和（昭和58年度)

坂本美夫（昭和58～60年度)

調査参加者　佐野勝広（現小淵沢町教育委員会）、林部光（奈良大学）、堀之内泉（同）、鈴木直（帝京大学）、相楽芳正（同）、宮沢公雄（法政大学、現㈶山梨文化財研究所第3室長）、河西学（東北大学、現㈶山梨文化財研究所第4室長）

出月遊亀子、出月満寿江、池谷美恵子、岩下厚美、石原はつ子、江川勝子、長田可祝、金沢一子、弦間千鶴、弦間文代、㈹後藤敬一、小橋田はるみ、斎藤多喜子、斎藤つね子、志村秋子、志村りか子、清水大、曽根攻、竜沢みちこ、高野俊彦、丹後幸子、堀之内泉、三浦昌富、宮沢紀夫、宮沢まさみ、宮川和幸、矢崎喜美江、矢崎ます子、矢崎悦子、山本真喜子、山本静子、渡辺礼子、渡辺節子、若尾澄子

第３章　発掘調査

第１節　銚子塚古墳

１．石室

石室の主軸方向と考えられる南北と、これに直行する東西方向とにセクションベルトを設定して掘り下げた。セクションベルトの交点付近で小礫混入褐色土を15*cm*ほど掘り下げたところ、黒色土（粘土）に達した。この黒色土は20度ぐらいの角度で東・西方向にカマボコ状に落ち込み、下方では黒褐色土（粘土）となっている。これらの下５～10*cm*に偏平な礫や栗石などが、やはりカマボコ状に存在するのが確認された。控え積みであろう。この控え積みは南北方向においても捉えられた。

交点より約２ｍ北側の深さ20*cm*付近において、すり鉢状に穿たれ砂利砂の充填されている、昭和45年当時の開口部分が確認された。その開口部の南側には大型の天井石の上面の一部が覗いており、かつ周囲には偏平な礫や栗石が散乱している状況であった。なお黒色土などは部分的に確認された程度であった。

控え積みの北側部分は曲線を描くように偏平な礫が並べられ縁をなし、また礫の切れる付近の土層に垂直に落ち込む部分があり掘り方と考えられた。南側は深掘りをしなかったため北側のような状況は確認されなかったが、栗石などの明瞭に切れる部分が確認された。東西方向でも礫などの切れる状況と、その付近で土層が垂直に近い角度で落ち込む状況が確認された。これらから控え積みは東西9.5ｍ、南北５ｍの規模で、石室基底（長さ6.5ｍ、幅0.9ｍ）より周囲の1.5～1.8ｍを覆っていることになる。

２．墳丘および周溝

１－１号トレンチ　前方部正面の墳丘側に設定したトレンチである。墳頂に近い部分では15*cm*ほどで墳丘封土に達する。現状の畑の境である石垣のやや上方、Ａ点より4.16ｍ当たりに緩やかであるが変換点が見られ、２・16号トレンチとの関係から中段と考えられる。Ａ点より18.05ｍ、水路の直下当たりに墳端と考えられる変換点がある。頭大の礫が堆積していたが、積み重ねられた様子は認められなかった。周溝は現地表より2.15ｍで青灰色粘土層の底となる。なお墳丘封土には版築の状況を示すと思われる土の変化が認められた。

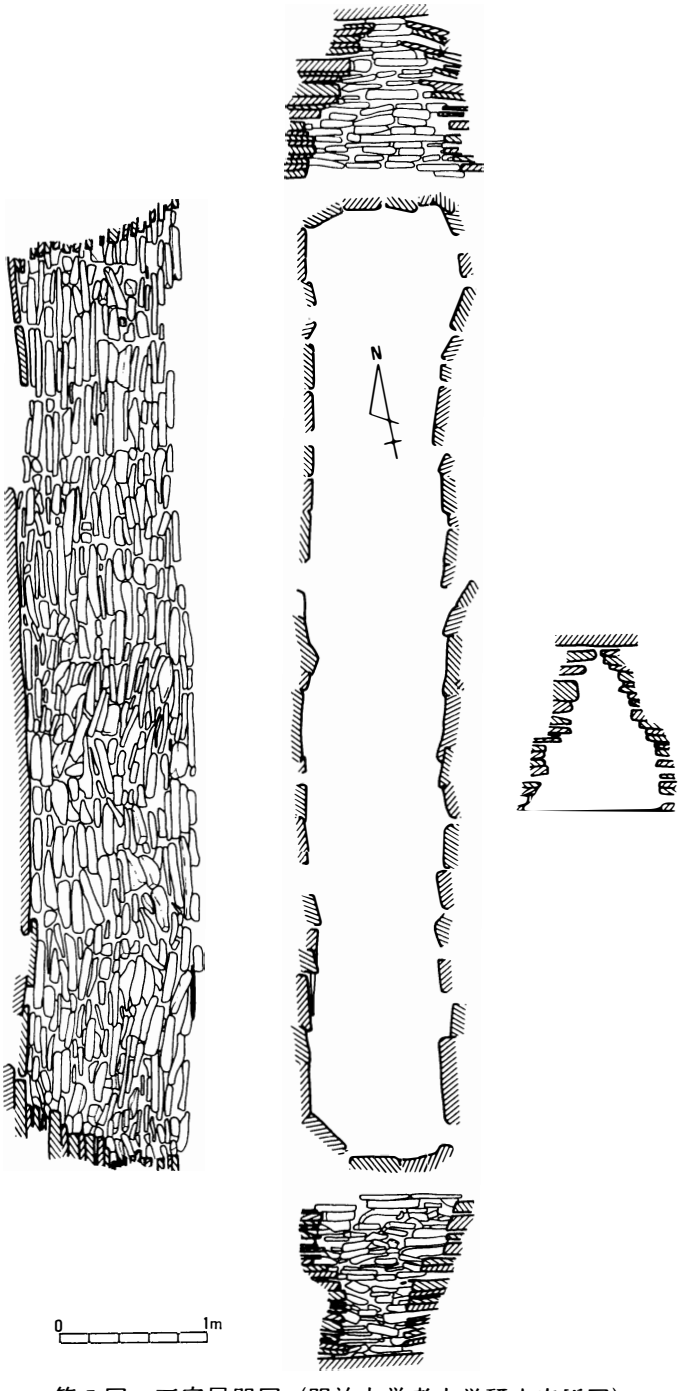
１－２号トレンチ　前方部正面の周溝側に設定したトレンチである。Ａ点より3.5ｍと6.6ｍあたりに変換点がある。前者が周溝外縁部の基底、後者が肩に当たる。周溝は現地表より1.8ｍで青灰色粘土層の底となる。肩部より外側は等高線の傾斜に沿って緩やかに低まって行く。

２－１号トレンチ　前方部南側の墳丘上に設定したトレンチである。Ａ点より12.2ｍあたりに変換点があり、また僅であるがテラス面も見られる。この変換点より下方のＡ点より16～18ｍ付近には頭大の礫が散乱しており、葺石の用材と思われる。さらにこの下から現状の石垣までの間に拳大前後の礫が厚さ60*cm*程に堆積し、開墾の大きさが分かる。また

第３図　銚子塚古墳平面図

SPA
SPB
SPC
SPA'
SPB'
SPC'
A O
A 3
N
SPA' 274.000
SPB' 274.000
SPC' 274.000
① 小礫混入褐色土
② 黒色土（粘土）
③ 黒褐色土（粘土）
④ 小礫混入褐色土
⑤ 小礫混入褐色土
⑥ 褐色土
⑦ 礫混入黒褐色土
0
2m

第４図　主体部平面図



第５図　石室展開図（明治大学考古学研究室原図）

その中から陶磁器片も出土した。Ａ点より24.15ｍ、現状の石垣の直下あたりに墳端の変換点がある。墳端に頭大の礫が厚さ60*cm*程に堆積していたが散乱している状況であった。周溝は現地表から2.15ｍで、青灰色礫層の底となる。

２－２号トレンチ　２－１号トレンチの南側に設定したトレンチである。Ａ点より4.0ｍと7.2ｍに変換点が見られる。前者は周溝外縁部の基底、後者が肩部に当たろう。なお肩部の変化は緩やかなものである。周溝底は深さ2.3ｍで、青灰色礫層の底となる。

２－３号トレンチ　２－２号トレンチのさらに南側に設定したトレンチである。Ａ点より4.5ｍに変換点が見られる。周溝外縁の肩部であろう。

３－１号トレンチ　前方部南側のくびれ部に近い墳丘上に設定したトレンチである。２－１号トレンチ同様開墾によると考えられる小礫を混入した互層が厚さ1.3ｍに堆積している。Ａ点より5.9ｍ、現状の石垣の直下あたりに変換点が捉えられる。頭大あるいはそれ以上の大きさの礫が厚さ40*cm*程に堆積するが、きちっと据えられている様子は見られなかった。周溝は現地表から1.94ｍで、青灰色礫層の底となる。

３－２号トレンチ　３－１号トレンチの南側に設定したトレンチである。Ａ点より4.0ｍに周溝外縁基底の変換点がある。ここから南側に延びる外縁の立ち上がり角度は緩やか

である。この間のＡ点より10.9ｍ、16.3ｍに肩部の変換点が見られる。周溝は現地表より2.44ｍで、青灰色礫層の底となる。なお底より56*cm*上方の間の互層は、植物の腐食したものが多く含まれていた。

４－１号トレンチ　後円部の南側の斜面に設定したトレンチである。Ａ点より12.8ｍ、23.69ｍに中段と葺石、それに埴輪、Ａ点より33.55ｍ、Ｂ点より4.91ｍに墳端の変換点と裾石積みとが見られた。上部丘の中段テラス面は幅0.74～2.3ｍを測り、この上方に幅1.4ｍで葺石が見られる。下部丘の中段テラス面は幅1.72ｍを測り、肩部に円筒埴輪の基部が樹立された状態で確認された。またその上方に幅0.86ｍで葺石が見られた。墳端には頭大の礫が厚さ60*cm*程に堆積する。これを排除して行くと最も下に直径50*cm*前後の大型の礫を据えた墳端石積みがある。なおこの石積み部の墳丘側の封土は黒色粘土層であった。周溝は現地表から1.42ｍで、灰褐色礫層の底となる。

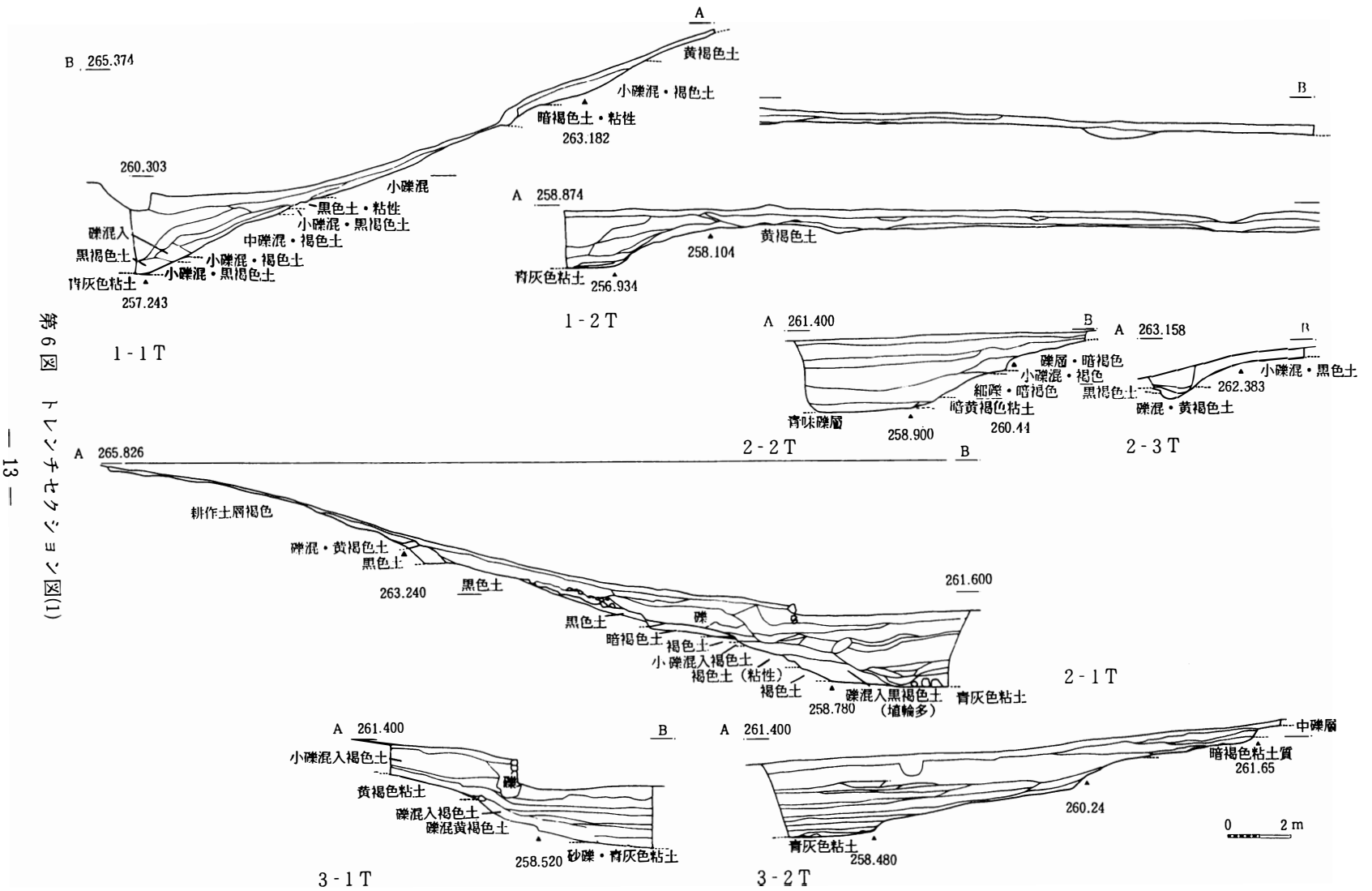
４－２号トレンチ　４－１号トレンチの南側に設定したトレンチである。Ａ点より3.75ｍ、9.64ｍに変換点がある。前者は周溝外縁部の基底、後者は肩部である。外縁は小～中礫層の互層よりなる地山を削り、比較的急角度に立ち上がる。底部近くに植物などの自然遺物が見られた。

５号トレンチ　後円部南側のくびれ部に近い墳丘状に設定したトレンチである。墳頂のＡ点より10.55ｍ、20.55ｍに変換点と葺石それに埴輪がみられる。上部丘の中段テラス面は幅90*cm*を測る。このテラス面より埴輪の大型破片が検出された。壷形埴輪、円筒埴輪、朝顔形埴輪（第１図、第２図１、第３図１）などであり、小礫を多く含む堆積土中から発見された。基部あるいは底部の確認できたのは壷形埴輪のみで、これも墳丘の封土に埋め込まれた状態ではなく、埴輪列が回っていたのか否か明確にできなかった。これより上方に幅2.1ｍで葺石が見られる。下部丘の中段テラス面は明確にならなかったが、円筒埴輪の基部が樹立された形で確認され、かつその上方の葺石の状況などからＡ点より20.55ｍ付近を変換点とした。

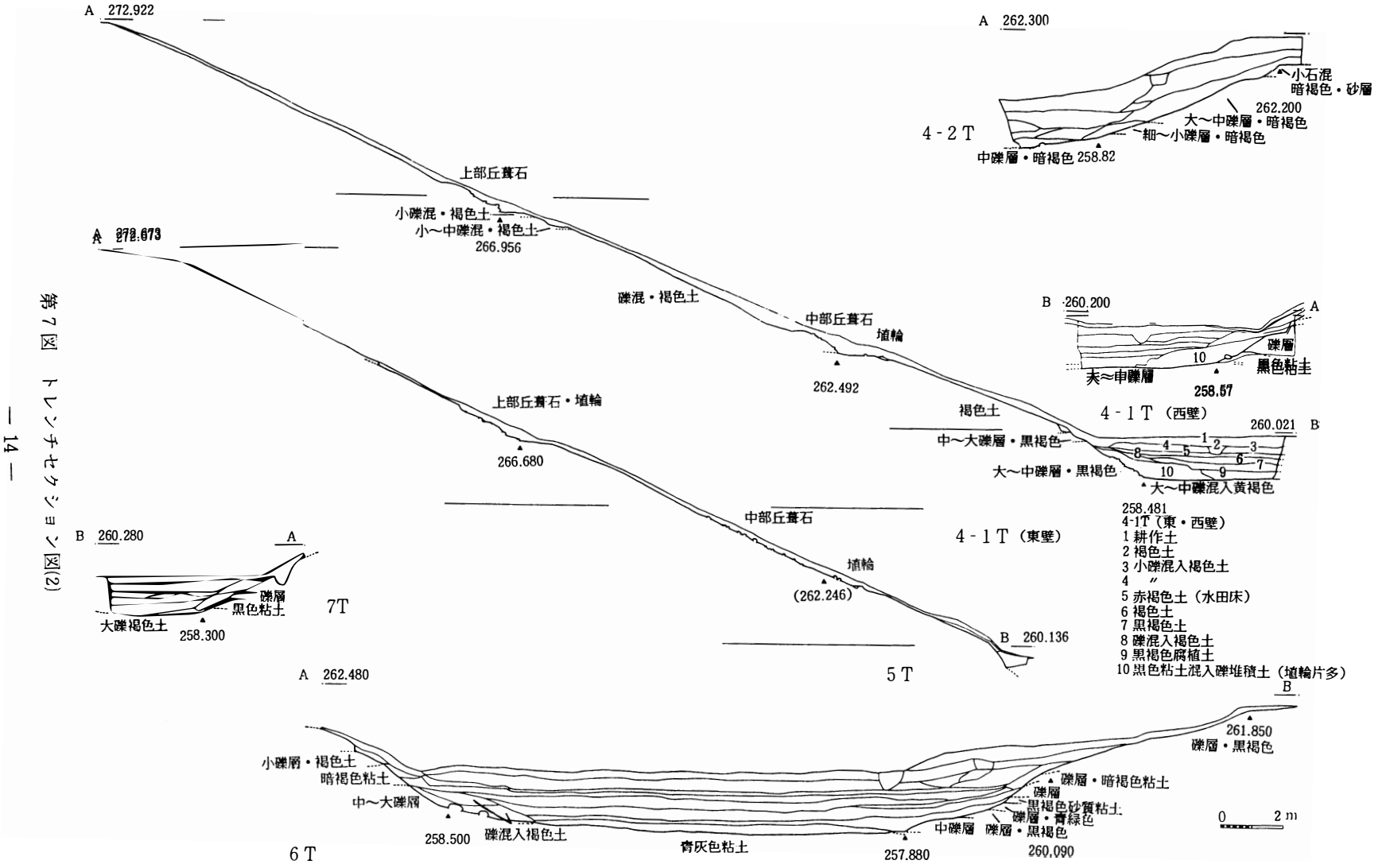
６号トレンチ　４号と５号トレンチの中間で、墳端から周溝にかけて設定したトレンチである。Ａ点より4.12ｍに墳端の変換点、19.03ｍに周溝外縁の基部、23.69ｍと29.35ｍとに肩部の変換点が見られる。墳端には礫の堆積が厚く見られ、その下から大型の石材が一列に据えられているのが確認され、墳端石積みと考えられる。また墳端際に直径10*cm*ほどの自然木が横たわっていた。外縁部の立ち上がりはほとんどが中～大礫の互層を削ったもので、法面が長い。周溝は2.02ｍで、青灰色粘土層の底となる。周溝の幅は墳端から基部までが14.88ｍを測る。

７号トレンチ　後円部西側墳丘上に設定したトレンチである。Ａ点より2.15ｍに墳端の変換点がある。周溝は深さ1.35ｍで、青灰色礫層の底となる。

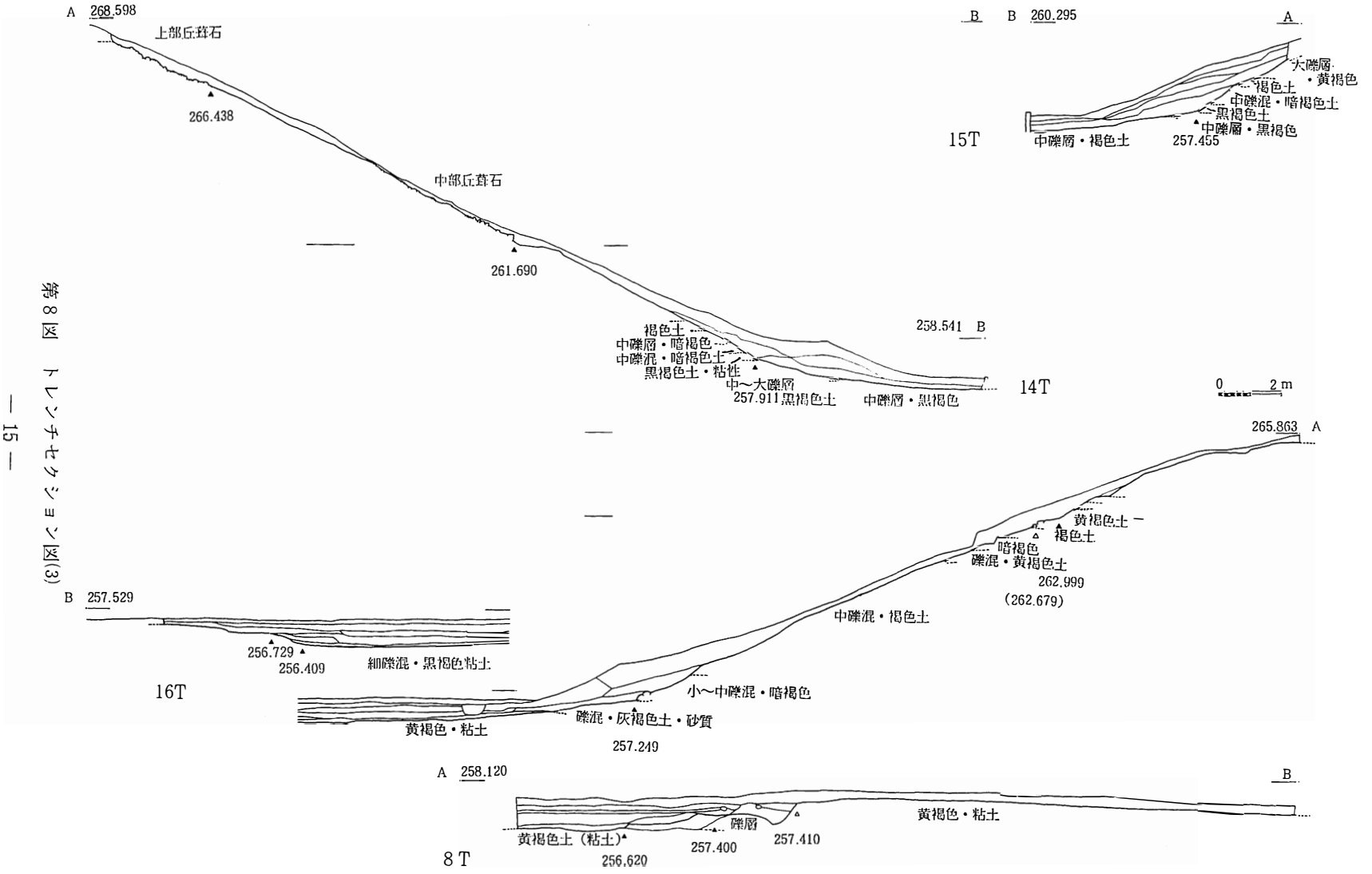
14号トレンチ　後円部北側のくびれ部に近い墳丘に設定したトレンチである。Ａ点より4.01ｍ、13.86ｍに中段の変換点と葺石、21.66ｍに墳端の変換点が見られる。上部丘の中段テラス面はほとんど残っておらず、その上方に葺石が幅2.7ｍで見られる。下部丘の中段に



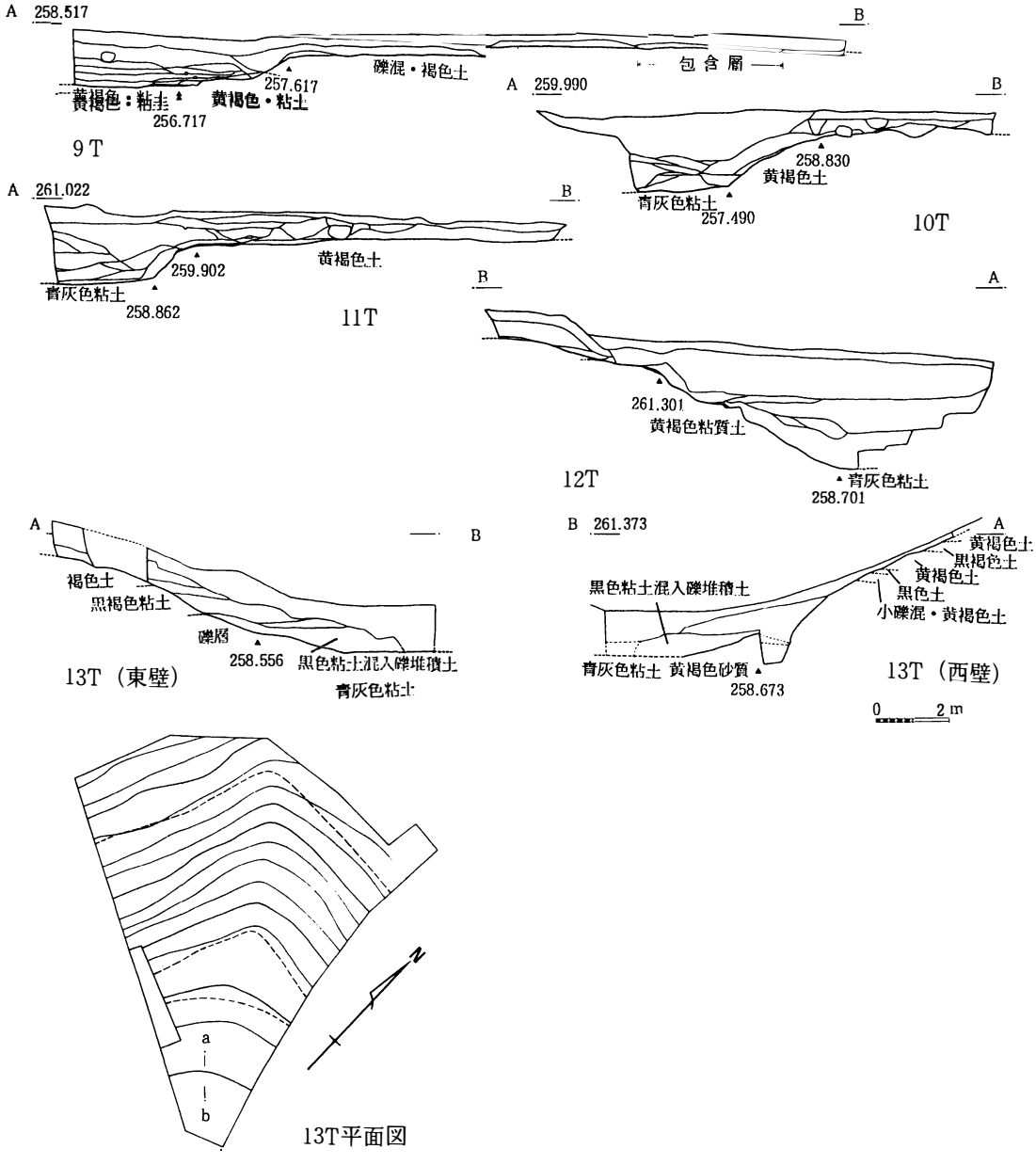
第6図　トレンチセクション図(1)



第7図　トレンチセクション図(2)



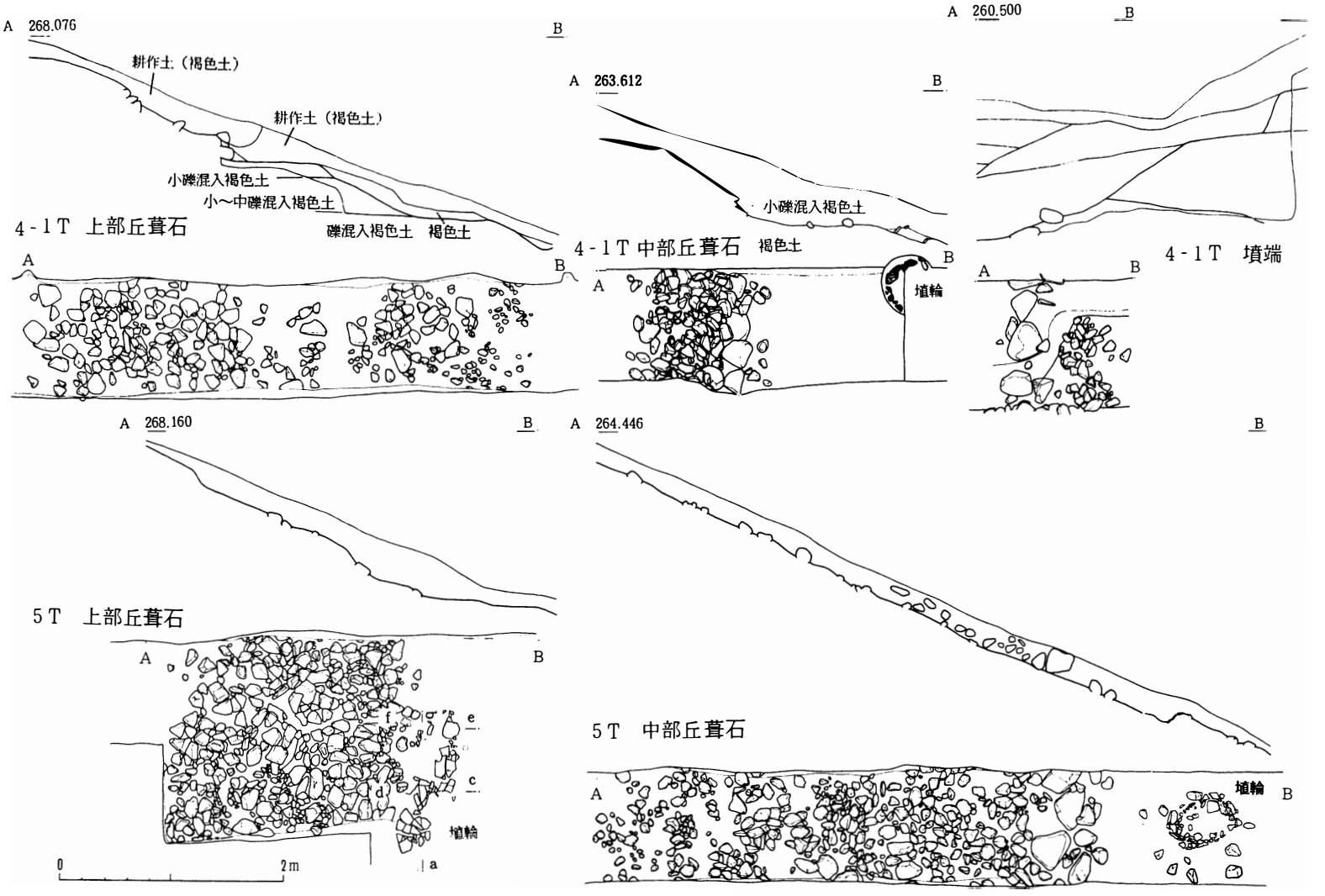
第８図　トレンチセクション図(3)



第９図　トレンチセクション図(4)

は幅1.48ｍのテラス面が見られ、また上方には幅3.7ｍで葺石がある。墳端には礫が厚さ70*cm*ほどに堆積していたが、明確な石積みは見られなかった。周溝は墳端から平坦とはならず、弓状でしかも外側に向かって低まって行く。底までは38*cm*ぐらいで達し、黒褐色中～大礫層である。

15号トレンチ　前方部北側のくびれ部に近い墳丘に設定したトレンチである。Ａ点より3.31ｍに墳端の変換点が見られる。墳端に礫の堆積が見られたが、それほど大型の石材は見られず石積みも確認出来なかった。墳端の墳丘封土は礫層と礫の混入が見られない土層


A 268.076
B
耕作土（褐色土）
耕作土（褐色土）
小礫混入褐色土
小～中礫混入褐色土
礫混入褐色土
褐色土
4-1T 上部丘葺石
A
B
A 263.612
B
小礫混入褐色土
4-1T 中部丘葺石
褐色土
B
A
埴輪
A 260.500
B
4-1T 墳端
A
B
A 268.160
B
5T 上部丘葺石
A
B
f
e
c
d
埴輪
0
2m
a
A 264.446
B
5T 中部丘葺石
A
埴輪
B

第10図　葺石実測図(1)

第11図　葺石実測図(2)

との互層であった。周溝は14号トレンチ同様墳端より弓状でしかも外側に向かって低まって行く。底には50*cm*前後で達し、褐色中礫層である。

16号トレンチ　前方部北側の墳丘に設定したトレンチである。中段の変換点の明確な所は見られないが、A点より8.6mの地点にやや長手の石材の散在があり、このあたりに存在

したと想定出来よう。中段の上下の墳丘封土には小礫混入土の互層が見られる。A点より21.26mに墳端の変換点が見られる。厚さ60cmほどの小礫層の下より、直径30cmほどの礫が列状に据えられているのが確認され、墳端石積みと考えられる。A点より38.82mと39.82mに変換点が見られる。前者は周溝外縁の基部、後者が肩部である。周溝の幅は墳端と周溝外縁の基部間が17.55mを測る。深さは極めて浅く、80cm前後で底に達する。黄褐色粘土層で外側に向かって低まって行く。

8号トレンチ　前方部正面の周溝側に設定したトレンチである。最初A点より7.7mの位置に周溝外縁の基部ではないかと考えた変換点が見られたが、この直上の黒褐色礫層が東側の褐色礫層の変色したものとの考えられることから、基部の変換点をA点より5.3mの位置に求めた。肩部も最初A点より10.82mの地点ではないかと考えたがその南側3mの間に旧水路の痕跡が確認されたために、基部からの立ち上がり勾配を復元し、A点より8.22mの位置に設定した。この位置は南側に設定した各トレンチの所見とも矛盾しないようである。周溝は92cmほどで、褐色粘土層の底となる。

9号トレンチ　前方部正面の周溝側、8号と1号のトレンチの中間に設定したトレンチである。A点より4.0mに周溝外縁の基部、7.0mに肩部の変換点が見られる。さらにA点より16.6～20.7m付近で、平安時代後半の住居跡ないし遺物包含層が確認された。肩部から南側1.6mに8号トレンチ同様の旧水路が確認された。周溝は1.5mで、褐色粘土層の底となる。

10号トレンチ　前方部正面の周溝側、1号トレンチの南側に設定したトレンチである。A点より5.75mに周溝外縁の基部、8.3mに肩部の変換点が見られる。外縁部の地山にはほとんど礫を含まない。周溝は2.1mで、青灰色粘土層の底となる。

11号トレンチ　前方部正面の周溝側、10号トレンチの南側に設定したトレンチである。A点より3.34mに周溝外縁の基部、4.5mに肩部の変換点が見られる。外縁部の地山にはほとんど礫を含まない。周溝は2.1mで、青灰色粘土層の底となる。

12号トレンチ　前方部南側の周溝側に設定したトレンチである。A点より4.5mに周溝外縁の基部、9.5mに肩部の変換点が見られる。外縁部の地山はほとんど礫を含まない土の互層である。周溝は3.16mで、青灰色粘土層の底となる。

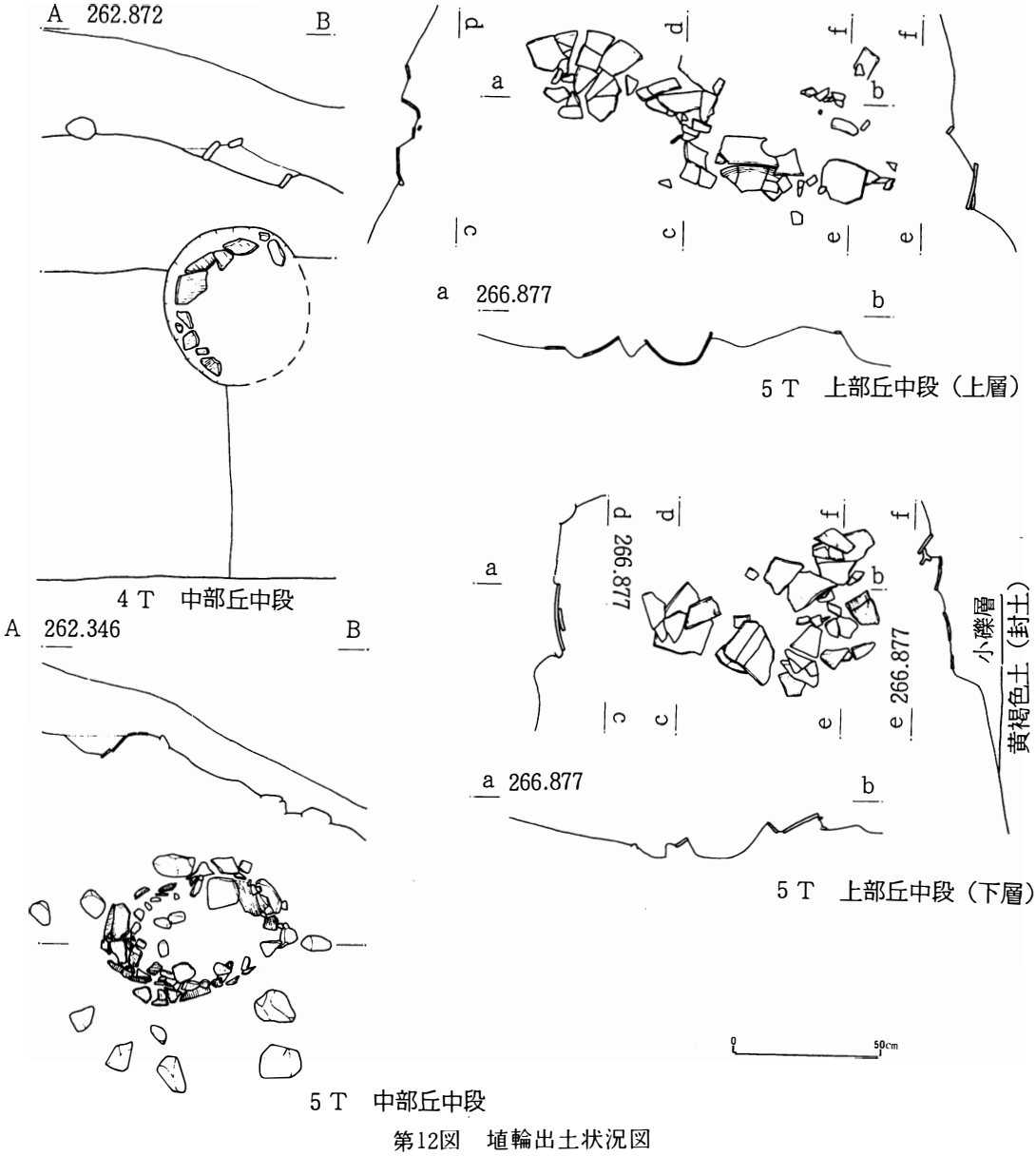
13号トレンチ（南側くびれ部）　南側くびれ部に扇状に設定したトレンチである。東壁ではA点より5.78mに墳端の変換点が見られる。中～大礫を含む黒褐色土層上にある。周溝は1.4mほどで、青灰色粘土層の底となる。西壁では墳端の存在すると考えられるあたりが大きく撹乱を受けており明確とならないが、A点より6.3m当たりにあったのではないかと考えられる。前方部と後円部との接合部は等高線の流れる方向が、扇の中央よりやや東側に寄った位置で変化しており、この当たりに求められる。墳端は258.75mより下方にある。要に近い位置の地山である青灰色粘土層の直上からは、有孔円盤状木製品などが底に接するような状況で出土した。

3．出土遺物

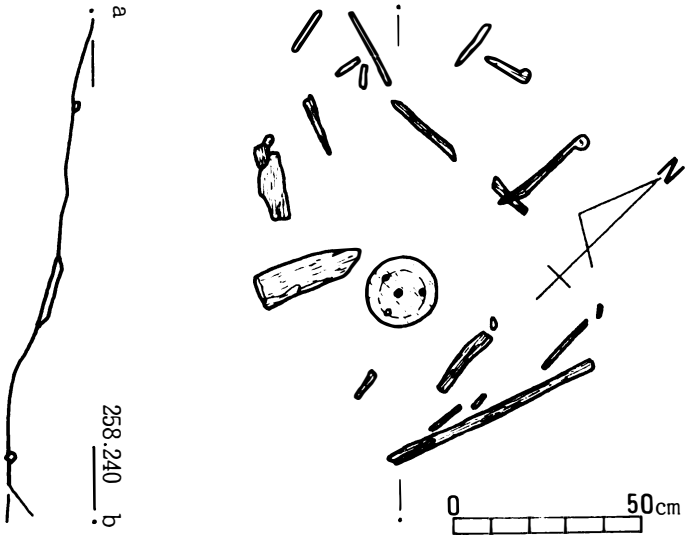
出土状況

埴輪は墳端に設定したトレンチの総て、特に堆積土のうちの礫中より多く出土した。なお出土量では後円部が前方部に比べて多い。周溝外縁部側では１・３号で数点確認されたに過ぎず、外縁部への埴輪樹立の可能性は少ない。

４号トレンチ下段丘テラス面の肩部と考えられる変換点よりやや外側で、埴輪基部が墳丘封土に埋め込まれた状況で確認され、５号トレンチ下段丘でも葺石基部までの調査が十分でないが、ほぼ同様な状況が窺える。５号トレンチ上段丘テラス面で壺形、円筒形、朝顔形埴輪の大型破片が出土した。墳丘封土に載った小礫層中に見られたが、基部の残存は認められ



第12図　埴輪出土状況図



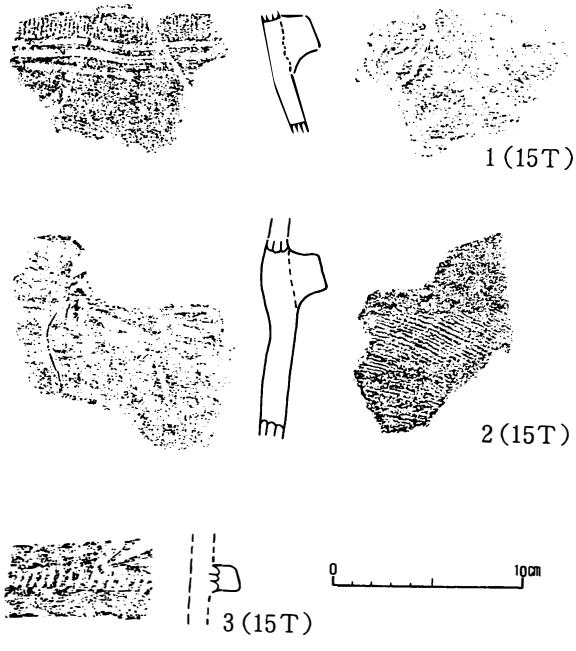
第13図　木製品出土状況図

なかった。墳頂からの落下か、肩部からの倒れ込みか、いずれとも断定できない。

土器片は14号トレンチの墳端より埴輪片と共に出土した。またくびれ部南側の墳端より1.5m外側、地表下1.2mの青灰色粘土層（地山）直上から木製品や埴輪片などと共に土器片（S字状口縁台付甕）が出土している。

遺物

壺形埴輪は2・4～7・13・16号の各トレンチから出土している。形態は4号トレンチ例のような二重口縁壺と考えられ、底部には焼成前の穿孔が見られる。なお頸部と胴部との境のタガの有無は不明である。法量は口径51*cm*、高さ67*cm*、底径10.4*cm*を測る。調整は2次縦ハケメを基本とし、大区画の接合部分には横方向のハケメも施される。焼成はやや低温のようで、かつ黒斑が見られる。透し孔は三つ巴が口縁部に4、円ないし巴形が胴上部に2、小型の巴形が胴下部に1箇所それぞれ見られる。



第14図　埴輪タガ形態

円筒・朝顔形埴輪

全体の形の分かるものはない。口縁部形態は特殊器台的な有段口縁と逆ハの字状に開く単口縁で、基部がほとんど直立する形態である。2次縦ハケメを基調とし、A種ヨコハケが僅に見られる。タガは総て貼りつけで、M字状ないし台形の突出度の大きいものと小さいものを基調に、断面三角形気味で先端が尖る突出度の大きいもの、突出面に刻み目の施されたものも見られる。透し孔は巴形、三角形、方形などがある。一段に3孔以上であるが、その組み合わせは明確でない。淡褐色を呈し、黒斑も見られる。

囲形埴輪（18図7）

13号トレンチから出土している。当初

は円筒埴輪の基部と考えていたもので、上端部に接合した痕跡が見られず、かつ上端部内面にヨコナデが認められたことから、囲形埴輪ではないかと考えた。調整等は円筒埴輪に同じ。

土器

Ｓ字状口縁台付甕と壷がある。壷は胴部が球形に近い形態と考えられ、肩部に櫛状工具による刺突文が施されている。

木製品

有孔円盤状木製品（21図１）　直径18.3cm、厚さ1.4cm。断面台形状を呈し、中央とその周辺に穴があけられ、台形の下面の面には弧状に細い沈線が巡る。

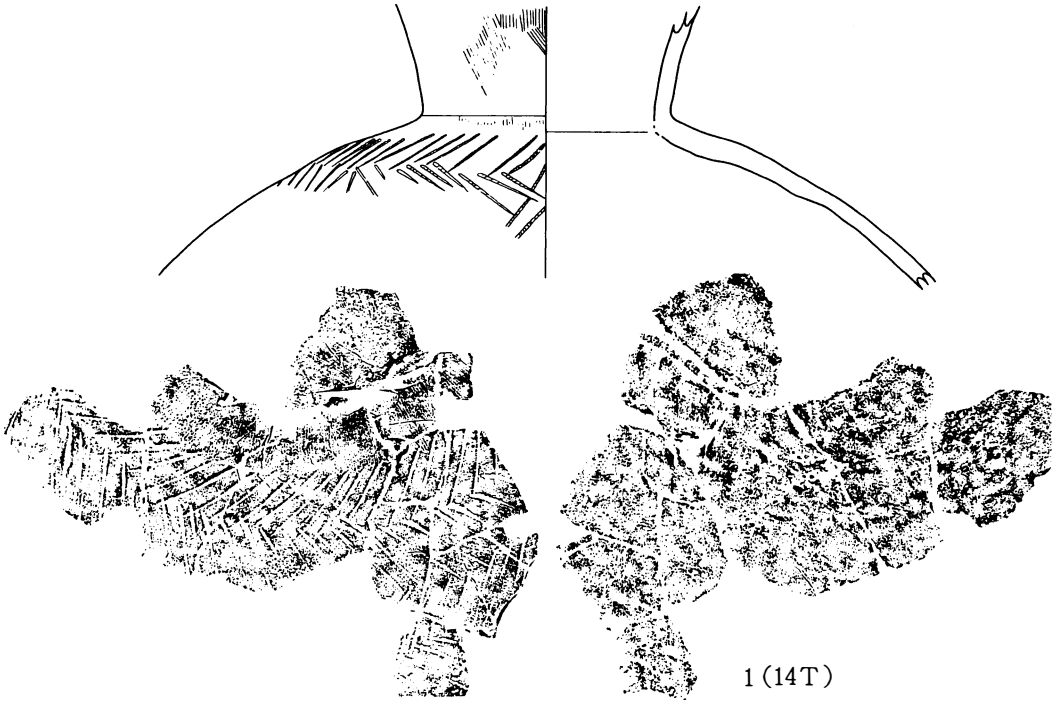
刀状木製品（同２・３）　一端が尖り、一端が円形状を呈する。長さ28cm、厚さ１～1.5cm。

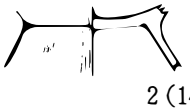
棒状木製品（同４・５・７）いずれも一端が欠損しており、さらに長くなる。

４．小結

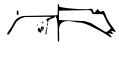
墳丘

墳丘裾の石積みあるいは変換点を墳端とした場合、墳丘南側の縁線の標高は東から西、北側で



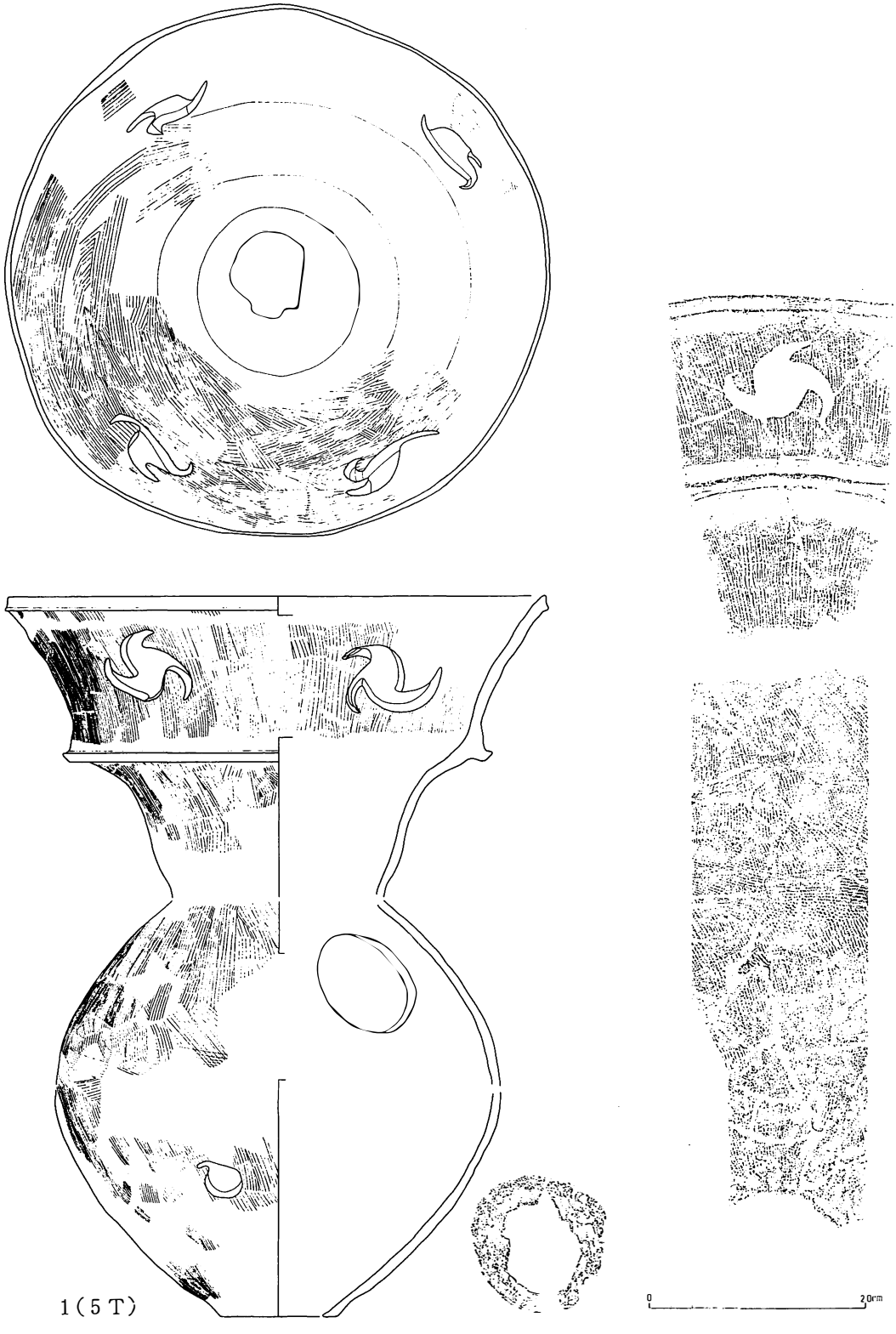


2（14T）



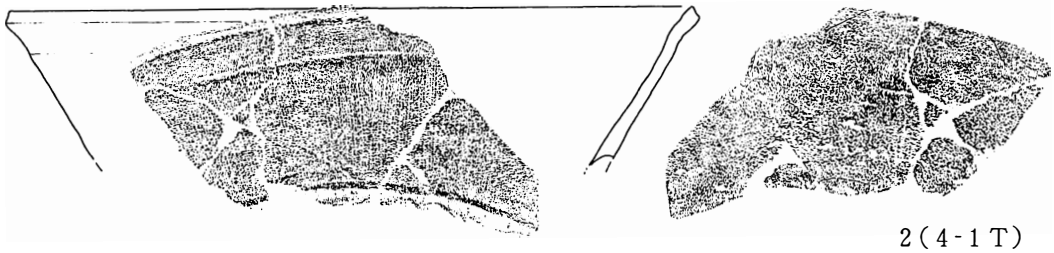
3（14T）

第15図　土器

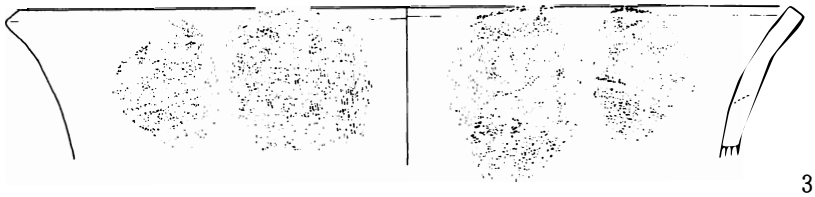


第16図　埴輪(1)

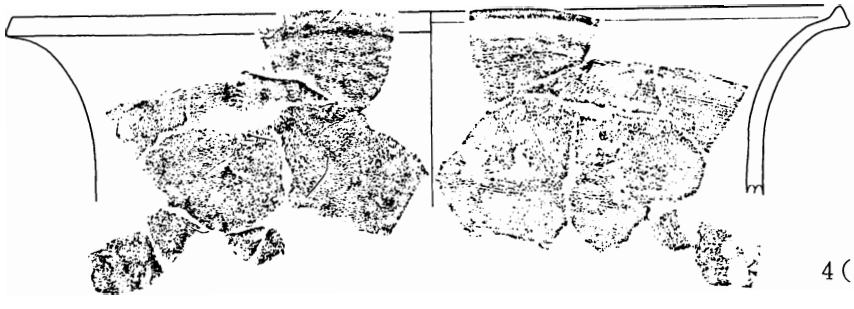
1（5 T）



2（4-1 T）

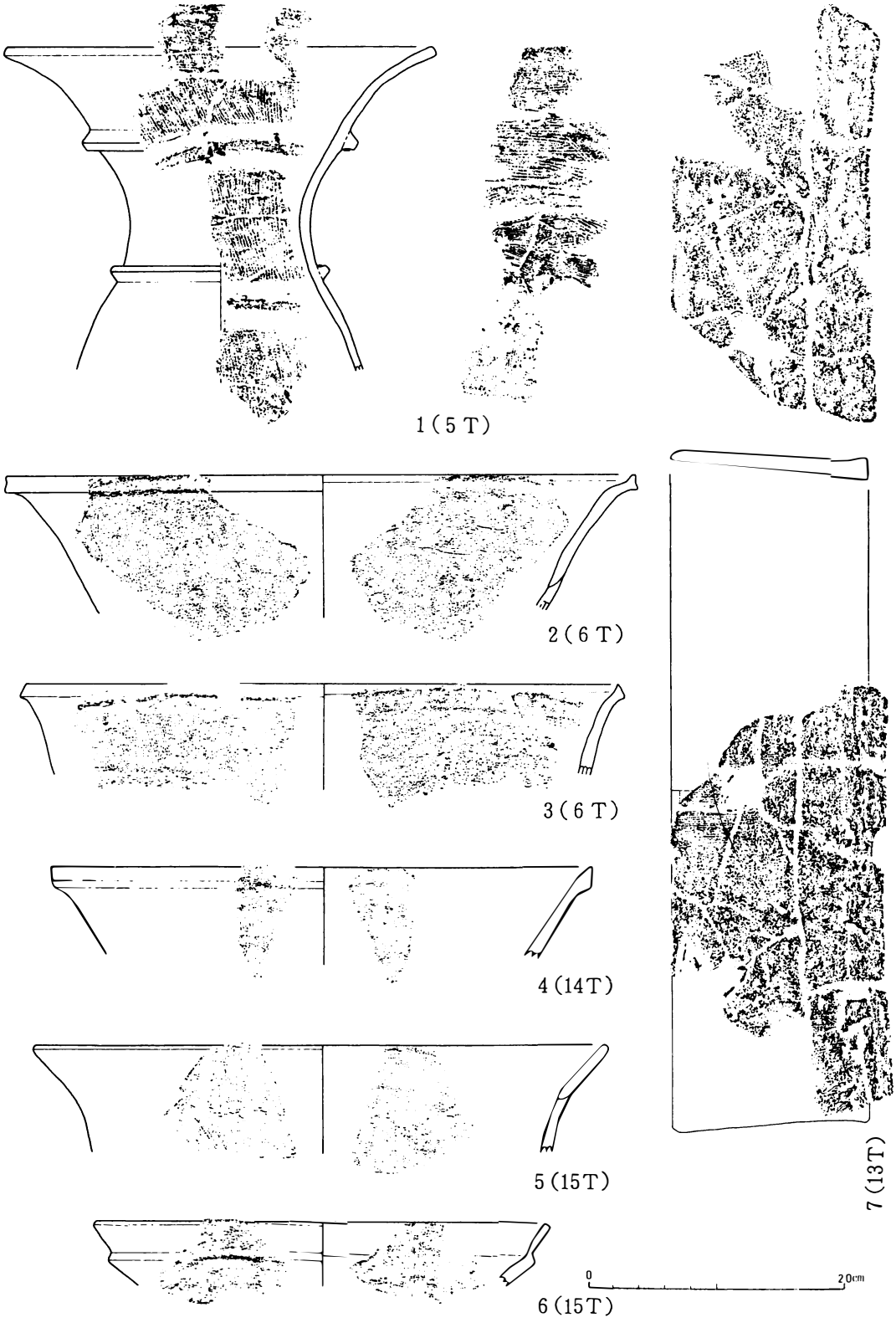


3（6 T）

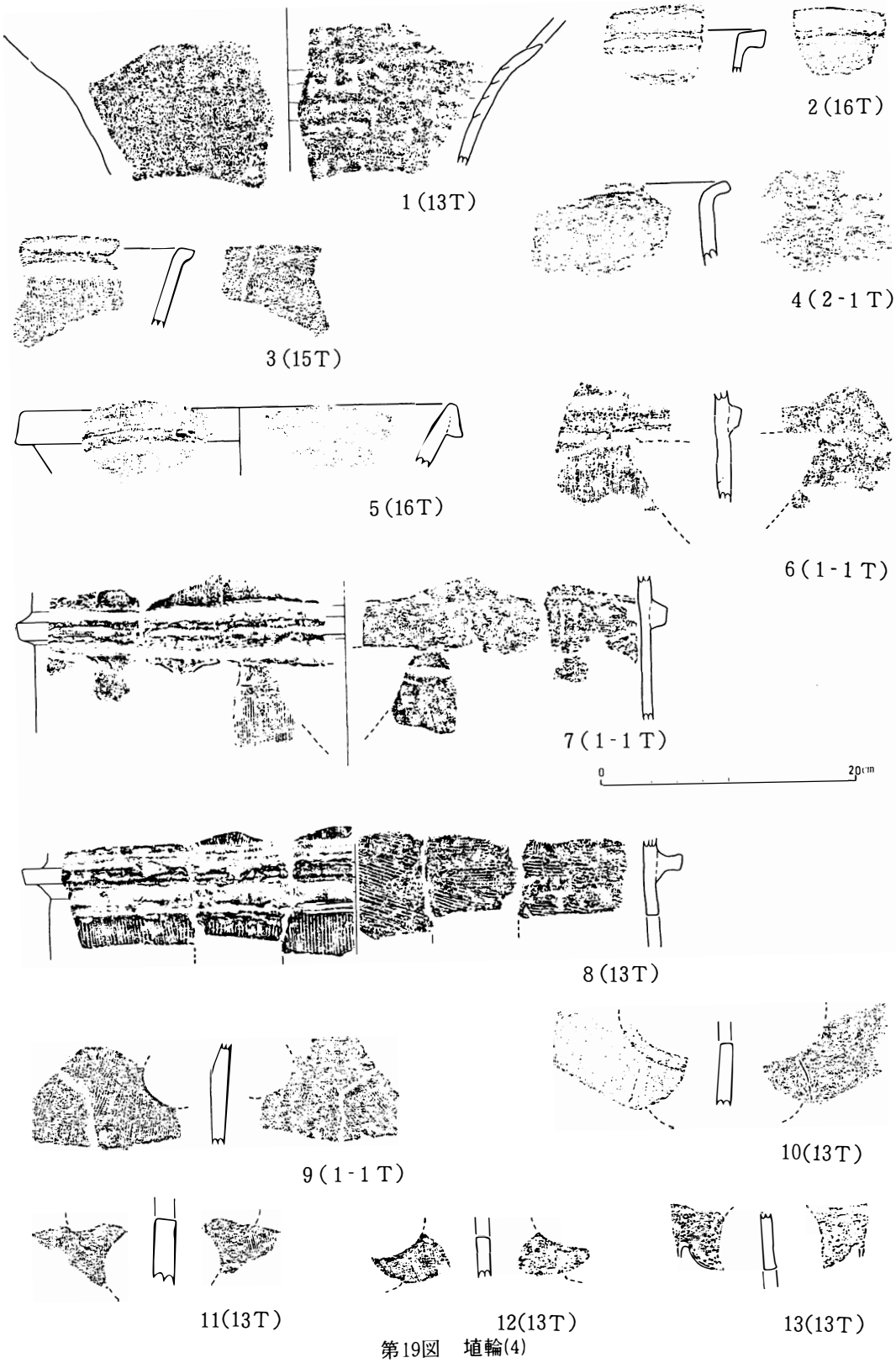


4（14T）

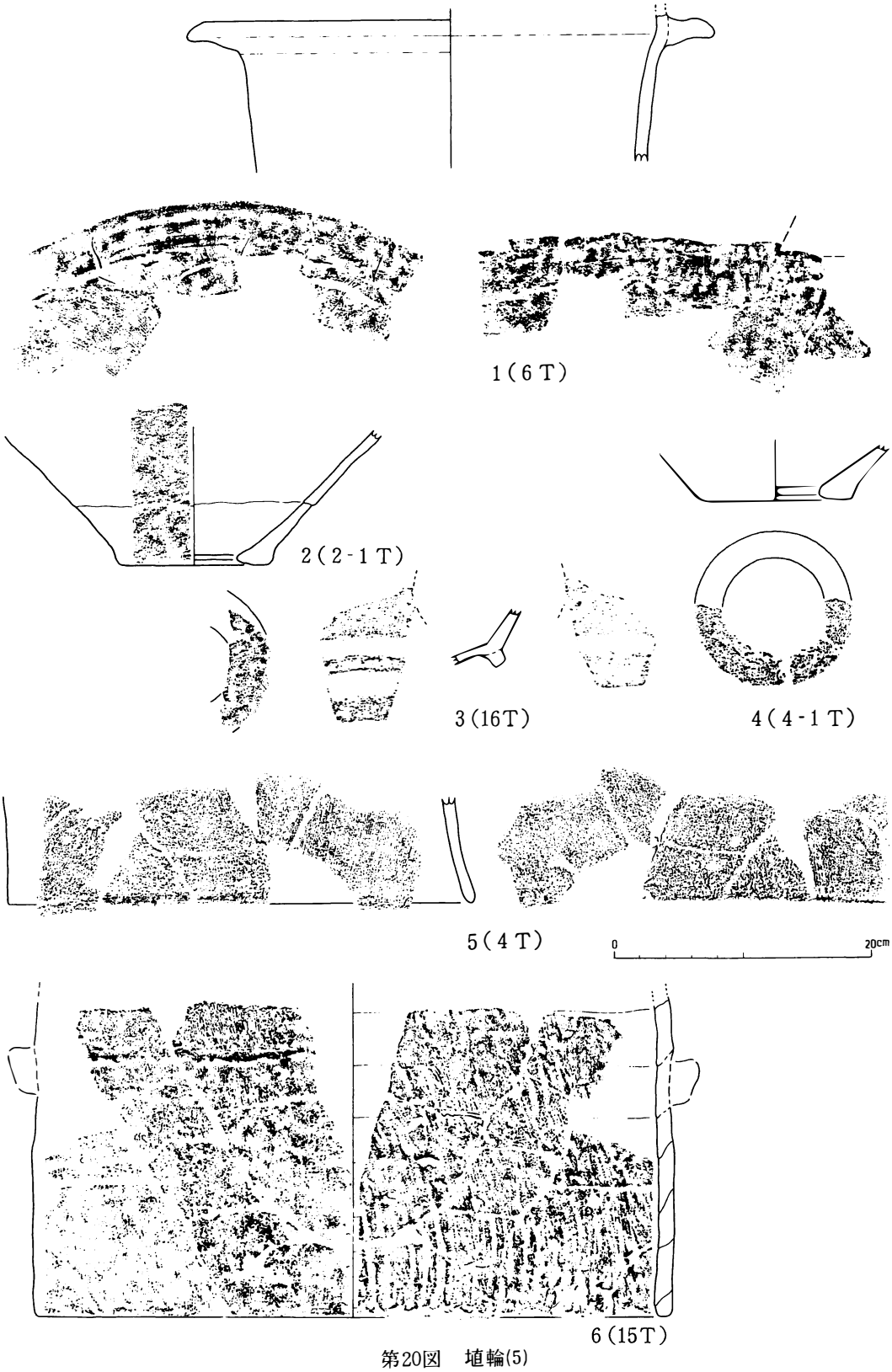
第17図　埴輪(2)



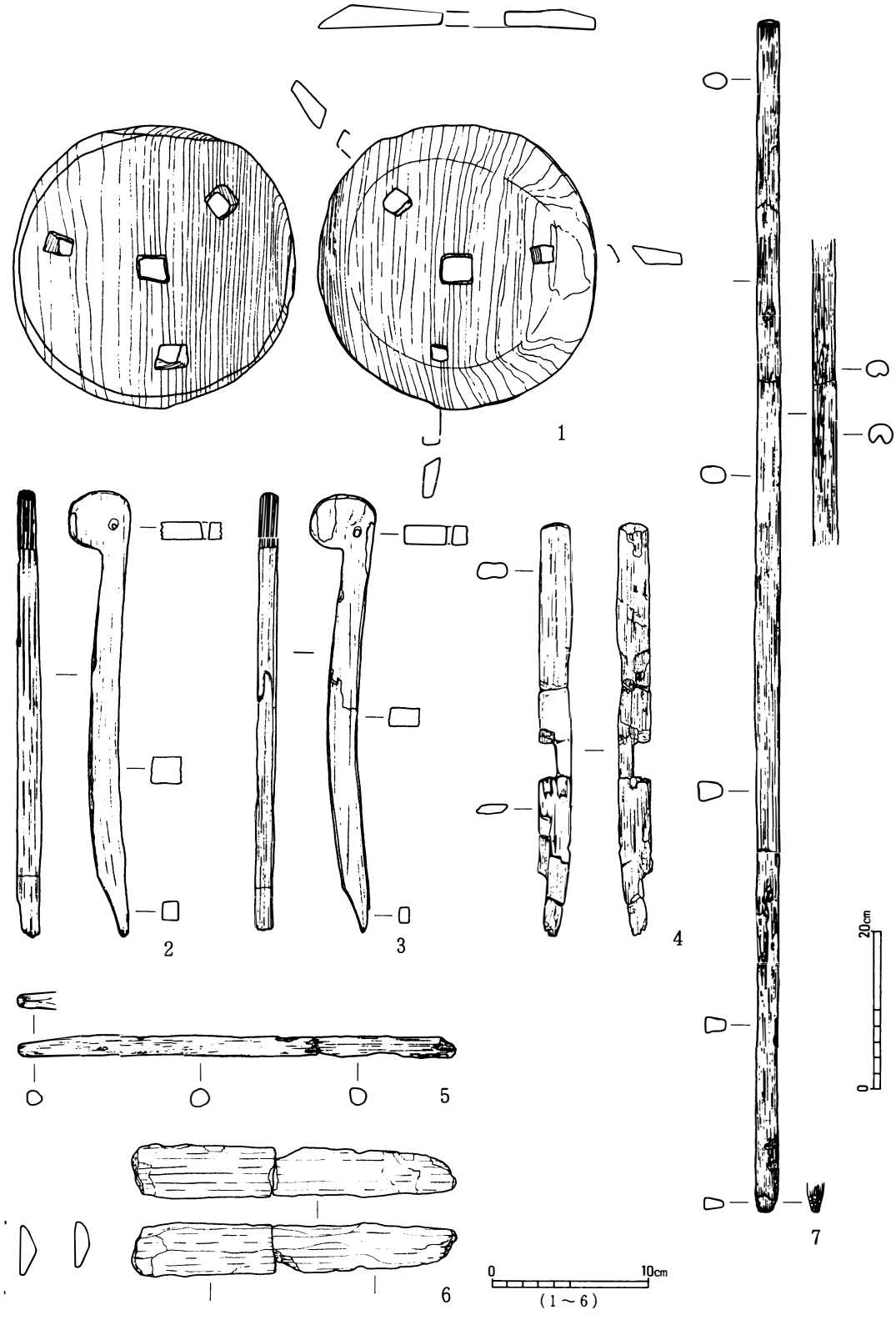
第18図　埴輪(3)


1(13T)
2(16T)
3(15T)
4(2-1T)
5(16T)
6(1-1T)
7(1-1T)
0
20cm
8(13T)
9(1-1T)
10(13T)
11(13T)
12(13T)
13(13T)

第19図　埴輪(4)



第20図　埴輪(5)



第21図　木製品

は西から東、前方部正面では南から北に向かって徐々に低まってゆく状況にあり、一定の方向性をもっていると見られることから、墳端として捉えてもそれほど無理のないものと言えよう。これらから墳丘規模を復元すると全長169m、後円部直径92m、同高さ15m、前方部幅68m、同高さ8.5mとなる。

墳丘は前方後円墳であるが、その前方部の正面の形態はこれまで明らかでなかった。今回正面の中央部付近が僅に外側へ突出する剣先状の形態であることが、周溝外縁形態などの明らかになるのに伴い考えられるところとなった。

墳丘の構築形態は、後円部では葺石などが確認されたことにより3段築成であることが明らかとなった。前方部では葺石などの明瞭な痕跡を残す部位は確認されなかったが、墳丘斜面中央よりやや上方に変換点と捉えられる部位が見られ、2段築成と考えられるところとなった。

後円部上部丘の中段の変換点は西から東、南から北に向かって低まり、約30cm弱の高低差を持つ。同じく中部丘の中段の変換点も上部丘と同様の方向で低まっているが、その高低差は50〜60cm前後とやや大きくなっている。この中段は引き続き前方部に続くものであろうが接続状況は明確でない。前方部の中段の標高は後円部の前方部よりで確認された位置の標高より1m程高く、前方部の中段は東から西に向かって低まって行く状況が捉えられ、墳端の傾きと若干の違いを見せる。また前方部正面も南から北へ低まっていき、約60cmの高低差をもっている。

葺石は基底部に直径30cm前後の比較的大型の石材を使い、それ以上をやや小振りの石材で葺くもののようである。しかし葺石は基部から上方に2m前後確認されたにすぎず、さらにその上まで存在していたのか否か明らかにできない。しかし墳端のトレンチ内に堆積する礫の量からすれば、さらに上方まで存在していた可能性は強いのではないかと考えられる。

中段の幅は検出された最も広いものが上部丘では1.2m、中部丘では1mであり、特に4号トレンチでは埴輪が伴っており、これらからすれば狭くても1mはあったものと推定できよう。

埴輪は4・5号トレンチの状況から、後円部の下部丘の中段には囲繞されていたものと考えられる。上部丘の中段からも大型破片の検出があり可能性は否定できないが、今回の調査では明確にできなかった。また前方部においての埴輪の在り方も、樹立が中段なのか墳頂部なのか明らかにできなかった。またこれら埴輪の中に壺形埴輪がどのような間隔で、あるいはどこに樹立されていたかは明確とならないが、検出場所は全体に及んでいる状況にある。

周溝

周溝は墳丘と同形態の一重であるが、南側の2−1〜2・3−1・6号トレンチのそれぞれにおいて3箇所の変換点が確認され、その外側から2箇所の変換点のいずれをも肩部として捉えた。これらから周溝の幅は南側で広く、15〜25mの規模となる。周溝の底は古墳の立地が傾斜面上にあるため南側が高く北側が低く、約1.5mの高低差である。

築造年代

埴輪の形態、調整方法などは川西編年[2]に対比すれば、Ⅰ〜Ⅱ期（4世紀中〜後半）に、タガの刻み目は奈良県メスリ山古墳[4]（4世紀中〜後葉）出土例に顕著に見られる。壺形埴輪は大阪府御旅山古墳[5]など4世紀後半代の古墳に多く見られ、その中でも古い形態をとるものと考えられる。

しかしこれらは本例を除き口縁部に透かし孔をもっていない。透かし孔をもつ例としては群馬県堀之内遺跡[6]、埼玉県鷲山古墳[7]などより出土した特殊壺形土器に見られ、4世紀中頃の年代が考えられている。また壺形埴輪ではないが口縁部に透かし孔をもつ例は、メスリ山古墳の特殊円筒埴輪に三角形などの形が見られる。

土師器壺は形態的にはS字口縁台付甕の肩部に横走ハケメをもつ段階の壺の形態に近い。刺突文は伊勢型二重口縁壺などに見られるが、群馬県下ではS字口縁台付甕の肩部に横走ハケメの見られる段階[8]で、4世紀中葉頃が推定されている。なお伊勢型二重口縁壺のⅢ～Ⅳ期の口縁部形態（4世紀中～後半）が本墳出土の壺形埴輪に類似する点が興味深い。

以上の点から4世紀後葉頃、あるいはこれをややさかのぼる時期を想定しておきたい。なお木製品は京都府今里車塚古墳出土品など[9]に比べ立体感が無く、今後さらに検討が必要かと考えられる。

第2節　丸山塚古墳

1．石室

既に露出している北端側の数枚の天井石を基準に、セクションベルトを主軸方向に設定して掘り下げを行ったところ、天井石の周囲に礫が部分的ではあるがカマボコ状に充填された状況が窺え、控え積みの施設と考えられた。これは10*cm*前後の栗石と、30*cm*前後のやや大型の礫とからなる。

控え積みの範囲は深掘りを避けたため明確となった所はない。それでも東壁側で基底部より1.5mの範囲で栗石などがやや急角度で落ち込んで行く状態が認められ、控え積みの端に近いのではないかと推定された。西壁側では中央やや東寄りの基底部側壁より1.5m、南西側ではやや識別が困難であるが同じく1.8mあたりで栗石が切れる状態で、やはり端に近いものと言えよう。南壁側は栗石が基底部側壁より60*cm*程で切れ、幅の狭すぎる嫌いがある。しかし北壁側にもほとんど見られず、さらにボーリング調査でも顕著な礫の存在も無いようであり、東・西壁とは若干の違いがあるのではないかと考えられる。これらから控え積みの範囲は石室の周囲に幅1.5m前後に存在するのではないかと推定される。

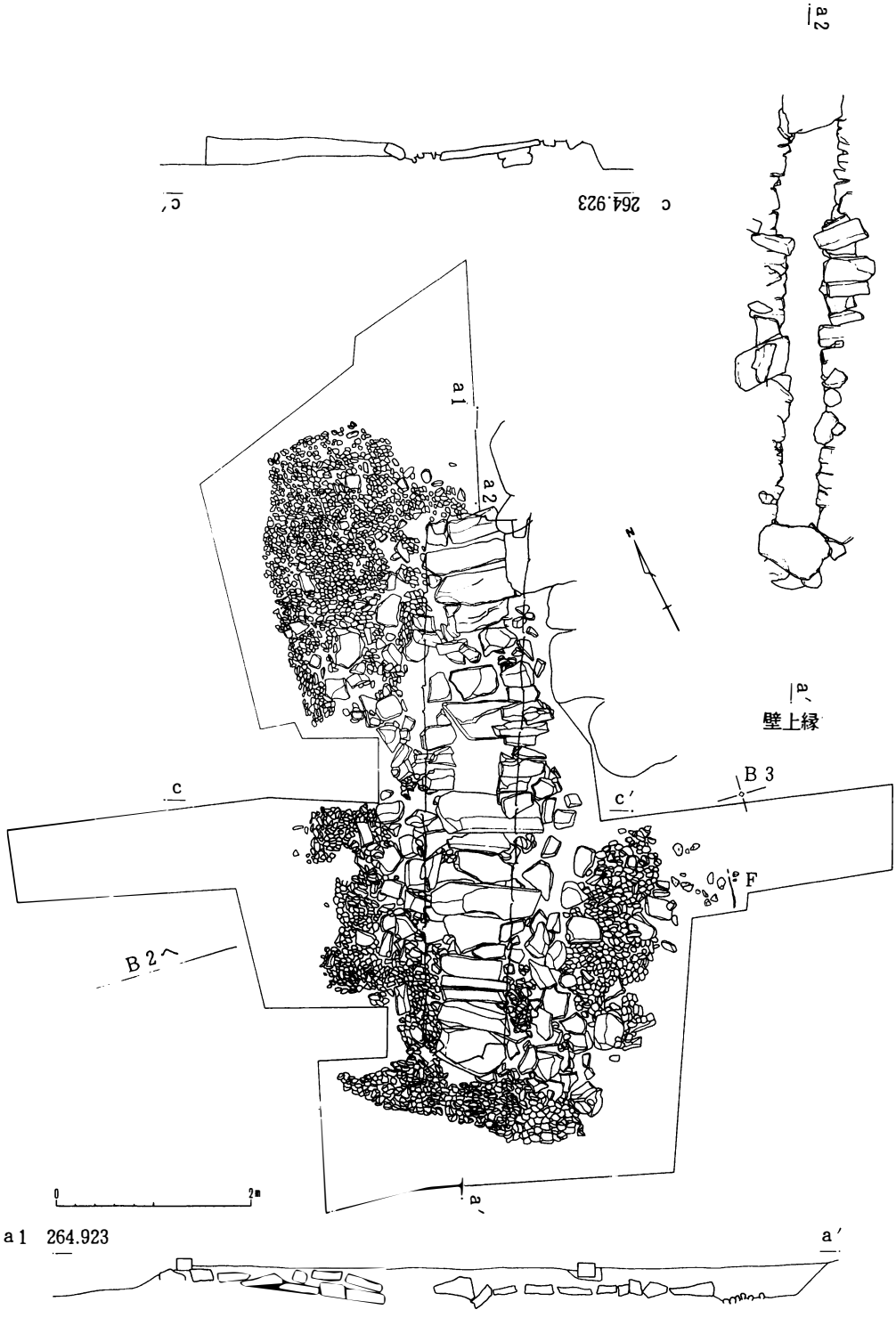
天井石は北側より4枚目までと、南側より10枚目までの計14枚は両壁より差し渡されて架設されていたが、この間の5枚前後と推定される範囲では抜き取られているような状況を呈し、昭和45年に開口していた石室を塞ぐため埋められた砂利砂が露呈していた。

この天井石に達する間の厚さ0～60*cm*において、粘土などを貼った状況は全く認められず、耕作土と考えられる褐色土が見られるのみであった。また天井石の石と石の隙間に粘土などを充填した形跡も全く認められなかった。このような状況は、既に天井石部分まで後世の人の手が入ったことを示しているものであろう。明治40年の発見された折りの状況が『山梨日日新聞』に「古墳の土をも掘取りて同埋め立てに使用せんとしてだんだんに掘行く内図らず石棺とも見ゆるものに掘当てたるより其上石を取り除けば下に朱詰となりて」と掲載されており、またその後、昭和3年の小松真一氏の報文[11]においても総ての天井石が取り上げられている状況が記されているなど、今回の調査結果と合致するものといえよう。

第22図　丸山塚古墳平面図

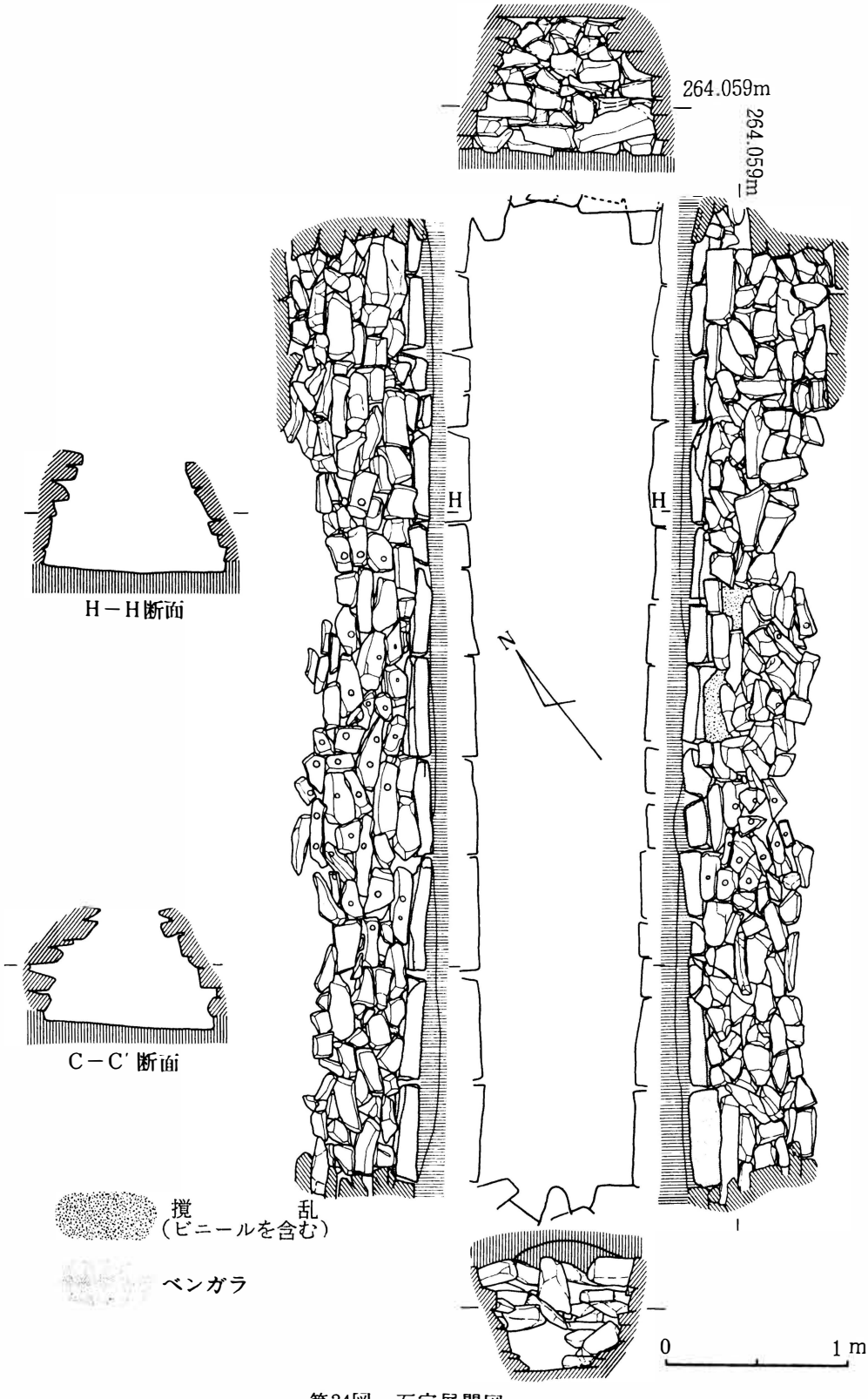
石室は主軸をN－38°－Eにとる竪穴式石室である。四壁とも偏平な自然石を小口積みに、持ち送り式に構築している。基底部幅が1.05～0.85mであるのに対して、壁上部に至っては幅30*cm*前後と狭く、特に基底部から２～３段目あたりより傾斜を強める状況といえる。

基底部の石は、長手でかつ大振りの石材が使用されている。この基底部の石は東・西壁の場合、中央部が両端に比べ５*cm*ほど低まっており、緩やかな弓状を呈している。また基底部隅の石材は小口面を長く石室の内側まで突出するように据えられており、特に北壁側に顕著



第23図　主体部平面図

であった。規模は床面で長さ5.55m、幅が北壁で1.05m、南壁で0.85m、高さが北壁で0.85m、南壁で0.65mを測り、やや北壁側の広い矩形を呈している。



第24図　石室展開図

床面は基底部石材の下に浸食の著しい部分があった。現状ではほぼ平坦に近くかつ中央部が僅にくぼんでいるが、基底部の石材の状況からすれば従来よりは両端から中央部に向かってやや低まっていたものと考えるのが至当であろう。しかしこのくぼみは木棺を据えれるようなU字状ではなく、ごく浅いものと考えられる。

石室内の基底部の石材には内側を向いた面ばかりでなく、上面にも赤色顔料が塗布されており、石室を構築するさいにこの面で最初の一区切りのあったことが推定される。床面も全面にわたり赤色顔料の塗布が認められたが、中央部では床面の剥落などからか、やや薄いようであった。

東壁・西壁とのそれぞれの中央付近の石材には、直径3*cm*前後の珠文が施されていた。この珠文はよく見なければ見落としてしまうような薄い色調のものが多く、明瞭に確認できるものは少ない状況であった。その塗布される部位の間隔にはこれといった基準はないようで、小型の石材には概ね石材の中央あたりに1個、大型のやや幅のあるようなものには2個ぐらいであった。珠文の数は西壁に34個ほど確認されたのに対して、東壁では15個と少ない。しかしこれは東壁の中央部当たりに見られる攪乱土の中にビニール片が混入していることから分かるように、後世の積み直しのためと考えられる。恐らく本石室を塞ごうとした昭和45年の時のことと考えられ、積み直した石材の外側を向いた面あるいは石室内に落下している石材の小口面などに珠文の施されている例が見られ、その数は西壁に近かったものと想定される。これ以外には天井石の南側から10枚目の内面に赤色顔料で「圓山□」なる文字の書かれているのが確認された。一字がおおよそ16～22*cm*角で、左より右に向かって書かれている。また天井石の南側から5枚目と6枚目との間をふさぐ壁の用材と考えられる小振りの石材の外側を向く小口面にも珠文が認められた。

これら一連の赤色顔料の成分は、東京国立文化財研究所の江本義理先生に分析していただいたところ、ベンガラ（酸化第二鉄）であることが明らかとなった。また、石材は山梨大学教授・理学博士西宮克彦先生に鑑定していただいたところ、石英安山岩で、本町南部の七覚・善藤付近に産するものが使用されたものと推定できるという。

2．墳丘および周溝

1－1号トレンチ　墳丘の北側に設定したトレンチである。A点より3.0m、5.02m、6.95m付近に変換点が見られるが、3.0m付近ではもちろん5.02m付近でも6・11号トレンチとの関係からすればやや内側に入り込む嫌いがあり、明確性を欠くが6.95m付近を墳端と見た。墳端に石積みなどの施設は全く見られなかつた。周溝は地表下1.37mほどで、黄褐色粘土層の底となる。このトレンチを設定した部分はかって帆立貝式古墳の造りだしとされていた[10]所であるが、底面直上の褐色土層中より埴輪の小片、さらに陶磁器片などの出土が確認され、後世の開墾によって造りだし状になったものと判断された。

1－2号トレンチ　1－1号トレンチの北側に周溝外縁を確認するために設定した。A点より2.84mに基部が、4.24mに肩部の変換点が見られた。周溝は地表下1mほどで、粘質の褐色土層の底となる。なお肩部からの深さは62*cm*である。

6号トレンチ　墳丘の北東側に設定したトレンチである。A点より10.11mに墳端の変換点が見られる。墳端あたりの墳丘封土は粘土、小礫混入土などの互層である。墳端に小礫の堆積は見られるものの、石積みなどの施設はなかった。周溝は地表より1.81mで、青灰色粘土層の底となる。

2－1号トレンチ　墳丘の東側に設定したトレンチである。A点より10.3mに中段と考えられる変換点があり、80cm程の平坦部が見られる。しかし礫などは全く見られない。A点より23.58mに墳端の変換点を求めたが、さらに1.5m外側を考えるのが適切かもしれない。墳端に大型の礫の堆積はほとんど見られず、粘質土層の堆積が厚く見られる。墳端の墳丘封土は粘土、粘質土などの互層で、墳頂に向かってもこの傾向は強い。周溝は1.64mで、青灰色粘土層の底となる。

2－2号トレンチ　2－1号トレンチの東側に周溝外縁を確認するために設定したトレンチである。A点より1.5mで周溝外縁部の基部、4.5mに肩部の変換点が見られた。周溝は1.36mで礫混入褐色土の底となる。立ち上がり部分の多くは礫層である。

7号トレンチ　墳丘の南東側に周溝外縁を確認するために設定したトレンチである。A点より4.99mに外縁基部、9.1mに肩部の変換点が見られた。外縁の立ち上がり部分は礫混入土層と粘土層の互層である。周溝は2.0mで、青灰色粘土層の底となる。なお底は墳丘側に向かって緩やかに落ち込んで行くようである。

3号トレンチ　墳丘の南側に設定したトレンチである。本トレンチの周溝側部分については、調査時の出水が激しく周溝の底の確認は明確にならなかった。A点より10.5m、現在の段の直下に中段ではないかと考えられる変換点があり、0.4m程の平坦面が見られる。A点より22.88mに墳端の変換点が見られる。墳丘封土は礫混入土層の互層を基調としている。周溝は墳端と考えている辺りで、地表から1.68mを測る。

8号トレンチ　墳丘の南西側に周溝外縁を確認するために設定したトレンチである。A点より10.8mに基部、14.2mに肩部の変換点が見られる。外縁立ち上がりの部分は礫混入土層がほとんどである。周溝の底は小礫混入青灰色粘土層で、墳丘に向かって緩やかに落ち込んで行く。最も深いところで2.1mを測る。

9－1号トレンチ　A点より1.84mに中段の様な変換点が見られるが、他のトレンチに見られず明確にならない。A点より8.49mに墳端の変換点を求めた。墳端には大型の礫の堆積はほとんど無い。墳丘封土は礫を含まない土層の互層である。周溝の底は青灰色粘土層で地表面より1.88mである。

9－2号トレンチ　周溝内に設定したトレンチである。2.0mで青灰色粘土層に達する。

9－3号トレンチ　周溝外縁を確認するために設定したトレンチである。A点より0.7mに肩部と考えられる変換点が見られる。礫混入土層である。

4－1号トレンチ　墳丘の西側に設定したトレンチである。A点より11.9m、現在の段の直下に変換点が見られる。A点より26.6mに墳端の変換点が見られる。周溝は地表面から1.4mで、青灰色粘土層の底となる。

4－2号トレンチ　周溝中に設定したトレンチである。約1ｍで青灰色粘土層の底に達する。これは4－1号トレンチとの間に大きな差をもっている。

10号トレンチ　墳丘の南西側の周溝外縁を確認するために設定したトレンチである。A点より2.8ｍに基部、5.84ｍに肩部の変換点が見られる。立ち上がり部分はほとんど小礫混入土層からなる。周溝の底は青灰色粘土層で、地表より1.5ｍである。

11号トレンチ　墳丘の南西側で、10号と1号トレンチの間に設定したトレンチである。でこぼこが多く開墾の激しかったことが窺える。A点より10.86mに変換点を認められるが、やや外側に突出する嫌いがあり明瞭性にかけるがA点より9.56mに墳端の変換点を求めた。墳端に大型の礫の堆積はほとんど無い。墳丘封土は礫混入土層を基調にしているようである。周溝は地表下1.8mで、青灰色粘土層の底となり、外側に向かって低まって行く。

3．出土遺物

出土状況

埴輪は墳端トレンチの堆積土中からの出土がほとんどであり、周溝外縁部トレンチからの出土は皆無の状況であった。しかし総量的にはやや少ないようである。また現位置を示すような状況のものも、全く認められなかった。

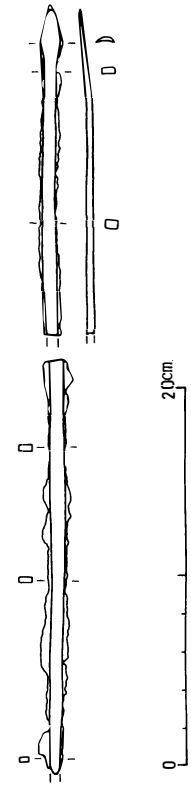
1号の墳端トレンチでは地表下1.5ｍにおいて埴輪片に混じって陶磁器片数点が上部の土層にふさがれた状況で出土した。

鉄製品が石室東側に延長したトレンチから出土した。地表下47*cm*からの出土であるが、埋葬施設が認められず、かつ覆土が天井部を覆う褐色土と同一であることから、明治40年の発掘の際に掘り出されたものが埋まったものと考えられる。

遺物

埴輪には円筒埴輪と器財埴輪とが見られるが、全体を復元できるものはない。

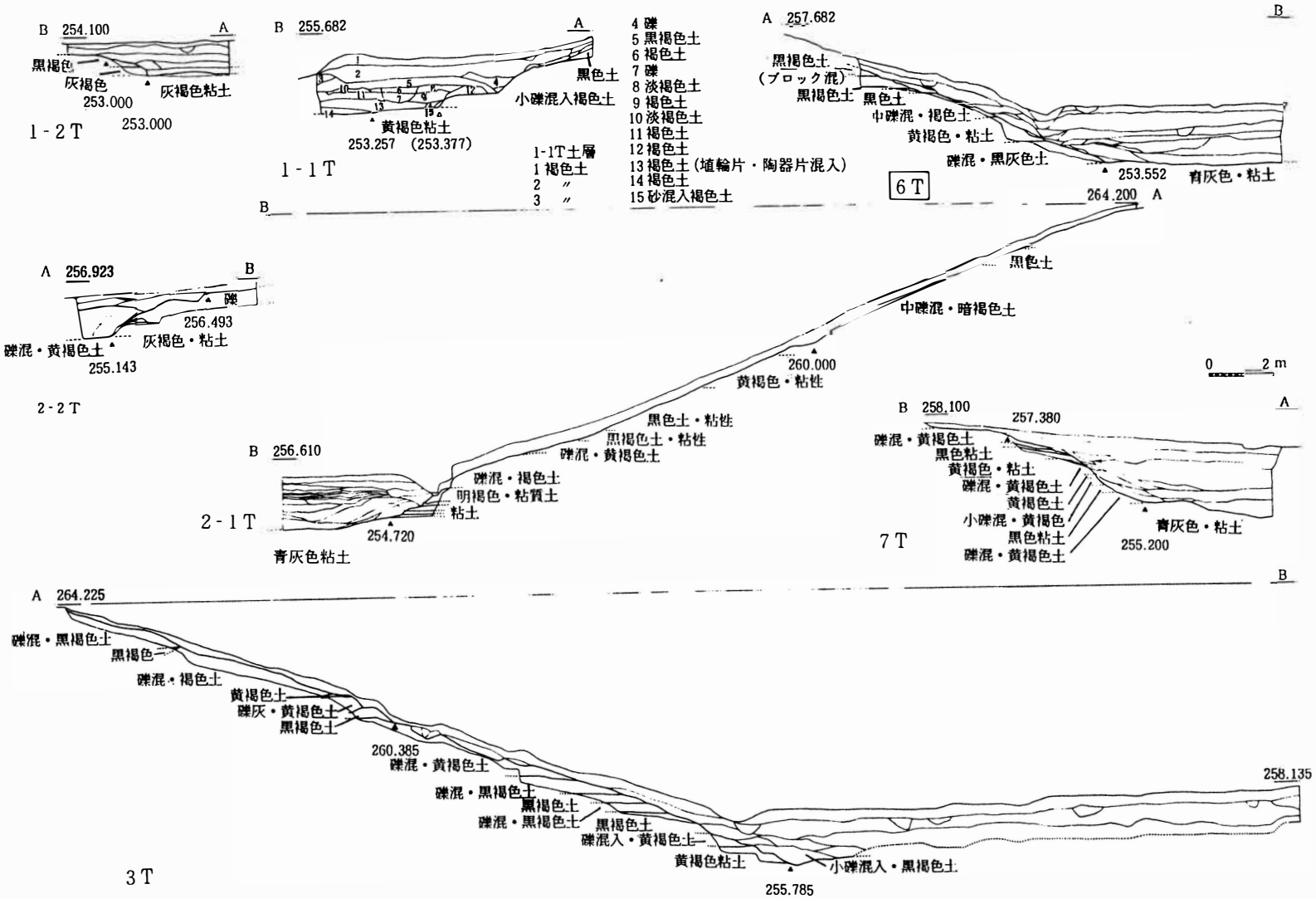
円筒埴輪は特殊器台的な有段口縁と逆ハの字状に開く単口縁に、設置面が三角形状でほとんど直立する基部が付く。調整は外面2次縦ハケメを基本とし、内面はナデ、ヨコハケなどが見られる。基部の外面にはナデも見られる。タガは突出度の比較的小さいもので、総て貼りつけで取り付けられている。透かし孔は三角形、方形、巴形が有り、1段に3～4孔以上穿たれる。その組み合わせは同一種類のみが多いのではないかと思われる（第28図6．7）。なお基部にも透かし孔の切り込みの見られるものがある（第29図14）。褐色を呈し、黒斑が見られる。



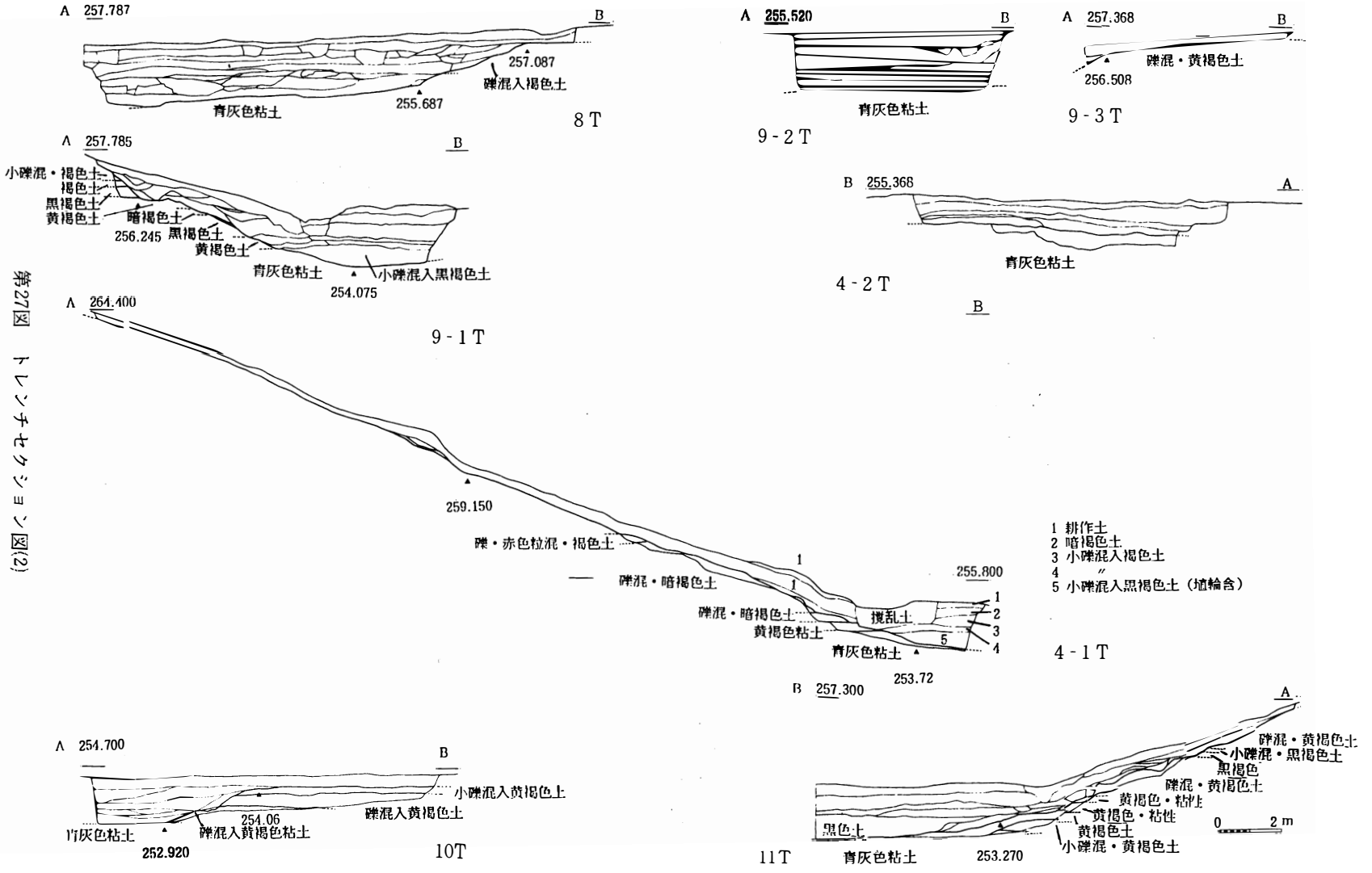
第25図　鉄製品

器財埴輪は蓋？（第30図4）や、突帯をハの字状に貼り付けた形態の不明なもの（同1～3）がある。

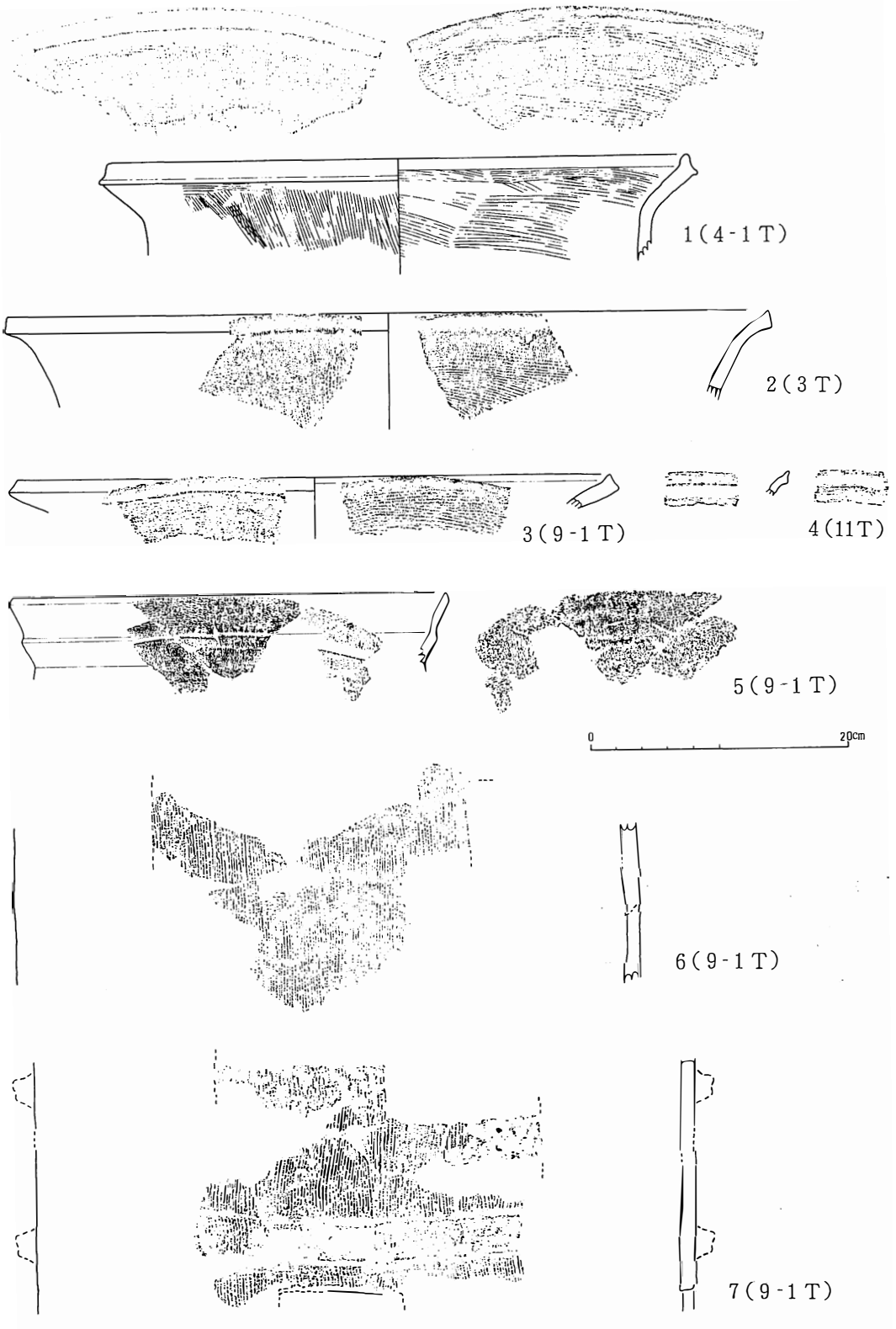
鉄製品は先端の断面が三ケ月状を呈する工具の鉈であり、現存長40*cm*ほどを測る。



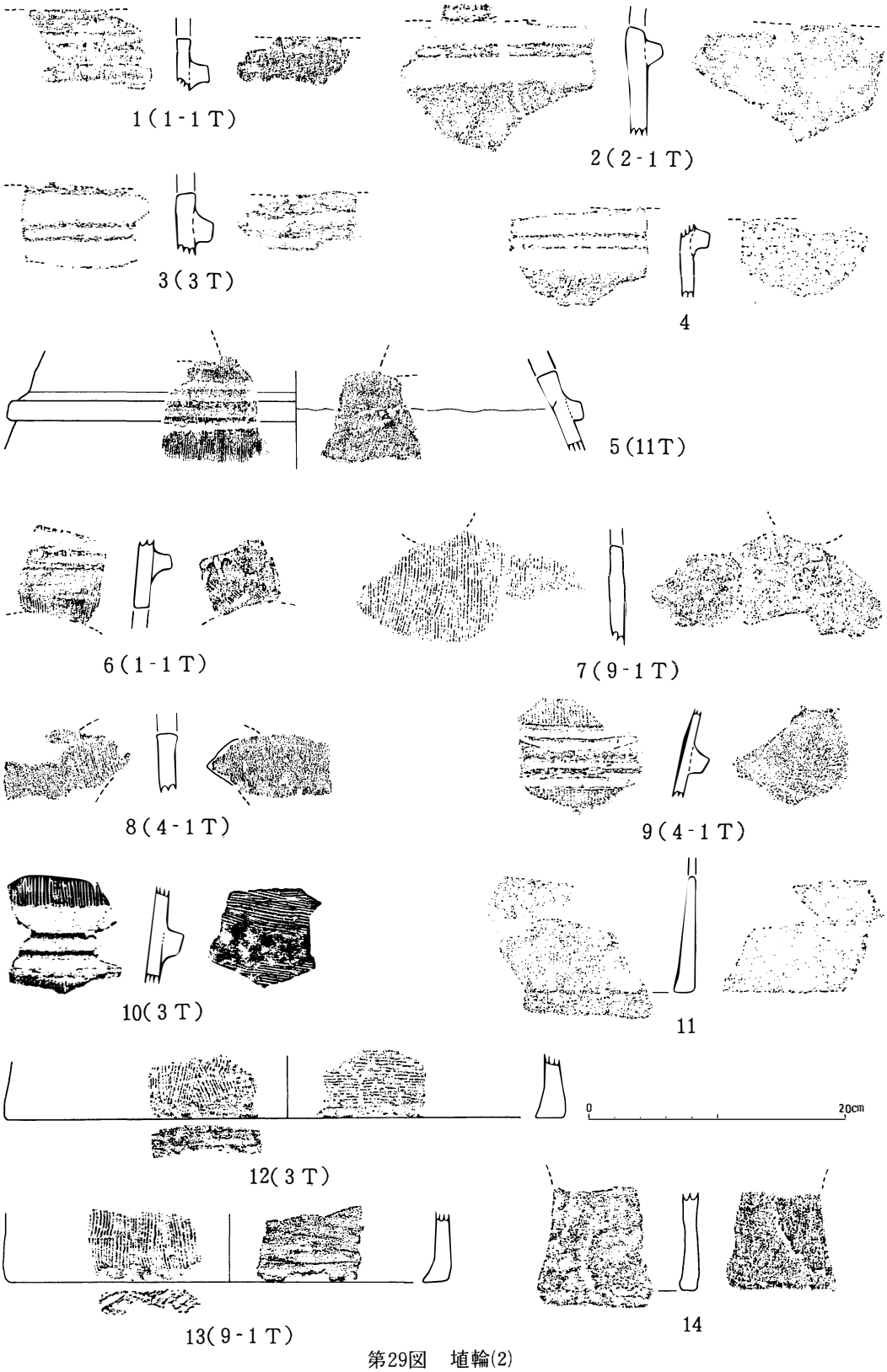
第26図 トレンチセクション図(1)



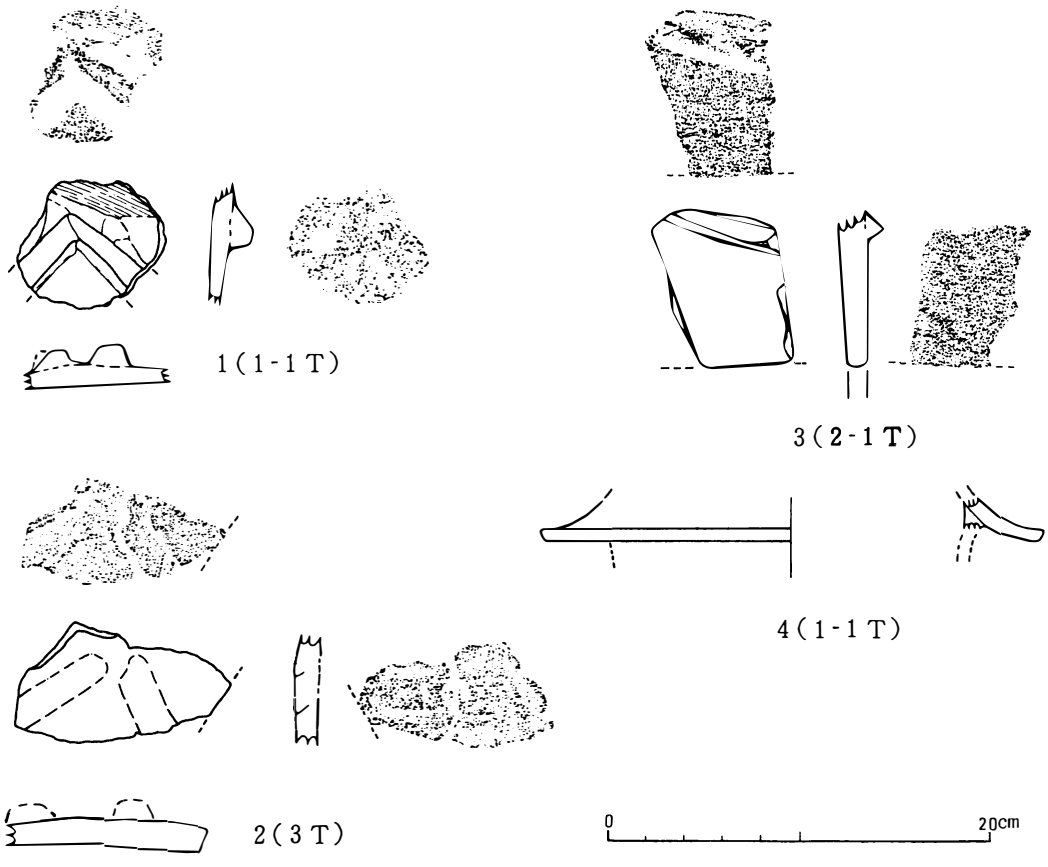
第27図　トレンチセクション図(2)



第28図　埴輪(1)


1(1-1T)
2(2-1T)
3(3T)
4
5(11T)
6(1-1T)
7(9-1T)
8(4-1T)
9(4-1T)
10(3T)
11
0
20cm
12(3T)
13(9-1T)
14

第29図　埴輪(2)



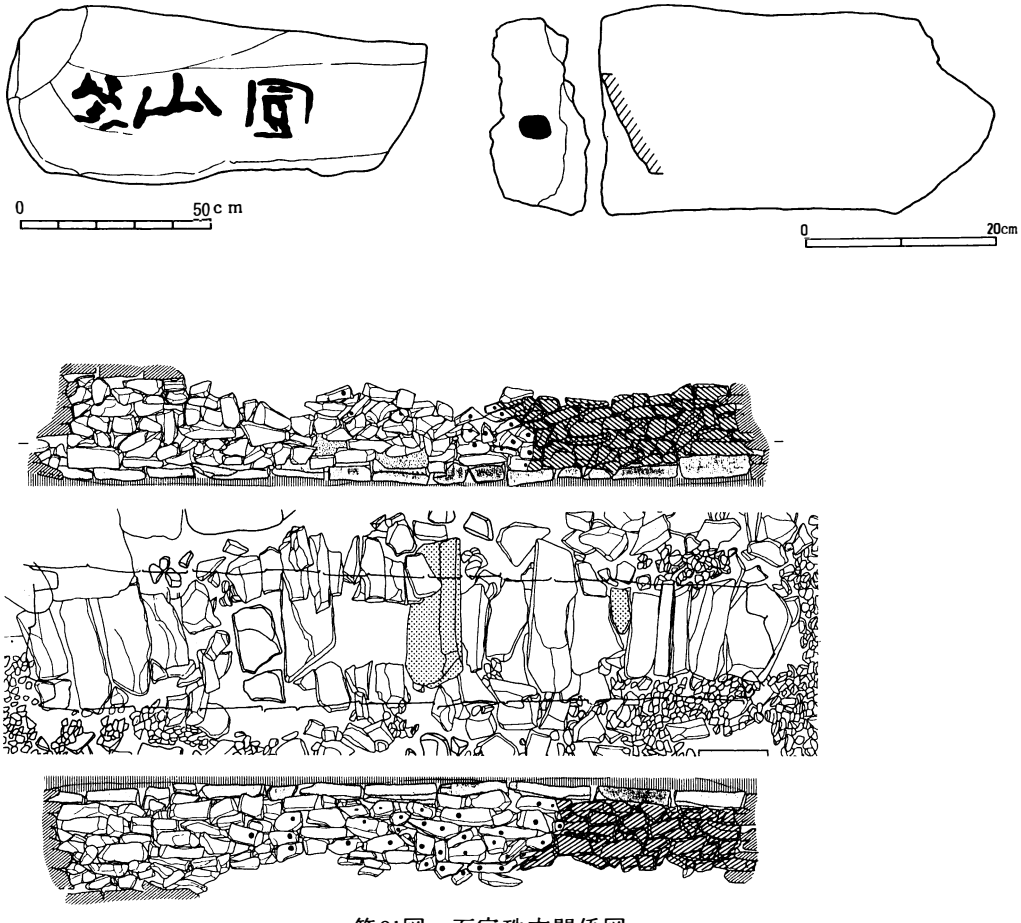
第30図　埴輪(3)

4．石室壁面の珠文について

次にこのベンガラによってこれら珠文がいつ書かれたかを考えてみたい。それは本珠文が古墳時代のものとすれば、装飾古墳の上限と大きくかかわりをもつことになるからである。

まず天井石の「圓山□」であるが、これは石室の内側に書かれていたもので三字が幅63*cm*の間に収められていた。これに対して天井石の架せられていた東西壁の上縁の幅は35*cm*であり、架したまま書くことは不可能となり当然天井石を取り上げ、あるいは反転した状態で書かれたこととなろう。このような状況は、明治40年をおいてほかに無いと言えよう。それは昭和３年の小松氏報告[11]の時点でも石室内に出入りする事はできたが、開口部は北側から５～６枚目の天井石の部位であり、また昭和45年に積み直されたと思われる部分もこの天井石までは達しておらず、いずれも天井石の移動は不可能となることによる。また左から右へといった書き順、それに旧漢字の使用も、これを裏付けるものとなろう。

それでは珠文はどうであろうか。「圓山□」の書かれた時、その後の開口している時のいずれの時点でも可能となる。しかし天井石の南側から５枚目と６枚目の東側間隙部分を埋めている、壁の用材と思われる細長い石材の小口面の東側（外側）を向いた面に珠文の見られる点に注目したい。それはその直下の壁面に崩れが認められず、また昭和45年の積み直しの範囲も及んでいない部分でもあることから、少なくとも明治40年の天井石を据え直した時点



第31図　石室珠文関係図

でなければ間隙部分に埋め込むことは不可能となり、当然それ以前に書かれていなければならないわけで、従ってこれらからすれば開口時の可能性も出てこよう。しかしこれも次の理由などによって可能性は低いものと言えよう。それは珠文が石室の中央付近、西壁を例に取れば中央約2.37mの間にのみ見られ、また石材の大きさによって施される珠文の数にある程度の規則性が存在したと考えられる点、その位置が通常遺骸を安置したと考えられるところであり、その後の書き込みとすれば極めて偶然性が強すぎる嫌いのある点をまずあげられる。また書き込むにしても石室の高さが低く上縁幅の狭い状況においては、体を動かすこと自体難しく、横たわってあるいは膝をついた姿勢での作業となり、通常ではやや考えにくいところと言えよう。さらに東西両壁の珠文南側部分における珠文の配列形態に、左右対称の状況を認めることができる点がある。これは南側部分の上半斜めが珠文を欠いており、意識的に左右対称となるように珠文を配置したものと言えよう。

以上の点などから明治40年においての珠文の書き込みにはやや難があり、古墳築造時に書かれたものと見ることができよう。天井石の間隙をふさぐのに使われた珠文をもつ石材も、開口時に天井石と共に取り上げられ、再び蓋をする時に埋め込まれたとするのが自然ではないだろうか。だがこれも推論の域を出ないとすれば、今後の類例の発見を待たなければなら

ないであろう。

5．石室壁面珠文処理経過

石室の調査中に壁面より珠文が発見されたため、県文化課を通じて文化庁に調査、処置方法の指導を要請し、文化庁、東京国立文化財研究所、調査指導委員の各先生方から指導・助言をいただき、写真撮影後に東京国立文化財研究所の樋口清治先生の指導のもと、当センター職員が樹脂処理を行った。使用樹脂はパラロイドB72である。

樹脂処理は床面にのみ施した。これは珠文に剥落の恐れが少ないと判断されたことからである。また側壁の基底部に敷かれた石材についても、同様な理由から処理を見合わせた。床面の処理は特に剥落の著しい壁際を中心に行い、数回にわたって塗布した。

樹脂処理後に石室の崩壊を防ぐため、石室内に川砂利を充填した。天井石を元に復し、その上に防水のための粘土（褐色）を厚さ10cm前後に被覆してから土を埋めもどした。なおこれらの処理経過は次のとおりである。

6月11日	丸山塚古墳発掘調査開始
9月3～11日	石室の壁に赤色の珠文発見、実測作業と文化課へ指導方依頼
9月13日	文化庁文化財保護審議会専門委員　斎藤忠先生、文化庁主任文化財調査官　河原純之先生調査
9月20日	文化庁文化財調査官　加藤允彦先生、東京国立文化財研究所保存科学部長　江本義理先生調査（赤色顔料分析）
9月27日	筑波大学教授　岩崎卓也先生調査
10月1日	(故)井出佐重、野沢昌康、飯島進、山本寿々雄、谷口一夫先生調査
10月11日	記者発表
10月15～23日	石室展開写真撮影（撮影者　小川忠博氏）
10月16日	元東京芸術大学教授　日下八光先生調査
10月18日	明治大学教授　大塚初重先生調査
11月9日	岡山大学教授　近藤義郎先生調査
11月11日	日本考古学協会山梨大会で現地公開
11月14日	丸山塚古墳整備工事開始
11月28日	東京国立文化財研究所　江本先生、同研究所第三修復技術研究室長樋口清治先生調査（保存科学）
12月14～18日	床面の赤色顔料（ベンガラ）の樹脂処理。なお珠文については樹脂処理は見合わせ、自然の状態での保存とした。
12月19～22日	石室の埋めもどし。調査終了。

6．小結

墳端における変換点は明瞭なものが少ない中で、判断可能な部分を参考にかつ標高などを加味して墳端の位置を推定した。この結果、南側の3・7号トレンチの間に最高位が、北側の1・11号トレンチの間に最低位の存在が考えられ、現地形の変化と対応するようである。

これらから推定した規模は東西・南北ともに直径72m、高さ11m（北斜面）ほどが算出された。

墳丘の構築は2段築成と考えられる。これは現状での段の直下にある変換点を中段として捉えたものである。このため中段の明確な幅は全く確認できなかった。中段は墳丘斜面のほぼ中間にあり、南側から北側に向かって低まって行き、その高低差は1.2m以上になろう。

葺石については、墳端に礫の堆積が殆ど見られなかったことから、設備されていなかったとみることができよう。また埴輪については墳端の堆積土層から検出されてはいるが、いずれのトレンチにおいても樹立の痕跡は認められなかった。

周溝は一重であるが、北側で狭く15m、南側で広く25m程をはかる。周溝底は南側が高く北側が低く、標高で約2.5mの高低差をもっている。なお底から肩部までの高さは北側で60*cm*、南側で2.18mであった。

築造年代

埴輪は銚子塚古墳のものに比べて、タガの突出度、基部形態に若干の違いが有るようだが、透かし孔の形態、調整など大枠では類似性が強くこれらからすれば5世紀のごく初頭と考えられ、さらにそれより幾分溯る可能性もある。

年代がある程度推定されたところで、石室壁面に見られる珠文について触れておきたい。装飾古墳は4世紀後半の石棺系装飾古墳に始まり、その後石障系、壁画系、横穴系といった装飾古墳が出現してくることは、既に明らかにされているところである。[12] これらは装飾の施された場所による分類であり、これに従えば本墳例は竪穴式石室といった違いは有るが、壁画系に分類されるものとなろう。しかし壁画系の出現は現段階では6世紀前半の福岡県日ノ岡古墳例が最古とされており、本墳例はこれを遥かに溯ることになり、時間的さらには空間的にも孤立することになる。しかし古い時期の石棺系装飾古墳の分布を見ると山陰～北陸地方に見られ、「装飾」といった風習が比較的広い地域にまで波及していたことが窺われ、本県の地域でも幾らかは触れたであろうとすることは否定できないところといえよう。しかし本県は石棺の未発達地域であり、その場合、石棺に代わるものへ装飾を加えることは十分考えられるところである。それが壁に表現されたものとすれば、先程の壁画系としては大きな時間的、空間的の違いの存在を埋めることができよう。

第４章　保存整備工事

第１節　墳丘および周溝の復元

発掘調査の成果に基づき、古墳の規模、形態について第３・22図の様に復元した。しかし、これらを復元していくうえで、明確な変換点を捉え切れなかった部分もあり、今後に残された課題も多いものと言えよう。

銚子塚古墳

墳丘のほぼ全体にわたって開墾されており、墳端の土砂の堆積状況を見ればかなりの破壊が考えられ、肩部の原型はほとんど残っていないものといえよう。特に破壊の著しい部分は、前方部では南側斜面であり等高線の状況によく見ることができる。後円部では西側から北西側斜面にかけて大きな崩れが見られる。また墳頂部では南西から東側にかけた肩部に特に著しい崩れの跡が認められる。それは１ｍ前後にも及ぶものであったりしたので、これらの状況を加味して復元を行った。

墳頂部平坦部の規模は、先程の状況と中段の立ち上がり角度などから、おおよその推定を下したものである。中段は上下の２段にわたり確認された。南東、南西、北西の斜面で、葺石とそれに埴輪などが明瞭に認められ、これらの変換点を基に復元したもので、一定の方向性をもっている。下段の中段と対応する前方部の中段の変換点は明瞭なものがない。しかし、それと考える部分とを結んでみてもそれほど矛盾は無いようである。前方部と後円部との接続する当たりを中心にしてそれぞれの端に向かうに連れて標高を高めている。墳端は周溝の底と墳丘封土との変換点を比較的明瞭に捉えられる箇所が多く、これらを基に裾の縁線を決定した。特に前方部正面の裾縁線は、周溝外縁の形状から推定したものであったが造成工事の削平の際においても、墳端が推定線より外側に突出している状況は認められず、妥当性をもつものと言えよう。埴輪の施設は下段の中段において樹立されていたことが確認できたが、上段での存在の有無が今一つ明らかにならなかった。またこれと関係する中段の平坦部の幅については、総ての段で明らかになっていない。

周溝外縁については基部、肩部と思われる変換点が確認され、これらによって復元した。ただし南側の部分については外側２箇所の変換点も肩部として捉えたが、その最も外側の終末については明らかでない。

丸山塚古墳

墳丘は全面にわたり開墾、耕作されており、墳端に堆積した土砂の量、石室の天井石の一部が露出していることなどから削平の著しいことが窺える。墳頂の平坦面は墳丘の立ち上がり角度を延長して推定したものである。中段には葺石の施設も、埴輪の施設も認められず、現状の段の直下に見られた僅な変換点を中段と考えて復元した。墳端は銚子塚古墳ほど明瞭では無かったが、周囲のトレンチにおける状況や標高などを加味して復元した。その中で北側部分については墳丘の等高線がかなり直線的に走っていることから、墳丘が偏円形を呈し

ていた可能性もありＡ点より4.8ｍの変換点がそれにあたる。しかし削平の度合が不明で、かつ６号トレンチの墳端との関係からさらに2.1ｍほど外側に墳端を設定した。

周溝外縁部はその変換点が比較的明瞭に捉えられ、これらを結んで復元したが、基部の標高からすればそれほど無理のないものと言えよう。

第２節　墳丘および周溝の保存整備工事

１．整備方針

古墳の各部位が後世の開墾などによってどれだけ削平され、逆に盛られたのかが調査によって的確に捉えられれば、築造当初の姿を復元することができる。しかし、多くの場合前者であり、この場合には周囲の状況などを加味して推定していく以外方法はない。今回の調査においても、銚子塚古墳の後円部の中段の変換点は、葺石の基部が確実に残っており後者の例となるが、逆に肩部にはなんら設備がなく削平されており前者の例となろう。同一構造物の基と端とにおいて確実なものと不確実なものとが同居している状況といえよう。丸山塚古墳の場合には明確な変換点が少なく、推定部分の入り込む余地が大きいものと言えよう。

このような状況を考えると、部分的な発掘からくる矛盾も考えられるところであり、現状に近い形態での復元が最も良いであろうということに結論された。現状に即した整備を基本として、調査によって得られた変換点をその直上の盛り土部分に表現する方法を取った。

墳丘等の復元に併せて教育の活用に供するため、石室表示をおこない、さらにこれらを園路によって結ぶこととした。また中間地帯には休憩施設それに併せて照明施設をも設置することとした。

古墳の周囲に存在する人家については、中低木をその際に植栽して生け垣を作ることにより、直接中が見えないように遮蔽した。

２．整備計画および工事仕様（別添実施設計図）

復元は現状の崩壊部に盛り土する方法を基本とする。この盛り土には崩壊部の修正とそれに芝貼りの床土の両者を含んでいる。崩壊部の修正には墳端２次堆積土の削平したものを充るが、その多くは場外からの搬入土である。これら盛り土の厚さは崩壊状況によって一様でなく、特に中段や墳頂の肩部が厚く中には１ｍ前後に達するところもある。芝貼りの床土は一律10*cm*の厚さとする。

整備工事の基準線は丸山塚古墳、銚子塚古墳ともに発掘用基準線を使用した。

墳丘

現墳丘および周溝上などに密生している桑、篠竹、すももなどの果樹を、墳丘上は人力、その他を重機による抜根後、上記仕様に基づいて土工事を実施した。特に重機の使用に当たっては遺構面の保存に留意した。

墳頂縁、上・中・下部丘裾縁、同中段テラス面肩部の各部位についての位置を設定し、盛り土整形を行った。盛り土の実厚平均は銚子塚古墳の場合、墳端で20*cm*、斜面上で10*cm*、墳頂肩部で70*cm*（0.4～1.1ｍ）、同中央部で25*cm*、丸山塚古墳の場合墳端で27*cm*、斜面上で10*cm*、墳頂肩部で57*cm*（48～70*cm*）、同中央部で35*cm*を測る。転圧はパワーシャベルのバケットによるほか、人力

による叩き板によった。

中段のテラス面の幅については、現状と同程度とした。また埴輪列の表示は不明な部分が多いことから行なわないこととした。

墳丘面の保存については、野芝の総貼りとした。風雨、見学等による崩壊を防止し、合わせて古墳の景観を整えるためである。

墳丘には園路を巡らせた。墳頂に登るための階段、それに墳丘上の芝生プロテクターなどである。

周溝

周溝部分も墳丘同様現状に即した整備を行い、立体的復元は行わなかった。このため堆積土の切り土は最小限に止め現状を整形した後、基底部幅に縁石を並べ、この間に厚さ10*cm*の枠石転圧をおこない、さらにその上に厚さ10*cm*の玉砂利敷きとする。周溝外縁の立ち上がりを芝貼り、その肩部を植栽で表現することとした。また周溝内の水処理の為に、U字溝、ビニールパイプ、透水管などによる排水施設の埋設を行うこととした。なおこれらはさらに敷地の外周部に設置したU字溝や小水路に流れ込み史跡外に排出されるようにする。

園路

園路は考古博物館、日本庭園と史跡とを有機的に結び付ける導線とした。丸山塚古墳から銚子塚古墳に至り、さらに東山山麓を経て上の平方形周溝墓などへ抜けられるようにもした。

丸山塚古墳の北西側と南東側の周溝縁辺付近に踊り場を造り、周溝内への出入り口とし、墳頂には墳丘に造った階段の墳丘園路で昇降出来るようにした。丸山塚古墳から銚子塚古墳へは、両古墳の中間地帯の園路を通り、銚子塚古墳の前方部の周溝正面に通ずるようにした。また銚子塚古墳の墳頂にも同様な階段などの墳丘園路を設けて昇降出来るようにした。さらに南側に走る農道に、くびれ部と後円部南西側の２箇所から階段によって行き来出来るようにした。

踊り場はいずれも枠石10*cm*、コンクリート10*cm*の基礎のうえにモルタル下地で平均直径35*cm*の御影石の洗いだしとした。

墳丘園路のうち階段部分は景観上を考え、擬木（直径10*cm*）、玉砂利敷きとした。幅員を1.5ｍ、１段の高さを20*cm*に統一した。また階段の両側に擬木支柱を等間隔で設置し、これに芝生内への立ち入り防止を目的としたチェーン（黒色、プラスチック製）を取り付けた。銚子塚古墳前方部の墳丘園路は、芝貼り後に4.75*cm*メッシュの芝生プロテクターを幅1.5ｍで後円部との接続するあたりまで設置した。

中間地帯の園路は玄武岩角礫で縁石を形どり、幅員1.5ｍで枠石敷きとした。

照明施設

屋外照明として、中間地帯に設置した。これは公園としての雰囲気を壊さないよう、色、形状に留意した。その結果、20W内蔵型、太陽電池式で自動点滅式のものを採用した。色は落ち着いたワインカラーである。設置場所は銚子塚古墳の前方部正面周溝の園路近くと、丸山塚古墳寄りの四阿近くの２箇所である。

休憩施設

休憩施設は中間地帯に集中して設置した。四阿、野外卓、背無しベンチ、吸いガラ入れなどで

ある。

四阿はこれまで銚子塚古墳、丸山塚古墳の墳頂にそれぞれ設置してあったものを１つにまとめ、この地に移転、新設した。4.8ｍ四方の方形の作りとし、柱は末口15㎝の桧磨丸太、クレオソート処理したものを使用した。床は周囲より10㎝高くして、鉄平石自然石貼りとした。また併せて周囲に雨落ち溝を回した。この中に木製のベンチ２基、吸いガラ入れ１個を置いた。屋根はアスファルトシングル葺きとした。

野外卓１、背無しベンチ２は、レッドウッド仕上げ、モルタル基礎で、銚子塚古墳前方部正面の園路を挟んだ北側に野外卓、南側に背無しベンチを設置した。

植栽

整備面には保存と修景上の観点とから、石室表示部分および周溝の一部を除き植栽を施した。墳丘はその崩壊を防止し、美観を整えるのに最適と考えられる野芝の総貼りのみとし、周溝とは縁石によって区切り、他の植栽は一切行わなかった。なお墳丘上に生えているドングリなどについては、自然景観の観点から芝生の育成に支障のない限り残すこととした。周溝部は原則として植栽を行わないこととしていたが、周溝外縁の基部から肩部にかけての立ち上がり法面の表示として芝貼りし、かつ肩部にはサツキを植栽した。

古墳以外にかかわる植栽については、周溝外縁の肩部より外側の公有地すべてが対象となるが、銚子塚古墳と丸山塚古墳との中間地帯がそのほとんどの面積を占める。園路を除き総て芝貼りとし、この中に中・高木のケヤキ、コブシ、モッコク、サルスベリ、シラカシなどを配した。

公有地化した地域の境には基本的にはドウダンツツジを配したが、特に人家部分についてはサザンカで垣根として遮蔽するようにした。

これらの植栽により緑陰を確保して、史跡部分の全体に自然のたたずまいを形成するものと思われる。

説明板

説明板は銚子塚古墳、丸山塚古墳の個々の説明板と、史跡およびその周辺を含めた総合案内板とがある。

個々の説明板は、ダイヤプレート製で、規格は縦70㎝、横90㎝である。左下隅に史跡指定地域および古墳の測量図を納め、それ以外に説明文を入れたものである。取り付けは鉄製アルミメッキのＵ字型支柱にボルト止めした。設置場所は丸山塚古墳は北西部の踊り場、銚子塚古墳は当初北側くびれ部に置いていたが、園路が整備されて行く中で最も効率良く読まれるであろう中間地帯の園路南側に移した。総合案内板は、ステンレス地にエッチング４色入り製（デュラクロン焼き付け塗装）とした。上部に史跡部分を含めた周辺の遺跡の位置、その下に解説文を入れた。設置場所は、中間地帯の園路南側である。

移設構造物

銚子塚古墳・丸山塚古墳の墳丘上には、四阿、石碑、石祠、石燈籠などの構造物が設置されていたが、これらは歴史的・習俗的構造物として、墳丘の下に移すこととした。このうち四阿については、既に述べたように両古墳の墳頂にそれぞれ在ったものを１つに合わせ、中間地帯に休憩

施設として移設・新設することにした。

銚子塚古墳に在った史跡指定碑（昭和29年、文化財保護委員会）、石祠、石燈籠は中問地帯の四阿西北寄りに移した。丸山塚古墳に在った郷民擁護碑（天保５年）、丸山之碑（明治21年、坪井正五郎博士撰文）、史跡指定碑（昭和29年、文化財保護委員会）の三碑は丸山塚古墳北西側にある踊り場にやや幅と高さとを圧縮して移設した。なおその移設の経過を銅板プレートに刻み、基礎の石に組み込んだ。

古墳石室表示

石室の位置を墳丘上に復元表示して、教育活用に供することとした。いずれも調査で得られた控え積み、石室範囲を、盛土整形された墳丘直上に縁石、玉石などで表示するものである。併せて石室の説明板も設置した。

排水工事

排水工事には古墳そのものを直接保護するものと、古墳周辺の環境を保護することによって古墳を間接的に保護するものがある。

古墳周辺の排水工事には、まず銚子塚古墳の前方部正面の墳端に沿って流れる小水路の工事がある。この小水路は恒常的な流水は無いが、異常気象時の降雨にも十分耐え得る断面容積とした。その場所も墳端際から周溝部分の中央へと変更、しかも史跡整備と調和の取れる工法とした。雑割り石積みで、底はコンクリート洗いだしとした。縁石の上面は周溝内の砂利敷きとの関係から、コンクリート仕上げとした。また中央当たりに園路の一部としての擬木橋を架設した。銚子塚古墳および公有地内からの排水の殆どが本水路を使用して、史跡外へ排水されることになる。

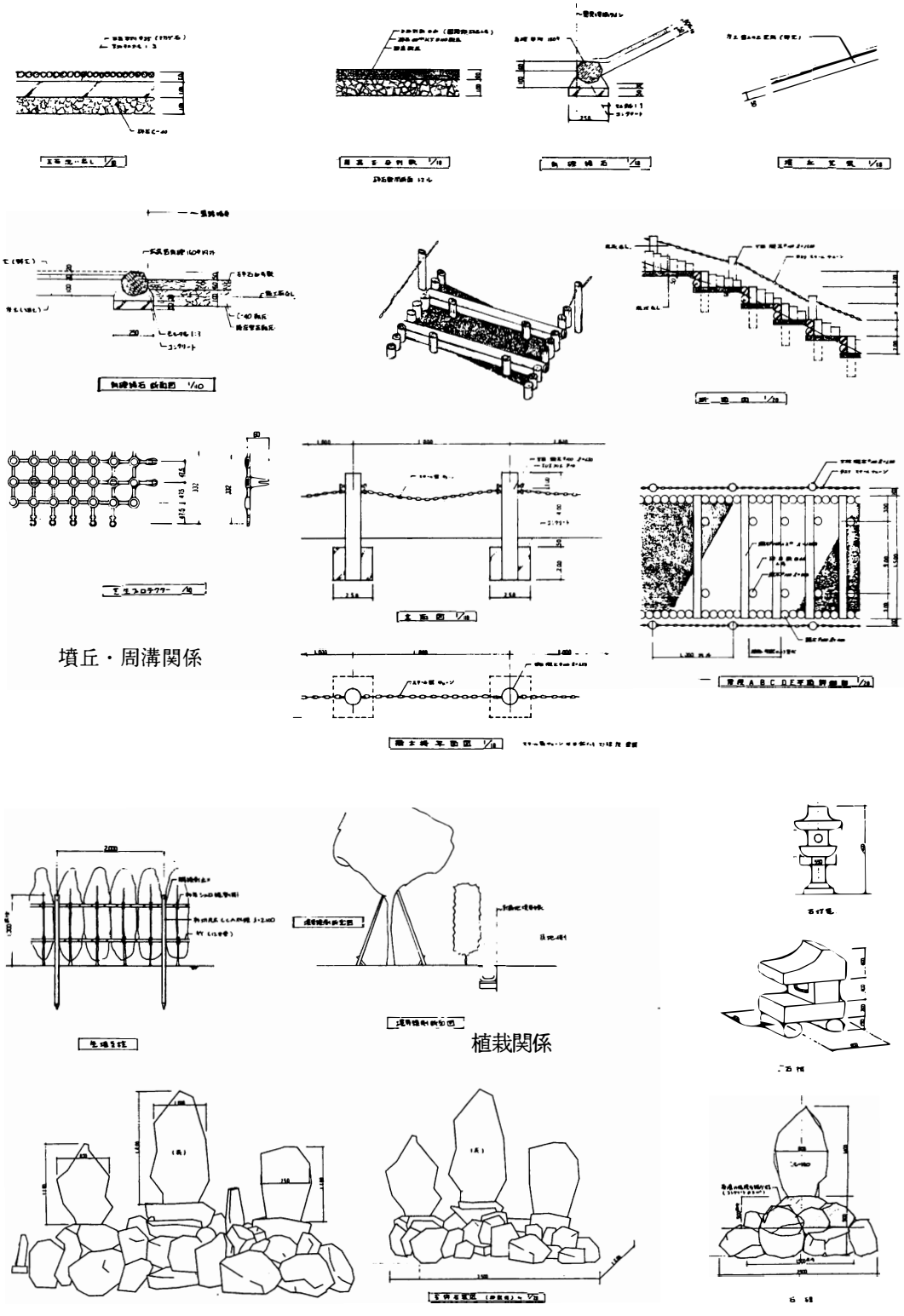
公有地内の古墳以外からの排水の処理は、境界際にコンクリート製Ｕ字溝を巡らせ、対処した。このＵ字溝に古墳墳丘および周溝からの排水が流れ込み、史跡外に排出される。なお銚子塚古墳の前方部南側などは、今後の整備計画との兼合いから素掘側溝とした。また後円部南西側の階段部分のＵ字溝からの排水処理はビニールパイプで西側の墳丘裾を巡る既存の側溝へ接続した。

古墳に直接かかわるものに墳頂と周溝の排水がある。墳頂は芝貼り保護するが、表流水から肩部の崩壊を防止するために、肩部にコンクリート製Ｕ字溝を巡らし、肩部の集水桝にあつめビニールパイプによって墳丘裾の集水桝に落下させ、さらにＵ字溝をへて境界際などの側溝（Ｕ字溝）より史跡外に排出される。

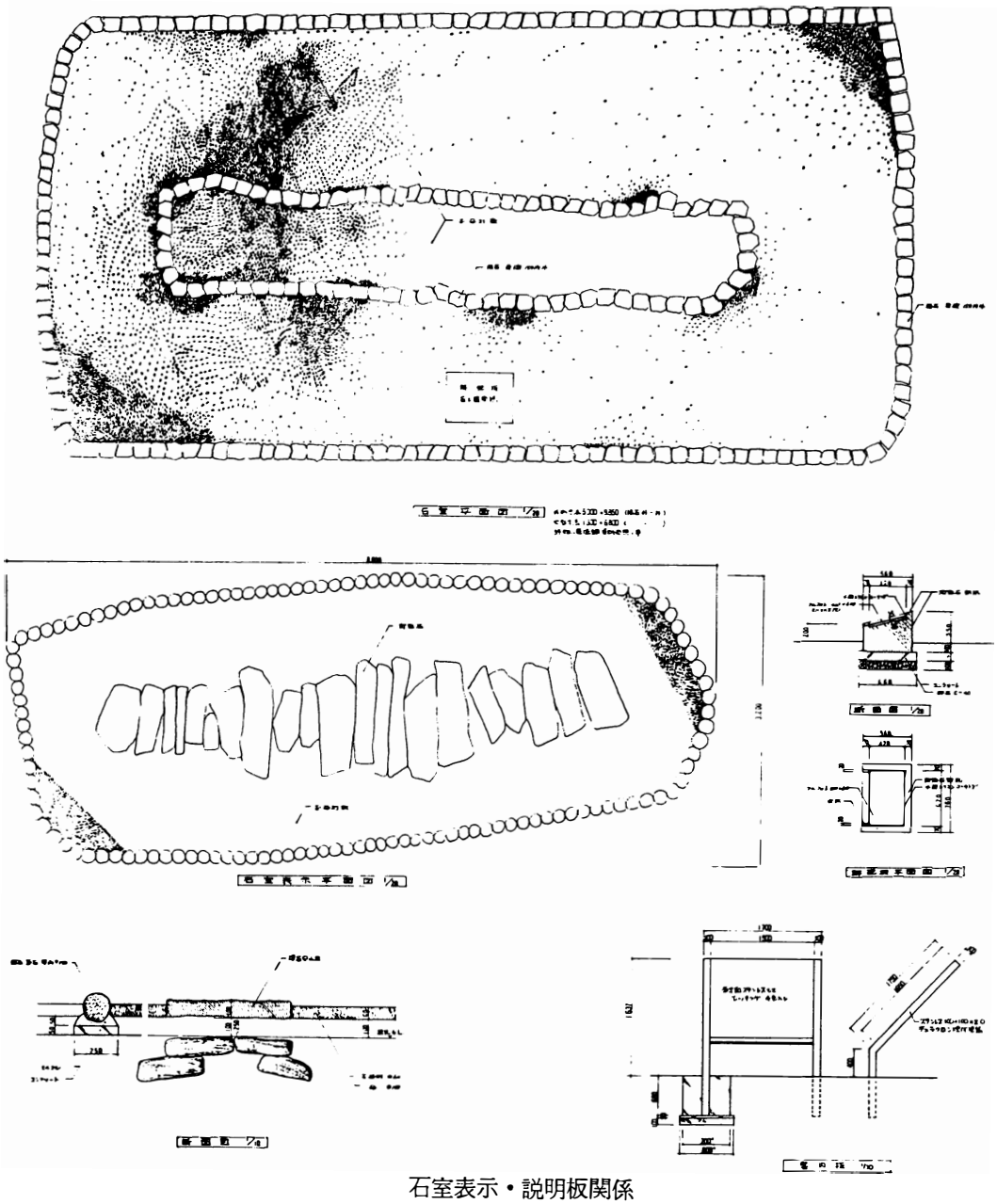
周溝内の排水処理は、銚子塚古墳では墳丘南側の裾近くを沿うようにコンクリート製Ｕ字溝を埋設し、前方部を流れる小水路へ流れ込むようにした。また前方部正面においてはビニールパイプを埋設して、小水路に排出されるようにしてある。丸山塚古墳では墳丘裾近くに主透水管を巡らし、これに副透水管を接続し、主透水管で境界際のＵ字溝に排出するようにした。透水管の回りには枠石を充填する。

第３節　航空測量および史跡境界杭設置工事

航空測量は、史跡範囲を含む200～400ｍ（80000㎡）について行った。国家座標に組み込み、縮尺 1／200、25㎝コンタで実施した（第２図）。なお測量図は山梨県教育委員会に保管してある。



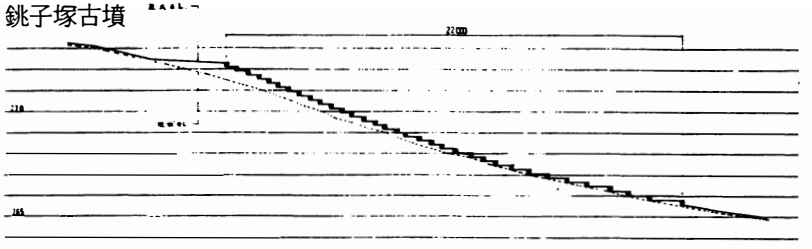
第32図　土工関係詳細図(1)

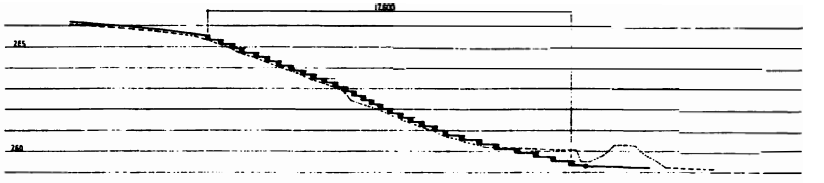


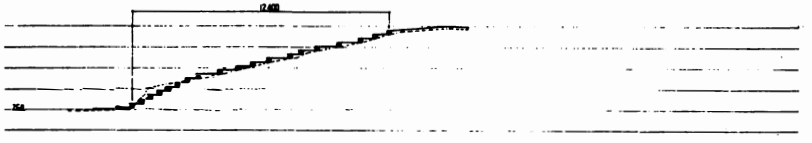
石室表示・説明板関係

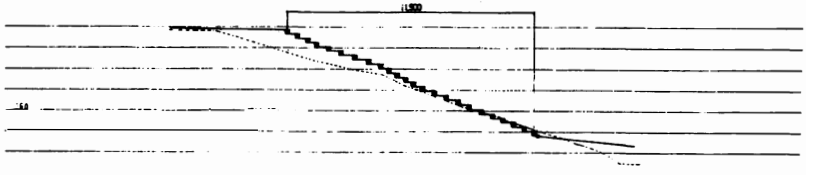
第33図　土工関係詳細図(2)

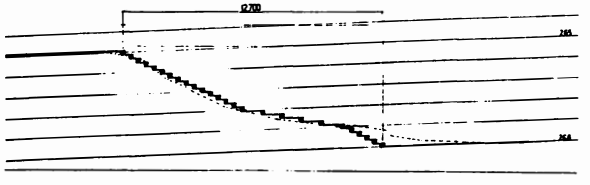
銚子塚古墳

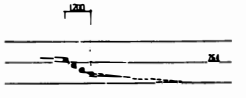




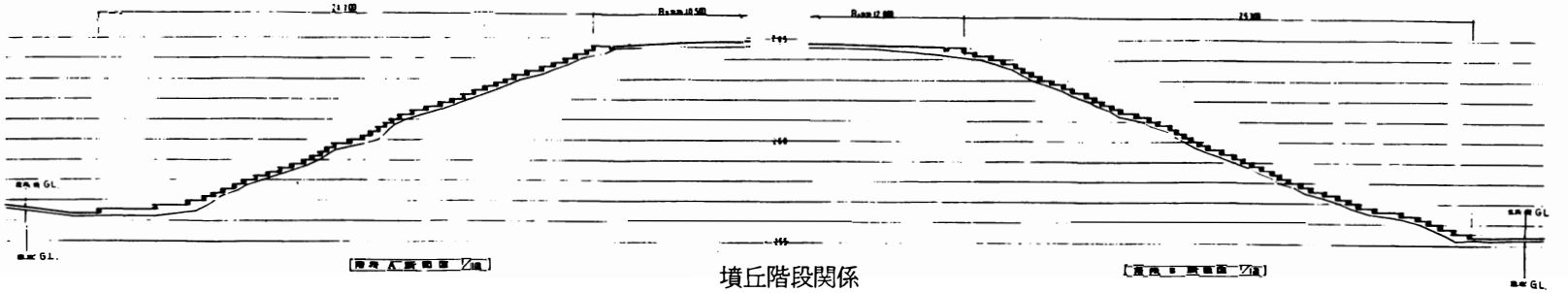






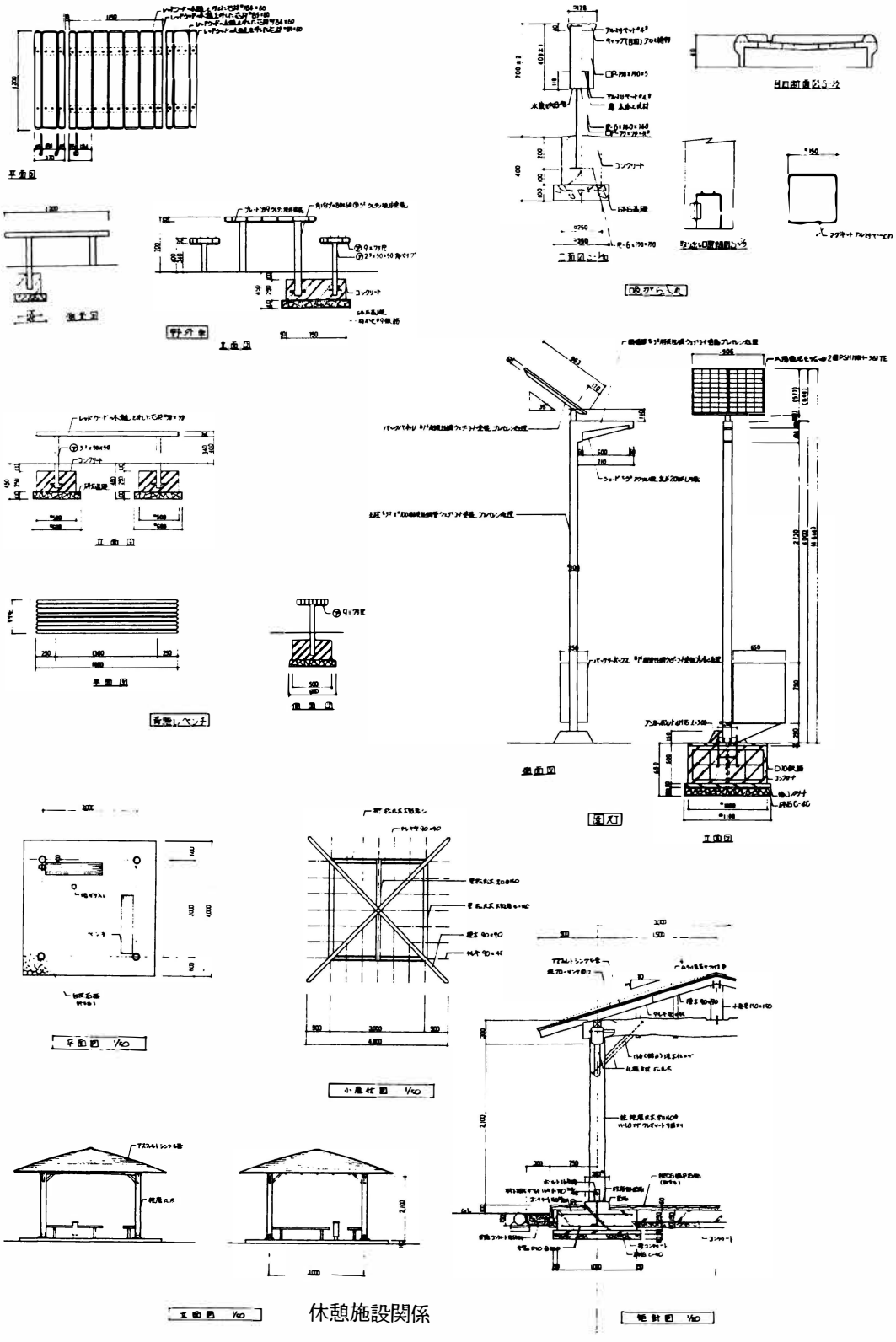


丸山塚古墳

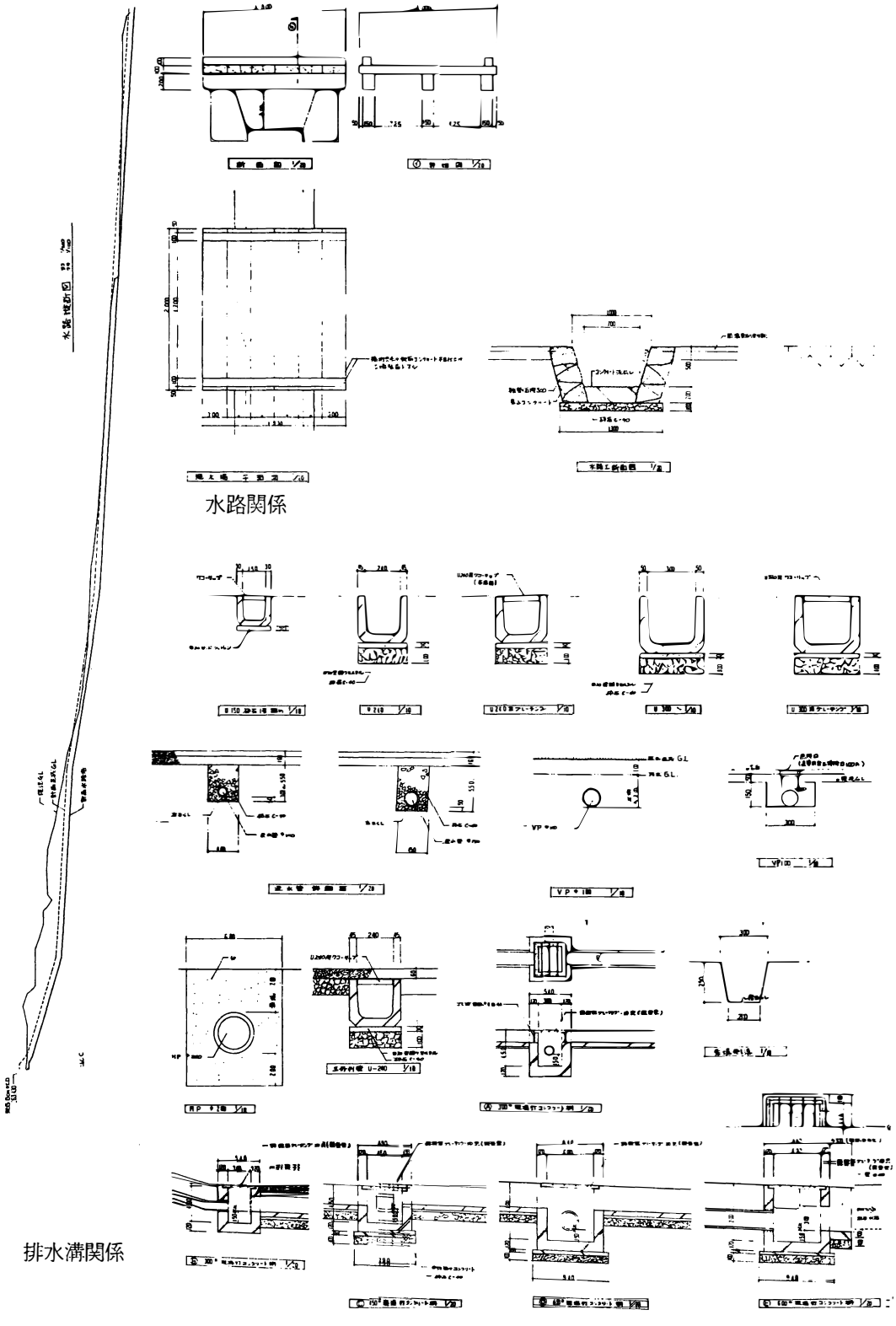


第34図　土工関係詳細図(3)

墳丘階段関係



第35図　土工関係詳細図(4)



第36図　土工関係詳細図(5)

史跡境界杭は、史跡名勝天然記念物標識等設置基準規則第４条に基づき、コンクリート製で、基部をモルタルで固定した。

おわりに

銚子塚古墳、丸山塚古墳の墳形、規模などについて、今回の整備事業に伴う発掘によって今まで以上に明確にできたことと思われる。しかしその反面丸山塚古墳石室の珠文あるいは銚子塚古墳の壷形埴輪、木製品など新たな問題点の出てきたこともまた事実であろう。これらは今後、周辺地域の調査の進展を踏まえて十分に検討を加えなければならないであろう。

史跡が整備され極めて快適な環境となり、多くの人たちにいつでも活用できる状況となったが、この快適な環境を持続させるための十分な管理が必要であろう。また、この管理こそが史跡保護の万全を期すものとなろう。

昭和58年より開始した保存整備事業も今年度をもってすべて終了した。この間、文化庁、調査指導員、風土記の丘整備委員、東京国立文化財研究所の先生方、および現地などで直接、間接に、また整備報告書作成過程で、指導、助言をいただいた多くの先生方、それに整備監理にあたっていただいた石和土木事務所の石原春人、中村育男、村山力の各氏に厚くお礼申し上げます。

註、参考文献

1．上田三平　1930　「銚子塚古墳附丸山塚古墳」『文部省史跡調査報告』５
2．川西宏幸　1978　「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64巻２号
3．橋本博文　1980　「甲斐の円筒埴輪」『丘陵』８号
4．奈良県立橿原考古学研究所　1977　『メスリ山古墳』
5．坂本美夫　1987　「甲斐銚子塚古墳出土の壷形埴輪」『考古学雑誌』72巻４号
6．群馬県藤岡市教育委員会　1982　『堀之内遺跡群』
7．埼玉県史編纂室　1986　『埼玉県古式古墳調査報告書』
8．田口一郎他　1981　『元島名将軍塚古墳』
9．高橋美久二　1985　「長岡京市今里車塚古墳の笠形木製品」『山城郷土資料館報』
10．小林広和他　1984　「各地域における最後の前方後円墳－山梨県」『古代学研究』105
11．小松真一　1928　「甲斐国東八代郡下曽根村丸山塚古墳」『史跡名勝天然紀念物』
12．乙益重隆　1974　『装飾古墳と文様』古代史発掘８

銚子塚古墳附丸山塚古墳整備事業費収支概要

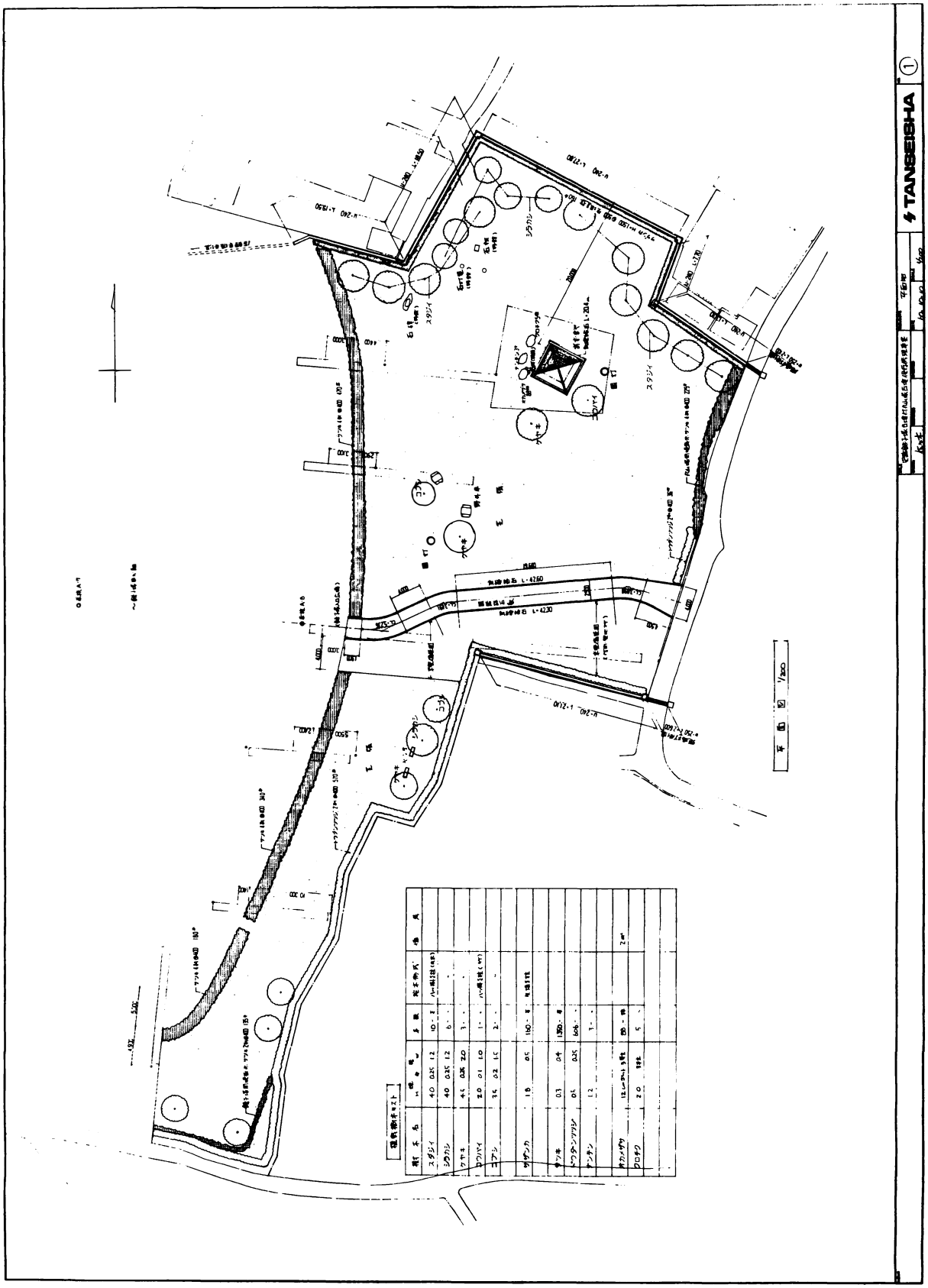
収　入

(単位　千円)

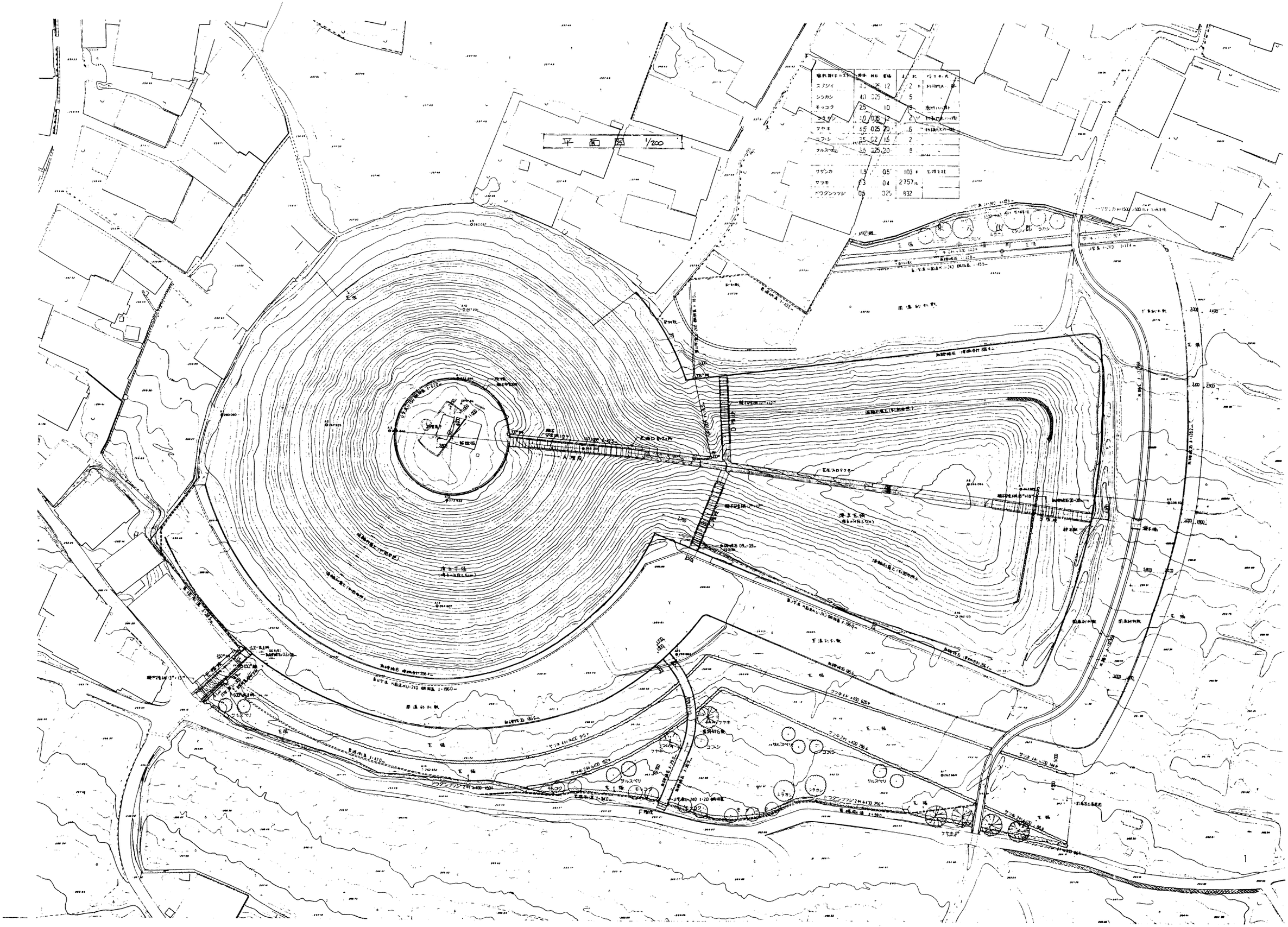
科　　目	昭和58年度	昭和59年度	昭和60年度	昭和61年度	昭和62年度	合　　計
国庫補助金	2,500	10,633	21,988	18,000	12,485	65,606
県　　費	2,500	10,633	21,988	18,000	12,486	65,607
合　　計	5,000	21,266	43,976	36,000	24,971	131,213

支　出

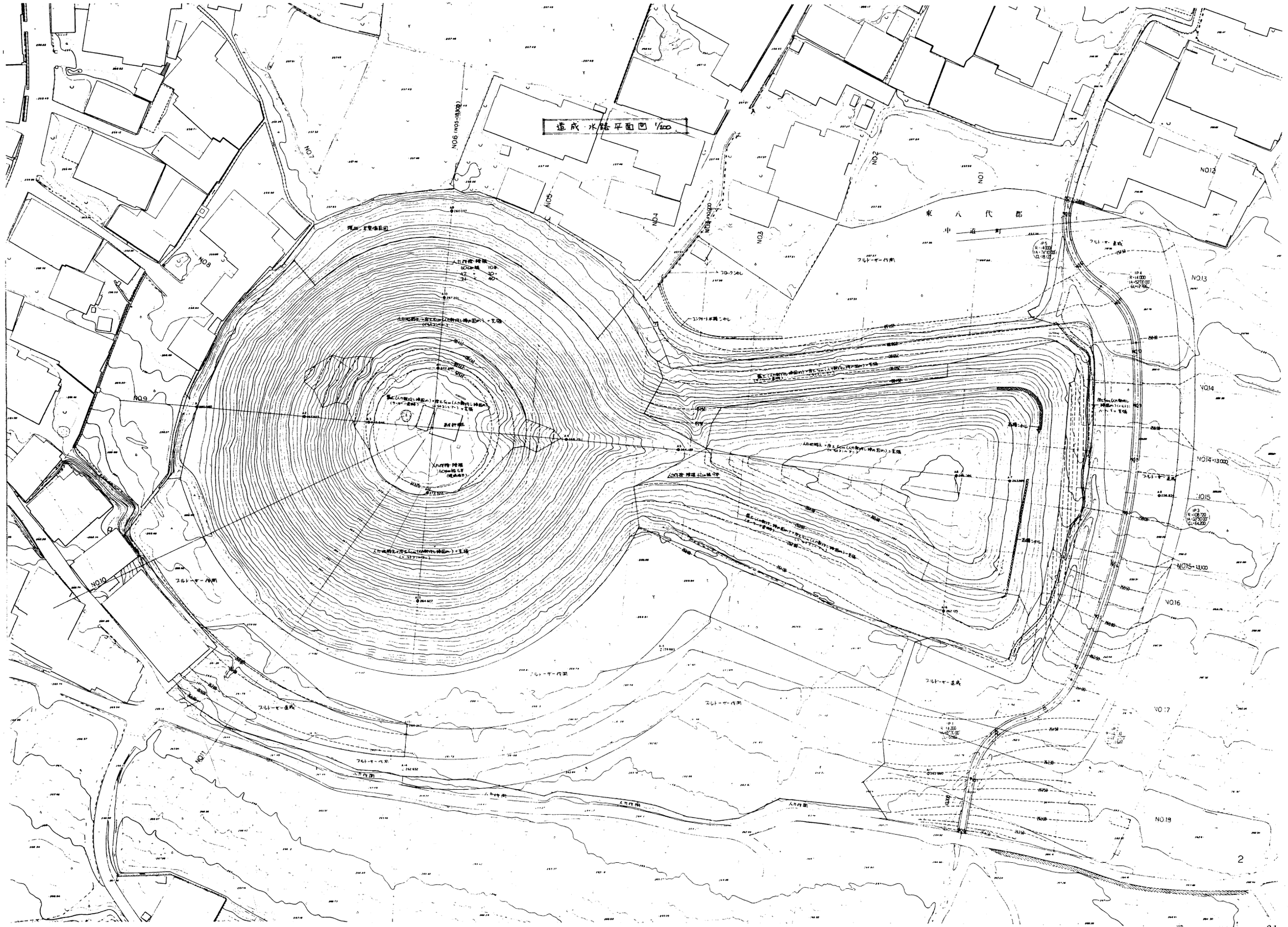
科　　目		昭和58年度	昭和59年度	昭和60年度	昭和61年度	昭和62年度	合　　計
発掘調査費		1,508	2,817	5,332			9,657
地形測量委託費		3,000					3,000
実施設計委託費			1,950	6,200			8,150
工事請負費	史跡境界杭設置・説明板	492					492
	丸山塚古墳墳丘整備		16,499				16,499
	丸山塚古墳周溝・中間地帯整備			32,444			32,444
	銚子塚古墳墳丘・周溝整備				36,000		36,000
	銚子塚古墳植栽・環境整備					24,000	24,000
	整理・報告書・事務費					971	971
合　　計		5,000	21,266	43,976	36,000	24,971	131,213



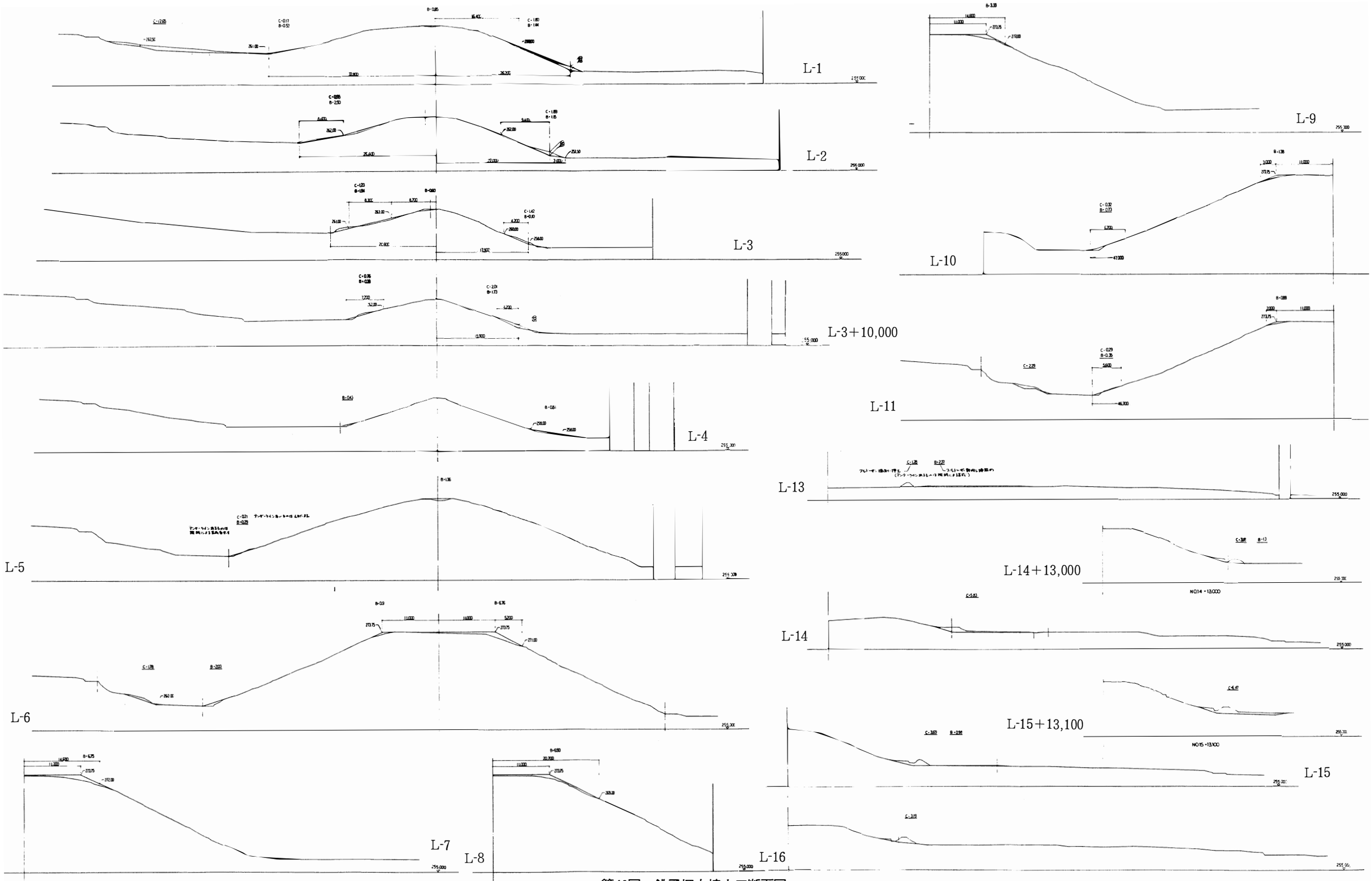
第37図　中間地帯整備平面図



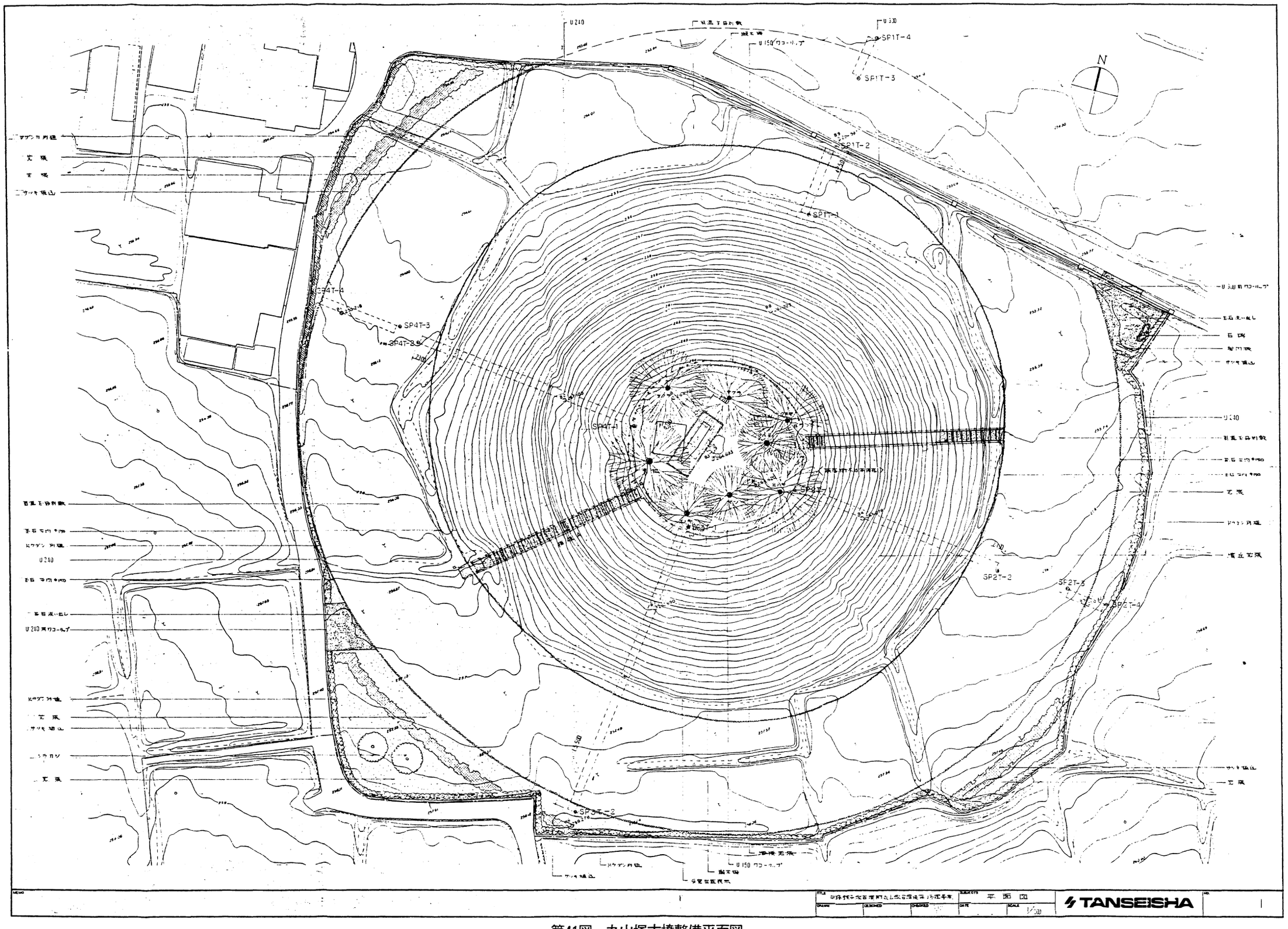
第38図　銚子塚古墳整備平面図



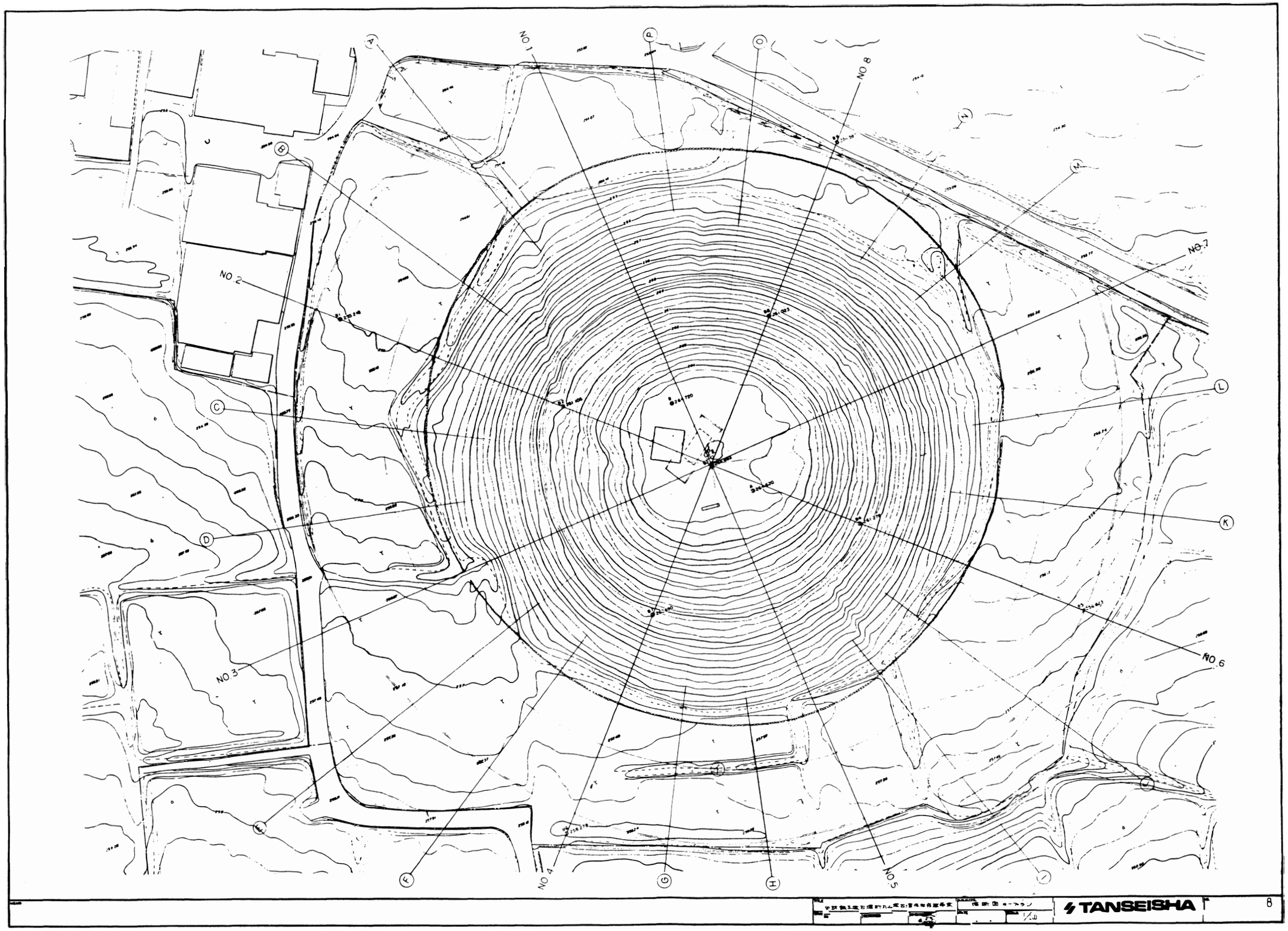
第39図　銚子塚古墳土工平面図



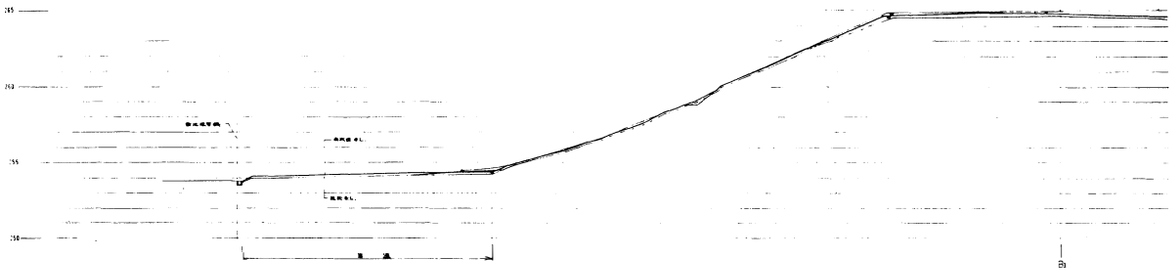
第40図　銚子塚古墳土工断面図



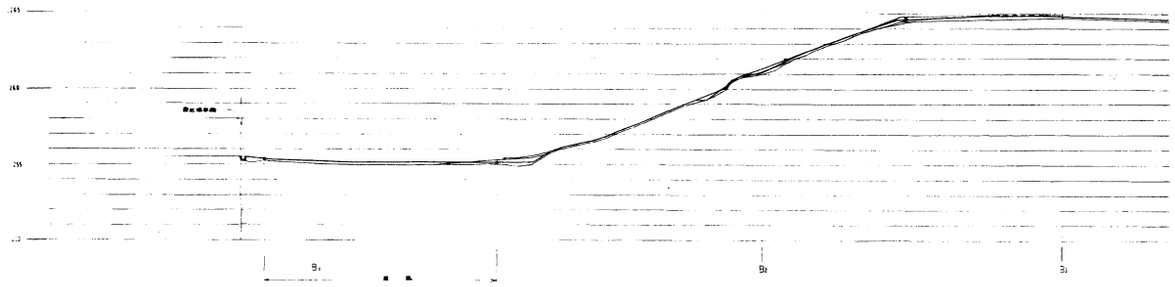
第41図　丸山塚古墳整備平面図



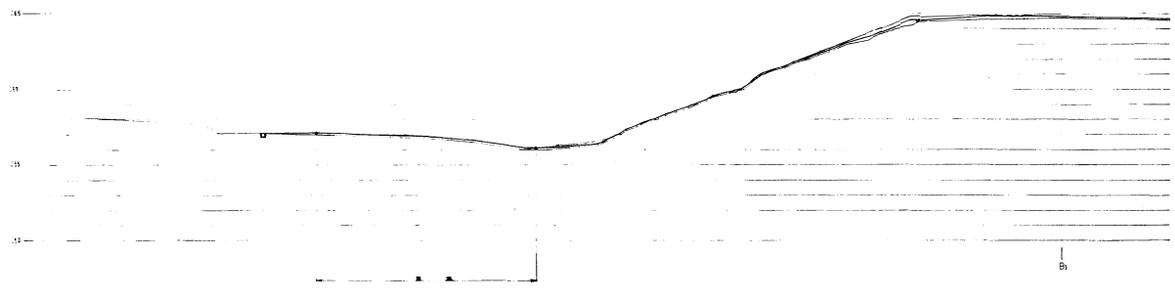
第42図　丸山塚古墳土工平面図



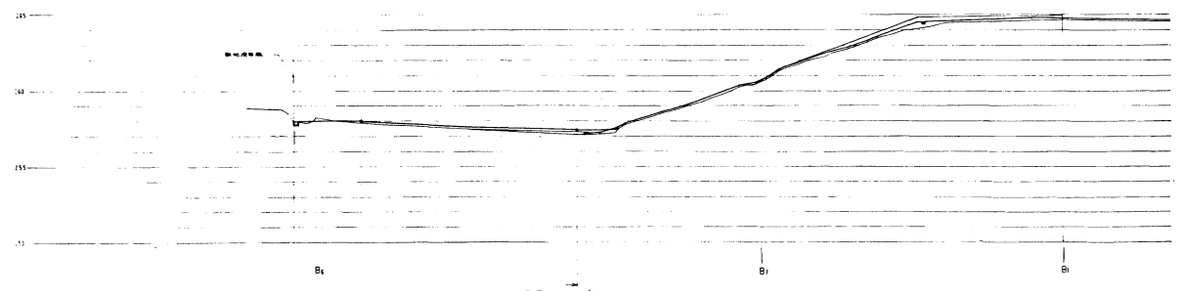
No. 1



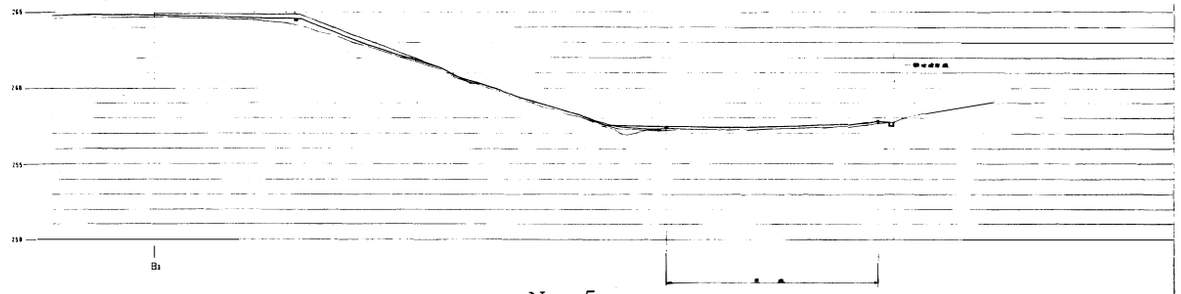
No. 2



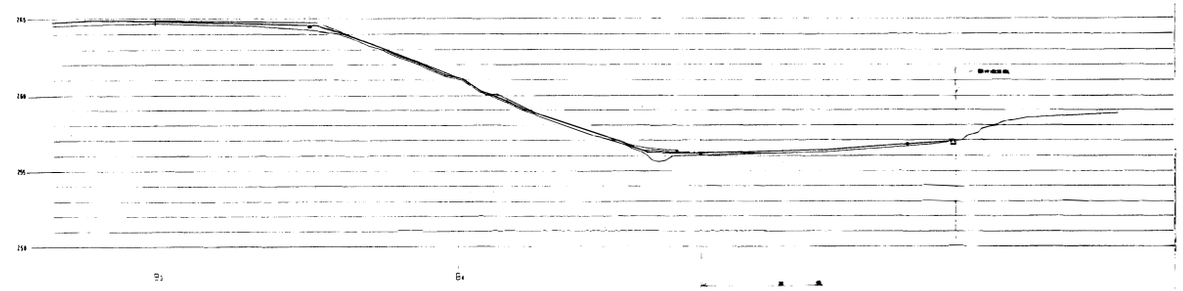
No. 3



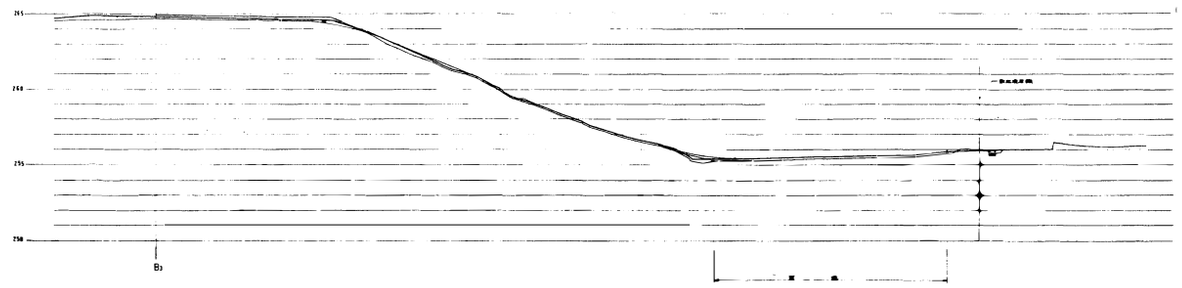
No. 4



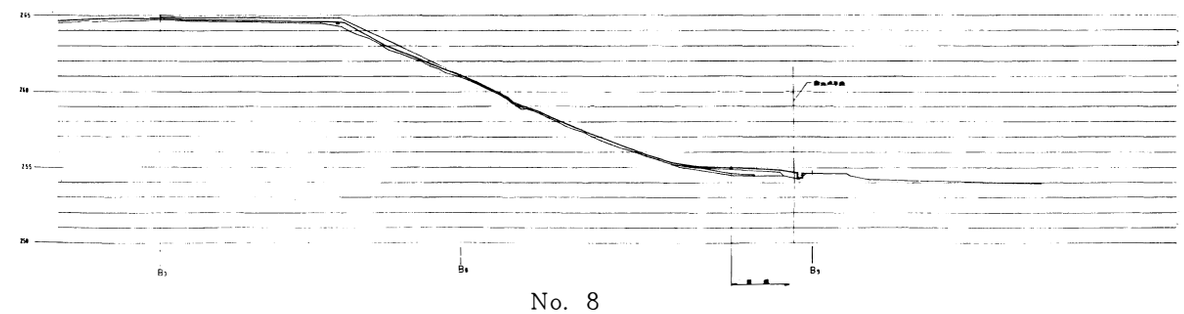
No. 5



No. 6

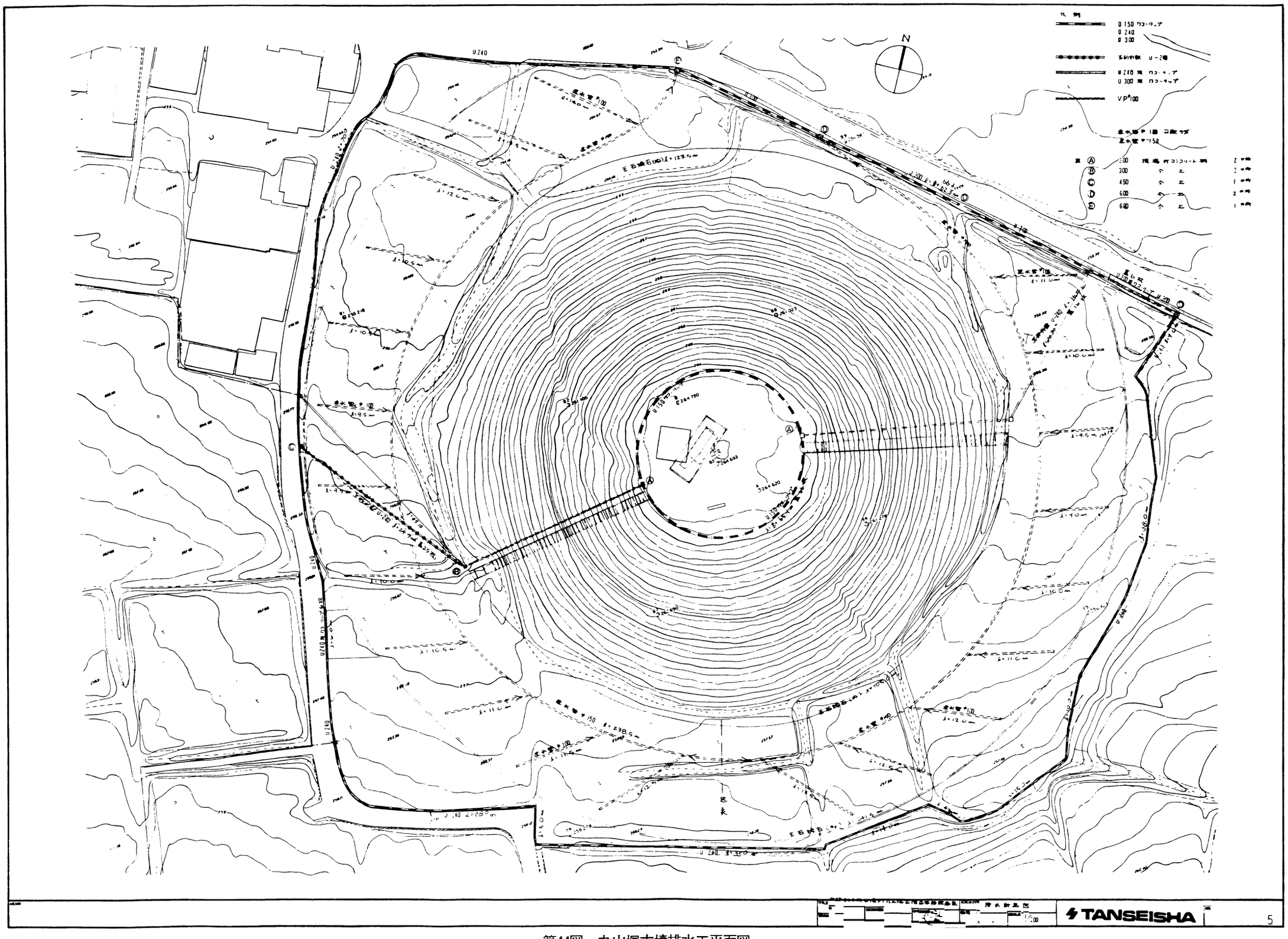


No. 7



No. 8

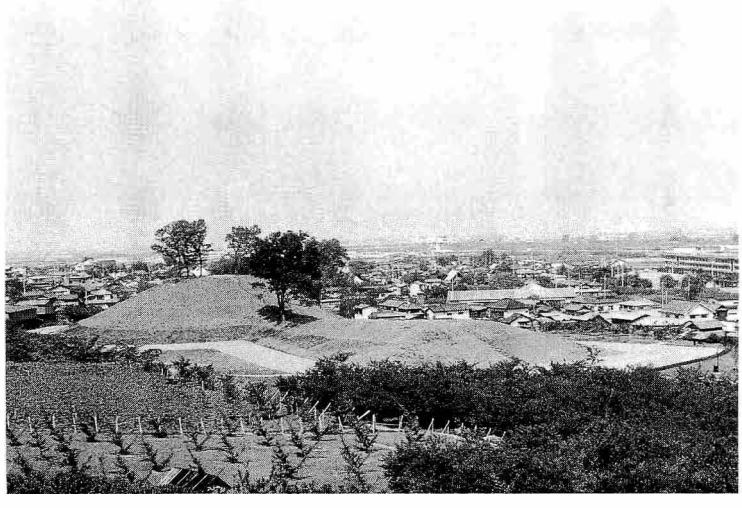
第43図　丸山塚古墳土工断面図



第44図　丸山塚古墳排水工平面図

図　　版

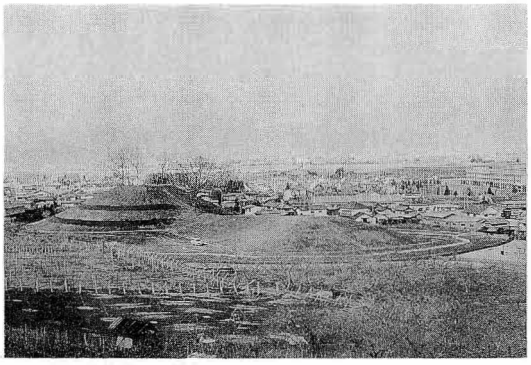
全景（整備前）



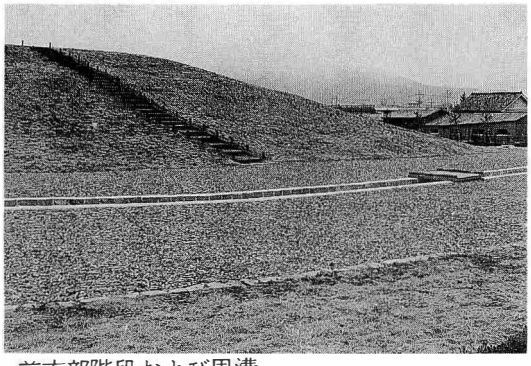
同　（整備後）

同　（整備後）

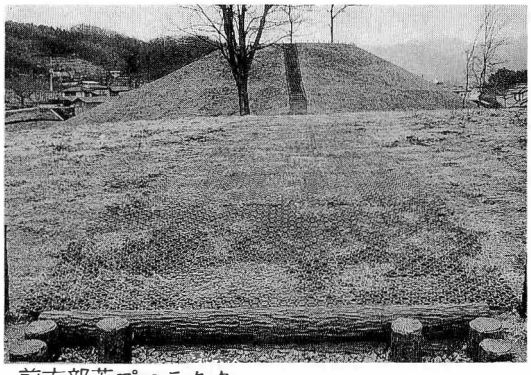
図版二　銚子塚古墳

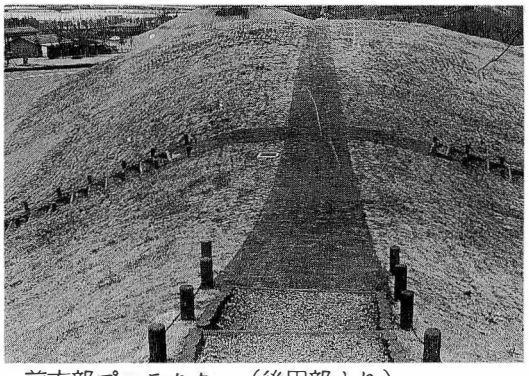

全景（盛り土後）

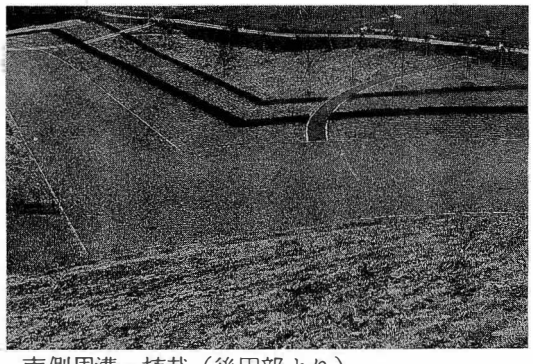
全景（整備後・正面）


前方部階段および周溝

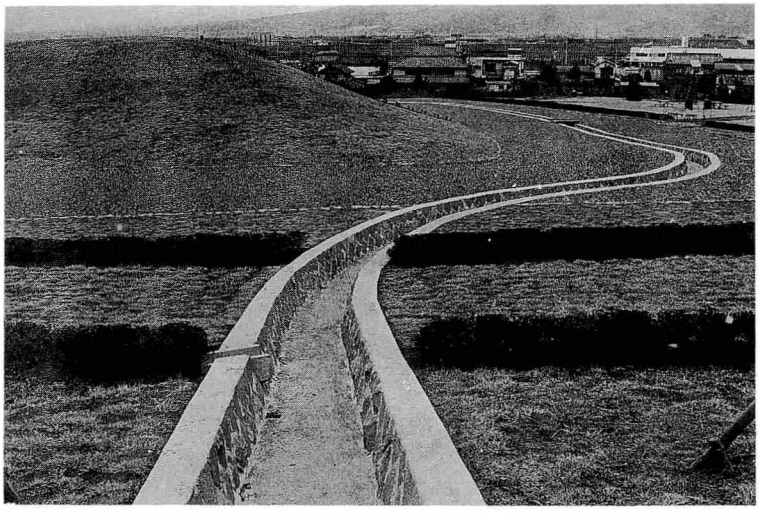
後円部階段


前方部芝プロテクター

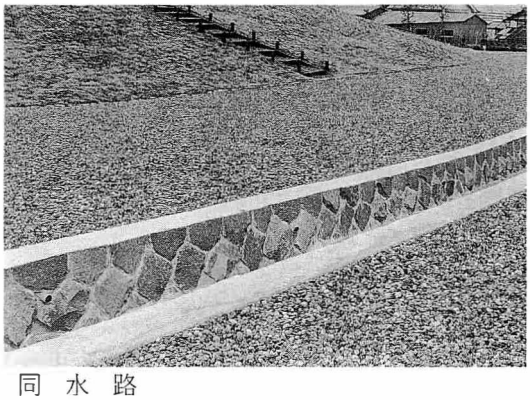

前方部プロテクター（後円部より）


南側周溝・植栽（後円部より）

南側周溝・植栽（後円部周溝より）



周溝内水路



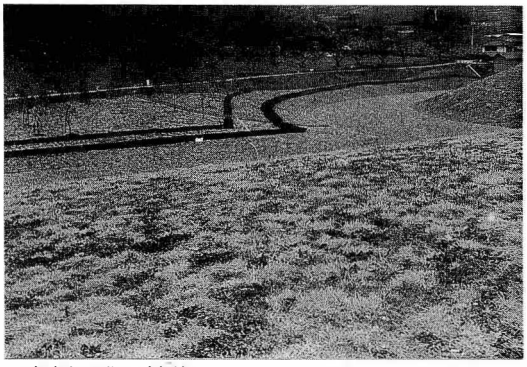
同　水　路

後円部墳丘排水溝・集水桝

前方部墳丘上集水桝

南側周溝外縁階段排水溝

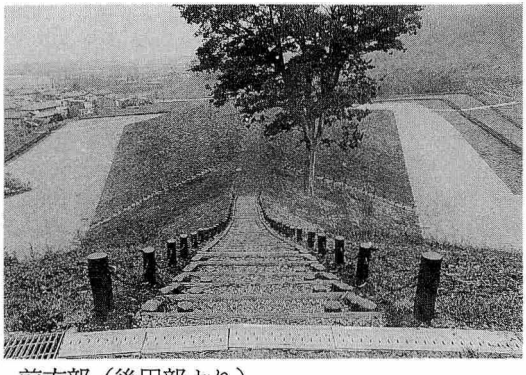
図版四　銚子塚古墳

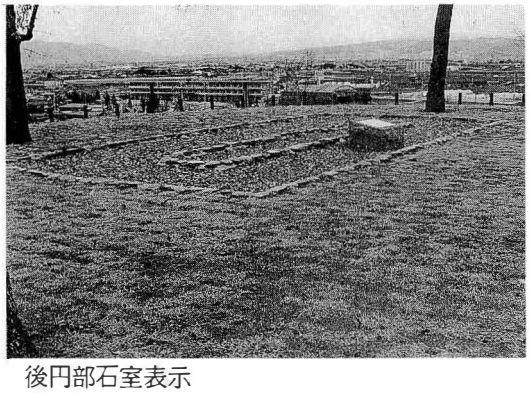

南側周溝・植栽

同　植　栽

前方部正面周溝

前方部正面周溝・中間地帯


前方部（後円部より）


後円部石室表示

同 説 明 板

墳丘盛り土工

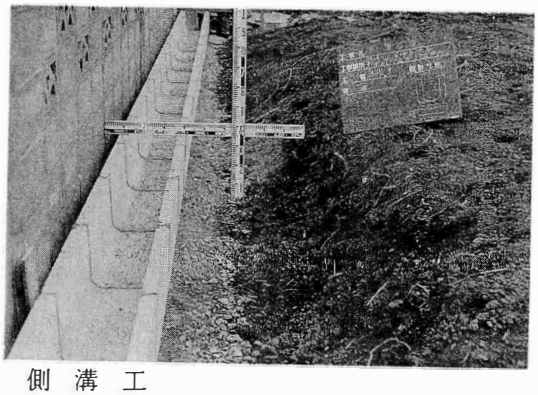
墳丘段表示工

盛り土状況

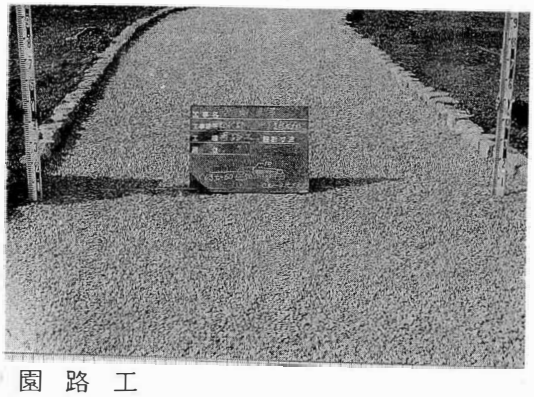
墳端排水工

階　段　工

芝貼り工



側　溝　工



園　路　工

図版六　銚子塚古墳

主　体　部

5号トレンチ上部丘中段テラス面埴輪出土状況

5号トレンチ上部丘葺石

14号トレンチ上部丘葺石

5号トレンチ中部丘葺石

14号トレンチ中部丘葺石

4号トレンチ中部丘中段テラス面埴輪出土状況

図版七　銚子塚古墳

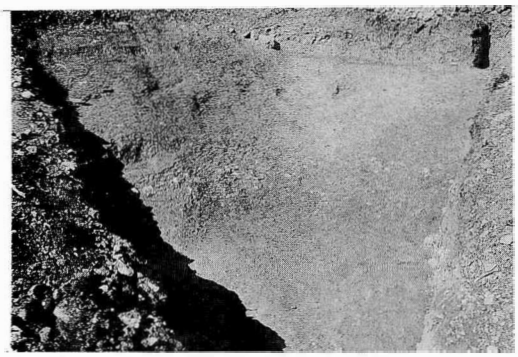
4号トレンチ

4号トレンチ上部丘葺石

4号トレンチ中部丘葺石

6号トレンチ
周溝外縁
立ち上り状況

4号トレンチ墳端石積

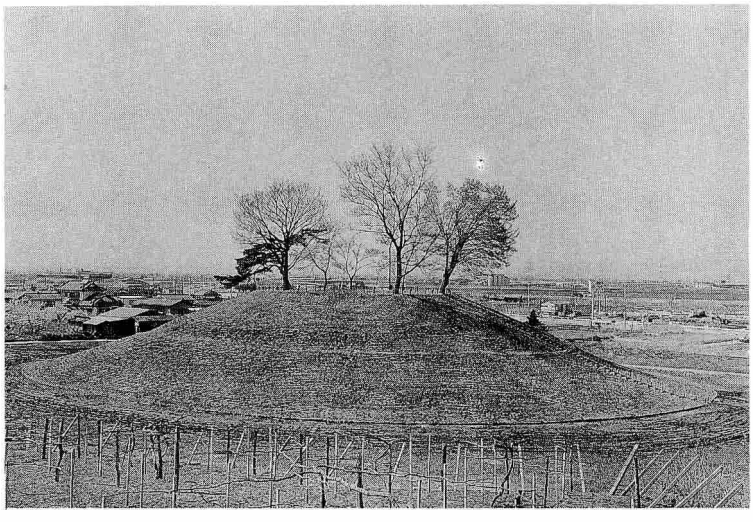


13号トレンチ（くびれ部検出状況）

13号トレンチ木製品出土状況

図版八　丸山塚古墳

全景（整備前）



同　（芝貼り後）

同　（整備後）

墳丘芝貼り・縁石

透水管埋設状況

周溝砂利敷

階段（東斜面）

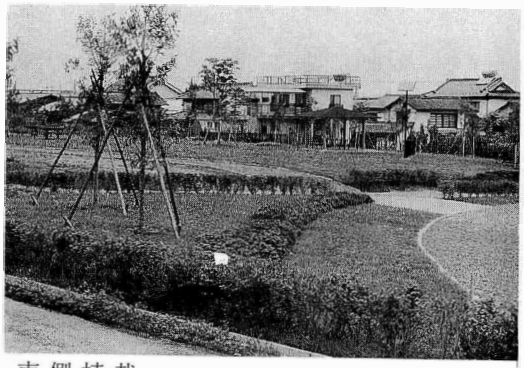
石室表示

説　明　板

墳頂移設構造物移設前

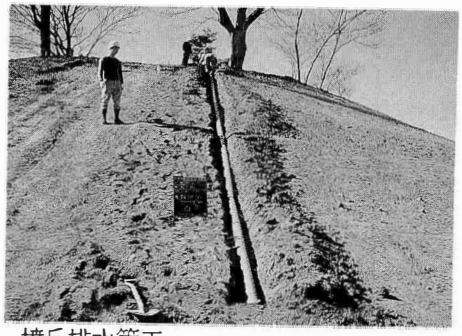
同移設後

図版十　丸山塚古墳

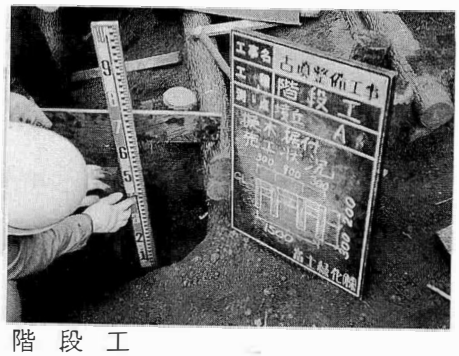


南側植栽

墳丘盛り土工

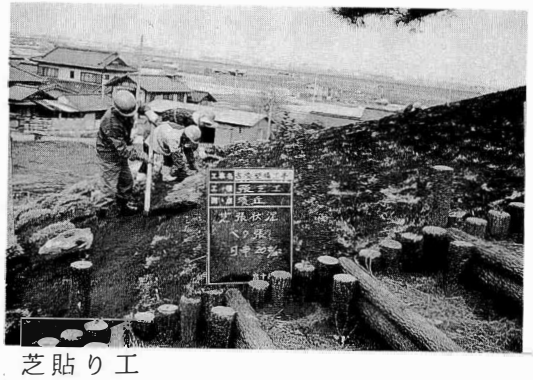


墳丘排水管工



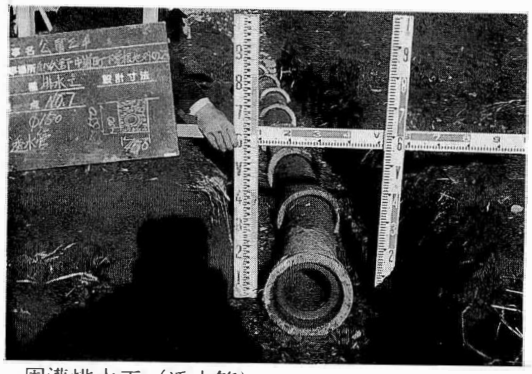
階　段　工

盛り土状況



芝貼り工

周溝縁石工



周溝排水工（透水管）

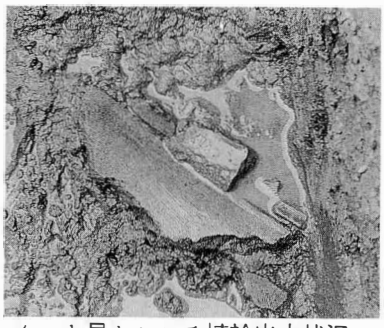
主体部平面

主体部蓋石状況

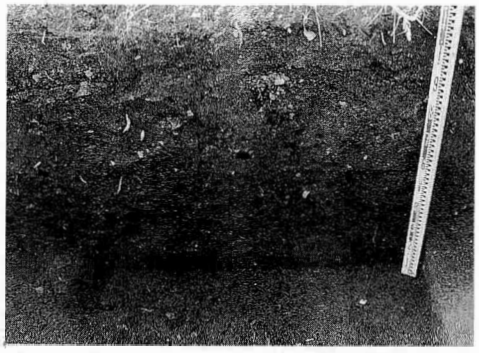
石室北壁

石室西壁珠文

鉋出土状況



4—1号トレンチ埴輪出土状況

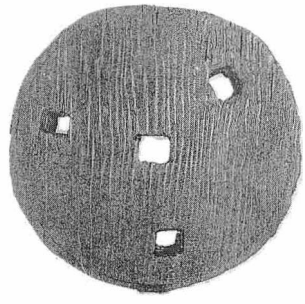


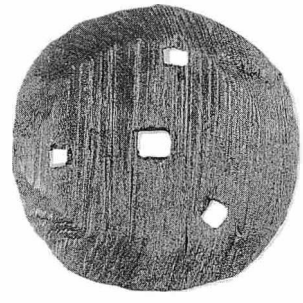
1—1号トレンチ陶磁器片出土状況

図版十二　丸山塚古墳・銚子塚古墳

丸山塚古墳11号トレンチ

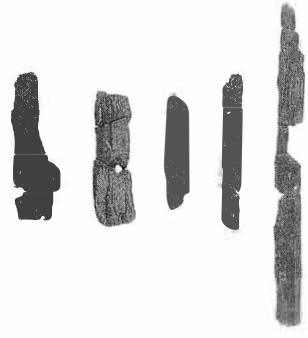
銚子塚古墳５号トレンチ
上部丘中段テラス面出土壺形埴輪





銚子塚古墳13号トレンチ
（くびれ部）出土木製品

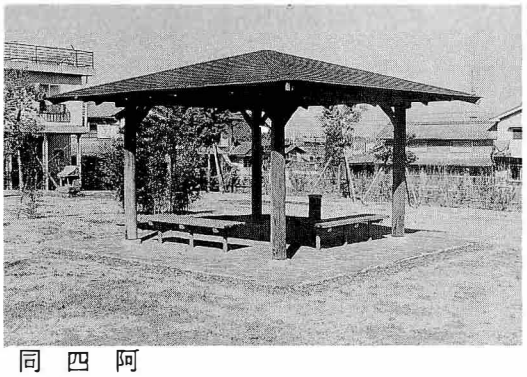
同　　上

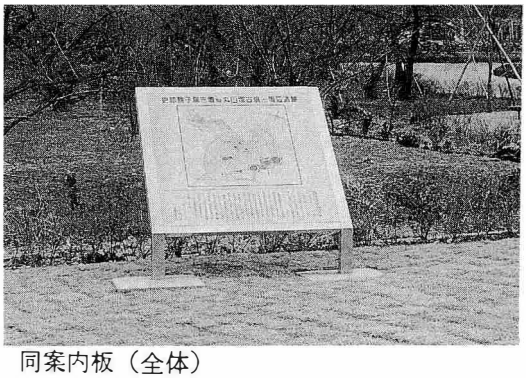


同　　上

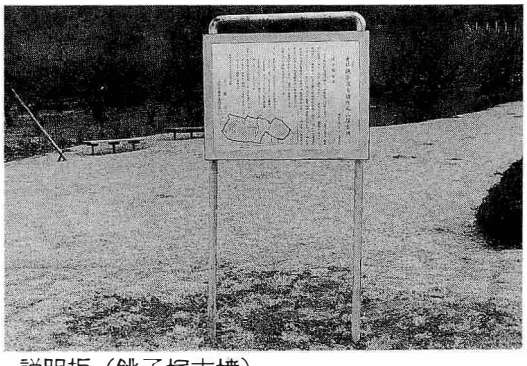
中間地帯休息施設全景

同照明施設


同　四　阿


同案内板（全体）

説明板（丸山塚古墳）


説明板（銚子塚古墳）

史跡境界杭設置状況

印刷日　昭和63年３月25日
発行日　昭和63年３月30日

山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第35集

国指定史跡

銚子塚古墳附丸山塚古墳
保存整備事業報告書

発行所　山梨県教育委員会
印刷所　合資会社　ヨネヤ印刷